

# 南箕輪の史跡の話



# 南箕輪の史跡の話

南箕輪村教育委員会



## 序

この冊子『南箕輪の史跡の話』の前身『南箕輪の史跡』が昭和五四年に刊行され、四十年が経とうとしております。『南箕輪の史跡』は、『南箕輪村誌』へんさん編纂中、歴史遺産のみをまとめて冊子にしたもので「郷土を知り・郷土を見直すには、身近な村の史跡についてその由来や価値を知ることが重要」としてまとめられ、大事な資料として地域・村外の方々に広く活用されてきております。

『南箕輪の史跡の話』は、その改訂版で『南箕輪の史跡』編纂の考えを引き継ぐとともに、新たに発見された資料、取材範囲を広げて得た資料を加味し「私達の村が今に至る足跡、先人達の思いや営み等を明らかにしよう」とまとめられました。

情報化社会の急激な進展の中にある今であるからこそ、『南箕輪の史跡の話』をガイドブックとして村内を巡り<sup>めぐ</sup>村の歴史を理解するとともに、村をつくり上げてきた人々の気持ちや考えに触れることを、期待するものであります。

調査編纂刊行にあたっては、文化財専門委員を中心に、村内各地域の有識者・関係者の皆様方の多大なるお力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

南箕輪村教育委員会

教育長 清水 閣成



## 例言

一、この冊子は、昭和五四年に刊行された『南箕輪の史跡』を改訂したものです。

教育委員会より「村制一五〇周年を迎えるにあたってすべき事」の諮問を受け、現在利用の多い『南箕輪の史跡』を、より利用しやすいものにしたという事で、文化財専門委員会が取り組んで作ったものです。

二、改訂の要点は次の通りです。

(一) 利用する人々を更に広げるために、表現も内容も易しく分かりやすいものにする。

(二) 四〇年経過した中で、補充したいこと・変化したことなども加味する。

三、改訂に当たって、留意したことは次の通りです。

(一) 扱い易くするために、B5版・二〇〇ページ前後のものにする。

(二) 親しみ易く、読み易くするために

1. 写真はカラー写真にし、できるだけ多く取り入れる。

2. 文体は「です・ます」にし、中学生も平易に読めるようにする。

3. 読みが難しいと思われる言葉にはルビをつける。

(三) 『南箕輪の史跡』には、説明の根拠となる「注」が多く入り、それが漢文等で書かれていて難解と思われるので、内容を出来るだけ本文の中へ簡明に取り入れ、「注」は少なくする。

(四) 『南箕輪の史跡』にはない「道路」・「公共施設」・「用水」などのことも「史跡」の一つと考え取り上げる。

(五) 写真・図版などで、古いもので入手困難なものは『南箕輪の史跡』・『南箕輪村誌』他からも転用する。





神子柴遺跡出土「神子柴型石器」(国重要文化財) 66点のうちの一部



人体文付有孔罎付土器（久保「上ノ平遺跡」出土）



釣手土器（大泉「北高根遺跡」出土）



浅鉢（久保「上ノ平遺跡」出土）



村指定文化財「新四国霊場」(北殿)



村指定文化財 勝光寺の「十一面観音像」(大泉)



村指定無形文化財「大和泉神社鹿踊り」



村指定無形文化財 民謡「御嶽山」(大泉)



村指定天然記念物「エドヒガン桜」(北殿)



村指定天然記念物「恩徳寺の大銀杏」(沢尻)

村指定文化財「大宗館文庫」(村郷土館)  
南殿 有賀家より寄贈された書画・図書・古文書類



郷土館に展示されている書画



文庫の中にある浮世絵の一枚



村指定文化財「大和泉神社本殿」の立川流小口直四郎の彫刻



村指定文化財の「御射山社」碑（神子柴）



西原(南原の西)の碑

## 開拓

南箕輪12区のうち、北原・大芝・南原地区は山林原野の開拓によってできました。



左：開墾鋤 右：普通の鋤

厚く大きな鋤で開墾した(郷土館蔵)

## 水を求めて

水が少ない西部地区へ水をという願いで、水を求めて村人は苦闘して来ました。(昭和に入るまで)



芋ノ田の横井戸(神子柴 — 信大玄関南)



西天竜水路に付設した円筒分水槽

# 目次

## 第一 全村

### 一 南箕輪村の由来

### 二 交通

#### (一) 春日街道

#### (二) 伊那街道

#### (三) 権兵衛街道

#### (四) 中央道・大型農道等

#### (五) 飯田線(電車)

#### (六) 天竜川通船

#### (七) 橋と渡し舟

## 三 入会山野の分割と飛び地

### (一) 飛び地の概略

### (二) 御射山分割記念碑

### (三) 造林記念碑

## 四 河川・用水

### (一) 天竜川

### (二) 大泉川・清水川・戸谷(鳥谷)川

### (三) 西天竜幹線水路

### (四) 湧水と横井戸

### (五) 上下水道

## 第二 久保

### 一 久保の由来

### 二 神社

#### (一) 神明宮

#### (二) 境内社他

#### (三) 山の神社跡

#### (四) 滝権現・日光権現跡

#### (五) 白山神社碑

### 三 寺堂

#### (一) 西念寺跡

#### (二) 境内堂仏

#### (三) 久保寺跡

## 四 久保学校

## 五 古跡名勝

### (一) 柵木城跡

### (二) 箕輪遺跡

### (三) 上ノ平遺跡

### (四) 丸山古墳

### (五) 伊那街道跡

(六) 排水・揚水

一	三
二	六
(一)	七
(二)	七
(三)	八
(四)	九
(五)	一〇
(六)	二
(七)	二
三	三
(一)	三
(二)	三
(三)	三
四	四
(一)	四
(二)	五
(三)	六
(四)	七
(五)	八
(六)	一
一	三
二	四
(一)	四
(二)	五
(三)	三
(四)	三
(五)	三
三	六
(一)	六
(二)	七
(三)	六
四	六
五	六
(一)	六
(二)	六
(三)	六
(四)	三
(五)	三

	(六) 天王	三
<b>六 碑</b>		
	(一) 利澤千秋碑	三
	(二) 桐亭良亮筆塚	三
	(三) 一貫句碑(日ぐらし塚)	三
	(四) 馬場水師夫妻句碑	三
	(五) 庚申塚	三
	(六) 旧西念寺入口の碑・像	三
	(七) 水神	三
	(八) 道祖神	三
<b>七 用水</b>		
	(一) 上井・下井	三
	(二) 沢(北沢・南沢・滝ノ沢)	三
	(三) 簡易水道	三
	(四) 横井戸	三
<b>第三 塩ノ井</b>		
	一 明治一年(一八六八)の塩ノ井絵図	三
	二 塩ノ井の由来	三
	三 塩ノ井神社と境内社	三
	(一) 塩ノ井神社	三
	(二) 境内社	三
	四 西光寺	三

	(一) 所蔵の文化財	三
<b>五 遺跡・旧跡</b>		
	(一) 遺跡	三
	(二) 古宮跡	三
	(三) 郷土ケ窪	三
	(四) 塚畑	三
	(五) 富士塚跡	三
	(六) 上人塚	三
	(七) 蚕玉様	三
	(八) 郷蔵	三
	(九) 猿田彦命の上棟札	三
	(十) 翁塚	三
<b>六 句碑・顕彰碑など</b>		
	(一) 開田記念碑	三
	(二) 鍾水の碑	三
	(三) 征矢吉兵衛 歌碑	三
	(四) 征矢貫通 歌碑	三
	(五) 征矢真白翁碑(筆塚)	三
	(六) 征矢政十郎君碑	三
	(七) 道祖神	三
	(八) 寒念仏供養碑(道標を兼ねている)	三
	(九) 庚申塚	三

七 用水 …………… 五

(一) 生活用水 …………… 五

(二) 水車場利用 …………… 五

(三) 水田用水 …………… 五

八 交通 …………… 五

(一) 伊那街道(後の三州街道) …………… 五

(二) 居村の里道 …………… 五

第四 北殿 …………… 五

一 北殿の由来 …………… 五

二 神社 …………… 五

(一) 北殿神社 …………… 五

(二) 天満宮(天神様) …………… 五

(三) 里宮神社跡 …………… 五

(四) 駒形大明神社跡 …………… 五

(五) 山の神社跡 …………… 五

三 松林寺 …………… 五

四 新四国霊場(お四国様) …………… 五

(一) 有賀嘉吉のこと …………… 六

(二) 霊場建立の趣旨と経過 …………… 六

(三) 諸国神社仏閣塔 …………… 六

(四) 信仰と保存 …………… 六

五 遺跡・古跡・名木 …………… 六

(一) 北垣外遺跡 …………… 六

(二) 倉田城跡(付 倉田将監墓・北条丹後墓) …………… 六

(三) 浅間塚跡碑 …………… 六

(四) エドヒガン桜 …………… 六

六 句碑・筆塚・歌碑・顕彰碑等 …………… 六

(一) 芭蕉句碑(おきな塚) …………… 六

(二) 矢部螻堂筆塚 …………… 六

(三) 伊藤翁筆塚 …………… 六

(四) 倉田寛幹歌碑 …………… 六

(五) 倉田翁頌徳碑 …………… 六

(六) 南箕輪中学校校歌碑 …………… 六

(七) 「若竹」の像 …………… 六

(八) 「人には自らは」の碑 …………… 六

七 信仰碑 …………… 六

(一) 庚申塚・甲子塔 …………… 六

(二) 道祖神 …………… 六

(三) 月待信仰碑 …………… 六

(四) 山岳信仰碑 …………… 六

(五) 水神碑 …………… 六

八 近代施設 …………… 七

(一) 北殿学校跡 …………… 七

(二) 南箕輪郵便局 …………… 七

	(三) 南箕輪村郷土館	七		(一) 宮ノ上遺跡	六
	(四) 長田製糸工場跡	七		(二) 有賀の城	六
	九 用水路	七		(三) 長慶塚跡	七
	(一) 生活用水	七		(四) 不死清水	七
	(二) 水田用水	七		(五) 松根油採取松	六
	十 交通	七		(六) 猪ノ子柴	六
	(一) 北殿宿(大泉北殿合宿)	七		(七) 同盟田跡(場所は地図参照)	六
	(二) 北殿駅	七		六 碑	六
	(三) 北殿橋(天竜橋)	七		(一) 迪斎先生筆塚	六
	(四) 道標	七		(二) 南殿の里六人一首の寿碑	六
	第五 南殿	七		(三) 霊松一本木遺祉碑	六
	一 南殿の由来	八		(四) 慰霊碑	六
	二 神社	八		(五) 母子像	六
	(一) 殿村八幡宮	八		(六) 南箕輪小学校校歌碑	六
	(二) 神明宮	八		(七) 南箕輪小学校開校記念碑他	六
	(三) 三峯神社	八		(八) 庚申塚の碑	六
	三 堂庵	八		七 用水	六
	(一) 行者堂(龍麟閣)跡	八		(一) 川からの引水	六
	(二) 地藏庵(田明庵とも言われた)跡	八		(二) 湧水	六
	(三) 十王堂跡	八		(三) 横井戸	六
	四 南殿学校跡	八		八 公共施設等	六
	五 遺跡・古跡	八		(一) 南箕輪村役場	六

第六 田畑

- (一) 南箕輪農業協同組合 …………… 七
- (二) 村診療所 …………… 九
- (三) 駐在所 …………… 九
- (四) …………… 九

一 田畑の由来

…………… 〇

二 社寺等

…………… 〇

(一) 田畑神社

…………… 〇

(二) 堂跡

…………… 三

三 田畑学校跡

…………… 四

四 古跡

…………… 五

(一) 清水城跡

…………… 五

(二) 日戸氏館跡

…………… 六

(三) 富士塚(浅間塚)

…………… 六

(四) 弁天ヶ崎

…………… 七

五 碑

…………… 八

(一) 芭蕉塚(尾花塚)

…………… 八

(二) 庚申塚

…………… 九

(三) 道祖神碑

…………… 〇

(四) 水神碑

…………… 〇

(五) 馬頭観音碑

…………… 二

(六) 青山榛三郎歌碑 二基

…………… 三

六 用水

…………… 三

第七 神子柴

- (一) 半沢井 …………… 三
- (二) 伊賀島井他 …………… 三
- (三) 精進舎(屋)井 …………… 四
- (四) 伊那土地改良組合排水路(くろ川) …………… 四
- (五) 揚水機場 …………… 四
- (六) 下水処理場 …………… 五

七 街道

…………… 五

(一) 伊那街道

…………… 五

(二) 山道とかんの道

…………… 六

(三) 新しい道

…………… 七

(四) 明神橋

…………… 七

(五) 田畑駅

…………… 八

一 神子柴の由来

…………… 九

二 神社

…………… 八

(一) 神子柴神社

…………… 三

(二) 境内社

…………… 三

(三) 御射山社(御射山社鳥居跡)

…………… 三

三 お堂など

…………… 五

(一) 薬師堂

…………… 五

(二) 金剛院

…………… 六

(三) 役の行者の石像

…………… 六

#### 四 公共施設

- (一) 神子柴学校跡 …………… 二六
- (二) 公民館 …………… 二七
- (三) 保育園(所) …………… 二六
- (四) 上伊那農業高等学校第二農場(中の原農場) …… 二六
- (五) 信州大学農学部 …………… 二六

#### 五 古跡など

- (一) 神子柴遺跡 …………… 二九
- (二) 古城跡こじょう …………… 三〇
- (三) 五輪塔ごりんとう …………… 三〇
- (四) 内城跡 …………… 三三
- (五) 高木氏館跡 …………… 三三
- (六) 天竜川通船 …………… 三三
- (七) 高木館製糸場(所)跡 …………… 三三

#### 六 石碑

- (一) 庚申塚・甲子塔など …………… 三三
- (二) 道祖神 …………… 三三
- (三) 駒形道の碑 …………… 三四
- (四) 川原の碑 …………… 三四
- (五) 芋ノ田の碑 …………… 三五
- (六) 神子柴水道水神碑 …………… 三五
- (七) 伊奈誠一郎 慰霊碑 …………… 三五

#### (八) 宮ヶ崎の碑

#### 七 用水

- (一) 生活用水(神子柴水道) …………… 三六
- (二) 半沢井 …………… 三六
- (三) 川原井 …………… 三六

#### 八 橋

- (一) 大清水橋跡 …………… 三六
- (二) 神子柴橋 …………… 三七

#### 九 道路

- (一) 伊那街道筋 …………… 三七
- (二) 東西の道 …………… 三八
- (三) 国道一五三号線(伊那バイパス) …………… 三八

#### 第八 沢尻

#### 一 沢尻の由来

#### 二 神社

- (一) 日光社月光社 …………… 四〇
- (二) 伊雑皇大神宮いざわこうだい …………… 四一
- (三) 諏訪社 …………… 四一

#### 三 恩徳寺

- (一) 本尊 不動明王 …………… 四三
- (二) 本尊以外の仏像 …………… 四三
- (三) 堂宇 …………… 四四

(四) 大銀杏	……………	一四一
四 沢尻学校跡	……………	一四一
五 宮島氏館跡	……………	一四一
六 碑	……………	一四一
(一) 成田山開山記念碑	……………	一四一
(二) 庚申塚 <small>こうしんづか</small>	……………	一四一
(三) 水神	……………	一四一
(四) 供養塔	……………	一四一
(五) 「舊領主太田家分墓」碑 <small>きゅうりゆう</small> （江戸時代箕輪領主）	……………	一四一
(六) 丁石 <small>ちやうせき</small>	……………	一四一
七 横井戸	……………	一四一
(一) 月見横井	……………	一四一
八 学校関係	……………	一五〇
(一) 長野県上伊那農業高等学校	……………	一五〇
(二) 長野県上伊那高等学校 中の原農場（上農寮）	……………	一五〇
第九 大泉	……………	一五三
一 大泉の由来	……………	一五三
二 神社・仏閣	……………	一五三
(一) 大和泉神社	……………	一五三
(二) 境内社	……………	一五三
(三) 高根社・山の神	……………	一五三
(四) 大泉山勝光寺	……………	一五三

三 大泉学校	……………	一六二
四 古跡	……………	一六三
(一) 高根遺跡	……………	一六三
(二) 大泉氏の館址	……………	一六三
(三) 一里塚址	……………	一六四
(四) 蛇塚	……………	一六四
(五) 立石	……………	一六四
五 道路	……………	一六五
(一) 道標	……………	一六五
(二) 春日街道	……………	一六五
(三) かない道	……………	一六五
六 碑	……………	一六七
(一) 庚申塚など	……………	一六七
(二) 道祖神	……………	一六八
(三) その他の碑	……………	一六八
(四) 開墾の碑	……………	一六八
七 井堰・横井戸	……………	一六九
(一) 下井	……………	一六九
(二) 上井 <small>うわい</small>	……………	一六九
(三) 新井 <small>しんい</small>	……………	一七〇
(四) 横井戸	……………	一七〇

第十 南原 …… 一七三

一 南原の由来 …… 一七四

二 神社 …… 一七五

(一) 二宮神社 …… 一七五

(二) 天満宮 石碑 …… 一七六

三 遺跡 …… 一七六

(一) 南原遺跡 …… 一七六

(二) 曾利目遺跡 …… 一七七

(三) その他の遺跡 …… 一七七

四 碑 …… 一七七

(一) 南原「拓魂」の碑 …… 一七七

(二) 西原「拓魂」の碑 …… 一七六

(三) 水神碑 …… 一七六

(四) 道標 …… 一七九

(五) その他 …… 一八〇

五 公共施設 …… 一八二

(一) 南部小学校(学校の位置は沢尻地区です) …… 一八二

(二) 長野県南信工科短期大学校 …… 一八二

第十一 大芝 …… 一八三

一 大芝の由来 …… 一八四

二 神社 …… 一八六

(一) 大芝神社 …… 一八六

(二) 天満宮 …… 一八六

三 遺跡 …… 一八六

(一) 大芝原遺跡 …… 一八六

(二) 大芝東遺跡 …… 一八七

(三) 横井戸跡 …… 一八八

(四) 富士塚(「田畑」の項参照) …… 一八八

四 碑 …… 一八八

(一) 開拓記念碑 …… 一八八

(二) 西天竜大泉川南再圃場整備完成記念碑 …… 一八九

(三) 句・歌碑 …… 一九〇

(四) 寒念仏 碑 …… 一九〇

(五) 道標 …… 一九〇

(六) 馬頭観世音 碑 …… 一九一

(七) 庚申碑 …… 一九一

(八) 畜魂 碑 …… 一九一

五 公共施設 …… 一九二

(一) 社会福祉関係 …… 一九二

(二) 大芝公園施設 …… 一九二

第十二 北原 …… 一九三

一 北原の由来 …… 一九四

二 諏訪神社 …… 一九四

三 権理塚ごんりづか …… 一九五

四	庚申塚	……………	一九五
五	用水	……………	一九五
	(一) 豎て井戸	……………	一九五
	(二) 水道創設	……………	一九六
	(三) 農業用水	……………	一九六
六	公民館	……………	一九六
第十三	中込	……………	一九七
	一 中込の由来	……………	一九九
	二 中込城跡	……………	一九九
	三 中込公民館	……………	二〇〇
第十四	資料	……………	二〇一
	一 『長野県町村誌』について	……………	二〇二
	二 田中城址	……………	二〇二
	三 上農寮跡と村上明彦先生と信州大学農学部	……………	二〇三
四	碑や社寺等を見学するための参考	……………	二〇四
	(一) 山の神	……………	二〇四
	(二) 水神	……………	二〇四
	(三) 庚申信仰	……………	二〇四
	(四) 日待・月待信仰	……………	二〇六
	(五) 道祖神	……………	二〇六
	(六) 観音信仰―馬頭観音碑も含めて	……………	二〇七
	(七) 地藏信仰	……………	二〇七

(八)	薬師信仰	……………	二〇八
(九)	十二神将	……………	二〇八
(十)	十王信仰	……………	二〇八
(十一)	甲子信仰	……………	二〇八
(十二)	山岳信仰	……………	二〇九
(十三)	筆塚	……………	二〇九
(十四)	社寺建築用語	……………	二〇九
五	南箕輪遺跡一覧表	……………	二二三
六	南箕輪小学校沿革概表	……………	二二三
七	南箕輪村にあった横井戸一覧表	……………	二三四
	あとがき	……………	二三五

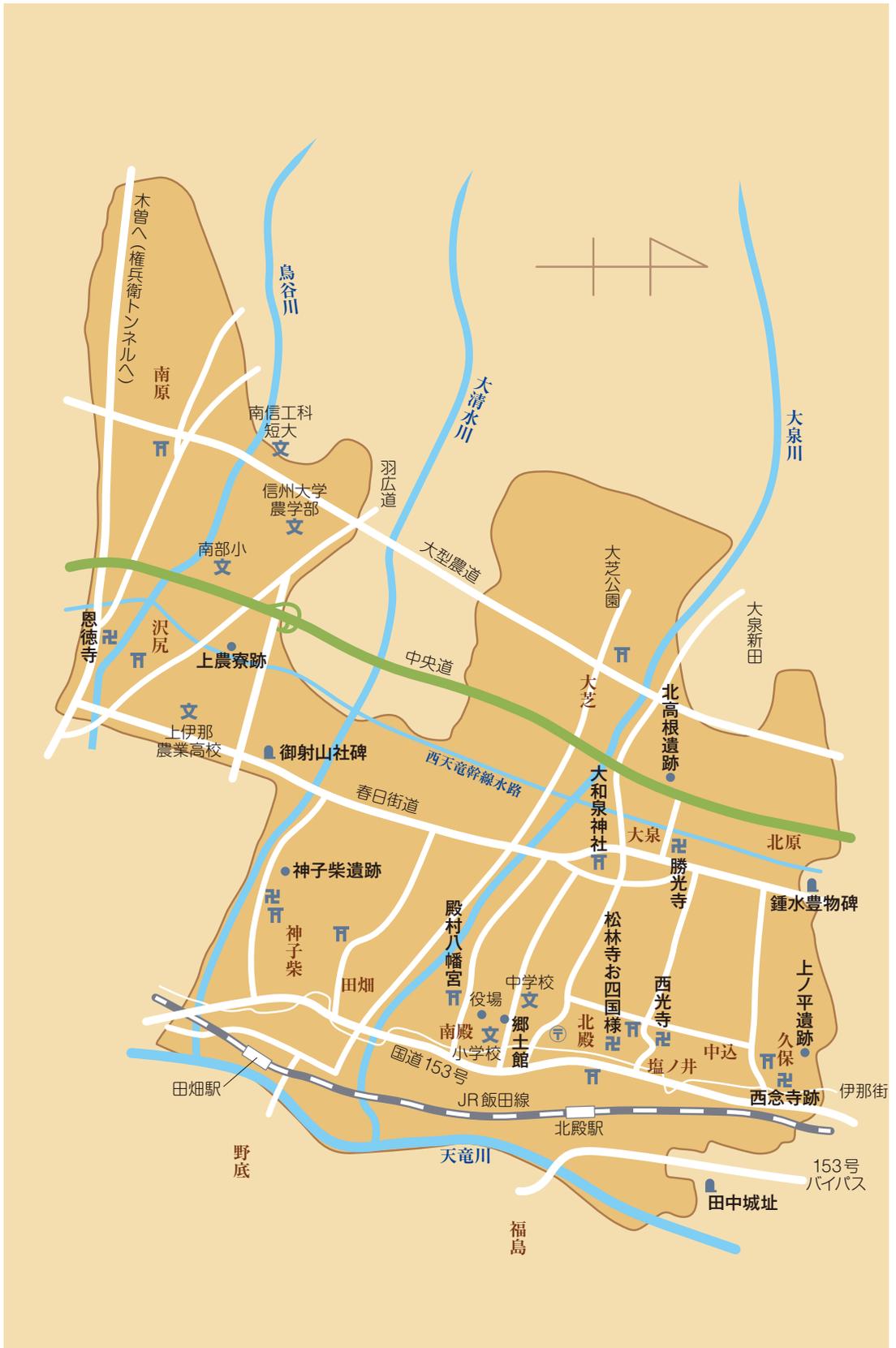
表紙の写真は殿村八幡宮の参道



# 第一 全 村



空から南箕輪村を見る



## 一 南箕輪村の由来

南箕輪村が誕生したのは、明治八年（一八七五）二月一日のことでした。

この地域に人が住むようになったのは、いつの頃からかははっきりしません。南箕輪村の遺跡として最も古いのは「神子柴遺跡」で、一万二千年以前の旧石器時代から新石器時代へと移り変わる頃の遺跡です。（異説もあります）

縄文時代に入ると、村内にもたくさん遺跡があり、その遺物が出土していて、久保の「上ノ平遺跡」から出土した「人体文付有孔鏝付土器」などのように、考古学界から注目を集めた土器も出土しています。（遺跡については、巻末の「遺跡一覧表」及び各地区の遺跡説明を参照のこと）

次の弥生時代や古墳時代の遺跡・遺物も村内各所から出土しています。これらのことから、この村にも大昔から経ヶ岳山塊の扇状地末端の湧水が出るあたりや、西山からの川のほとりに人々が生活していたことがわかります。

日本の国に社会組織ができるようになって、この辺は科野国と言われていましたが、和銅六年（七一三）からは信濃国と呼ばれるようになりました。一時期（七二一年から一〇年間）諏訪国になりましたが、明治（一八六八）の初めの頃

まで信濃国に属していました。

平安時代に入り、各地に荘園（注①）ができるようになります。この辺は「信濃国伊那郡落原莊箕輪郷」と言われていました。この頃の遺跡もいくつか村内にあります。

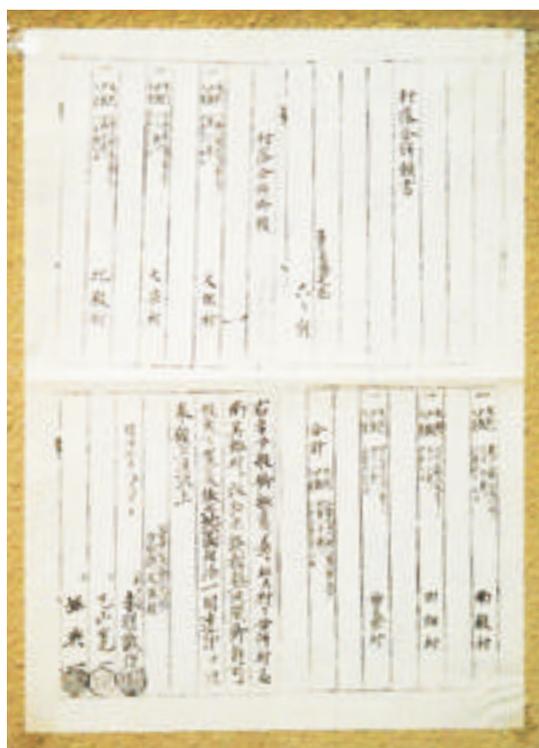
中世末（一五〇〇年代）になって、村内のことが文献に出て来ます。城館として柵木城・中込城・倉田城・有賀の城・古城・内城・日戸氏館・大泉上総館・宮島氏館など、神社として御射山社・御尺地社・八幡宮など、また、大泉上総・倉田将監・高木氏などのように戦で活躍した人々の話などです。しかし、詳しいことは分かりません。

江戸時代に入ると、行政単位としての「村」がはっきりして来て、慶長六年（一六〇一）に実施された検地帳（注②）（北殿の千桐屋文書）によると、箕輪郷の中に久保村・殿村・畑村・神子柴村・沢尻村・大泉村の名前が見えます。江戸時代の南箕輪村関係の領主は、飯田城主小笠原秀政が一六年間、飯田城主脇坂淡路守が五六年間、寛文二年（一六七二）からは幕府領（天領という言い方もあります）となり、代官の支配を受けていました。天和二年（一六八二）から板倉領（私領）となり、元禄二年（一六九九）からは、今の南箕輪の範囲が二つに分かれて統治されるようになりました。久保（塩ノ井・沢尻地区を含む）・北殿の一部・南殿の大部分は、太田隠岐守（旗本）の私領となり、大泉・北殿の大部分・南

殿の一部・田畑・神子柴の地区は幕府領になりました。その後、明治時代に入るまで、この時私領に入った地区は、幕府領になったり私領になったりしました。江戸時代の人口は、多少の変動はありましたが、二五〇余年の間、今の南箕輪村の範囲で一六〇〇人から一七〇〇人くらいであったようです。農業中心の生活で、江戸時代後期になり商業も少しずつ発展していったようです。換金作物を作ったり、衣・食の加工品を作ったりして金銭を得て、生活の足しにしていたようです。

明治時代（一八六八）に入り、行政の仕組みがどんどん変わっていく中で、南箕輪村は初め四年間は伊那県に属し、明治五年からは筑摩県に、明治九年からは長野県に所属するようになって今日に至っています。

明治八年に、久保村（塩ノ井地区と沢尻地区は当時久保村に含まれていました）・大泉村・北殿村・南殿村・田畑村・神子柴村の六ヶ村が合併して南箕輪村をつくりました。（地区間のつながり、役所までの距離などの課題を乗り越えて）そして、塩ノ井地区と沢尻地区が独立し、八耕地となりました。その後分村などの動きもありましたが、明治二年（一八八九）の町村制施行の合併の嵐の中でも八耕地を維持してきました。そして、大正三年（一九一四）耕地から区という呼び名に変わり今日まで続いています。



村落合併願書（神子柴大和手文書より）

昭和（一九二六）に入り、村は大発展します。昭和二年（一九四六）村内への入植者により、北原区・大芝区・南原区が出来、昭和五〇年（一九七五）には団地造成により中込区が出来ました。合わせて一二区となり、現在に至っています。南箕輪村は明治八年に村が出来て以来、合併・分村することなく今日までできました。（注③）

南箕輪村に住む人々は、昔から農業によって生計をたててきました。南箕輪村は経ヶ岳扇状地上にあり、水は扇状地を伏流して末端の所へ出て来ます。そのため、広大な西部地区に水がなく、村人たちはここに水があったら豊かな作物が実るのにといい思いで長い間過ごしてきました。そして、水を

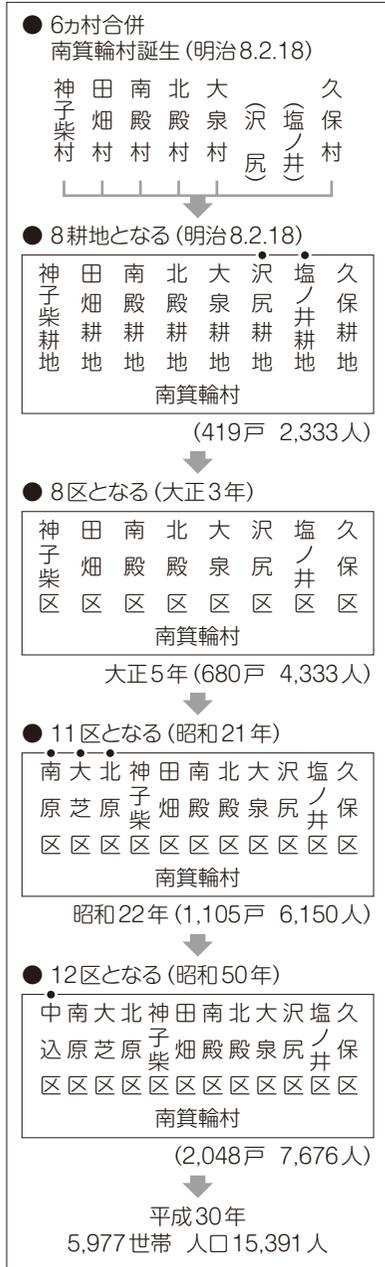
大芝公園は、かつて植林をした跡地です。

昭和三〇年代（一九五五〜）後半からの村の変貌は大きいものです。人口は、村が誕生した時は二千人余、昭和三〇年には六千人余、現在は一

得るため、井戸・横井戸の掘削、川からの引水、西天竜水路による引水などにより、山林・原野を切り拓き、多くの田畑を造りあげて来ました。また、収入を上げ、生活を豊かにするために養蚕・果樹栽培などの工夫もしてきました。

しかし、昭和三〇年代（一九五五〜）以降世界・日本の激しい社会変動の中で、南箕輪村も農業は徐々に衰退し、商工業が盛んになってきています。そして、田畑がいつぱい広がっていた風景も大きく変わっています。

南箕輪村には広い山林があります。これらの多くはかつては入会地（注④）だった所で、明治以後（一八六八〜）の入会地分割の時、村の先覚者たちの努力によって得た山林です。この山林に植林し、育った木材を売って村財政の補助にして来ました。しかし、昭和四〇年代（一九六五〜）に入ると、木材価格が低迷するようになり、林業も衰退していききました。



南箕輪村の成立と発展

注③ 左表は明治以降の南箕輪村の移り変わり(村誌より)

注② 検地とは、領主が自分の所有地をはっきりさせるためと、領国農民の保有する田畑・屋敷地の面積とその石高(収穫高)を調査したことを言います。それによって税を決めました。

注① 荘園とは、奈良・平安時代から室町時代頃まで見られた私有地(公家・社寺・有力者などの所有地)です。「伊那志略」等の書物に出て来ます。

(巻末資料「南箕輪小学校沿革概表」も参照のこと)

短期大学校一、大学一があり、教育環境も整ってきています。村内には、保育園五、小学校二、中学校一、高等学校一、

万五千人余となって増えています。村内各地に広がっていた田園風景が消えて行き、会社・工場・商店・住宅がいつぱいになってきました。

注④ 入会地とは、その土地の近辺に住んでいる人々が共同の利用権を持つ土地のことで、多くは山林原野でした。刈敷(肥料にするための草木)、秣(家畜の飼料としての草木)、萱(屋根を葺く草)、柴(燃料にする枯れ枝落ち葉)、用材(家の補修に使う材木)等を得ていました。明治以降所有者をはつきりさせるため、町村割・地区割等に分割されていきました。

## 二 交通

東西に大きな山脈をいただいている伊那谷の交通は、南北の交通が中心で、古くは東山道、(注①)中世以降は天竜川西に春日街道・伊那街道、天竜川東に宗良親王や武田信玄が通った戦いの道・秋葉街道などの道が開かれました。

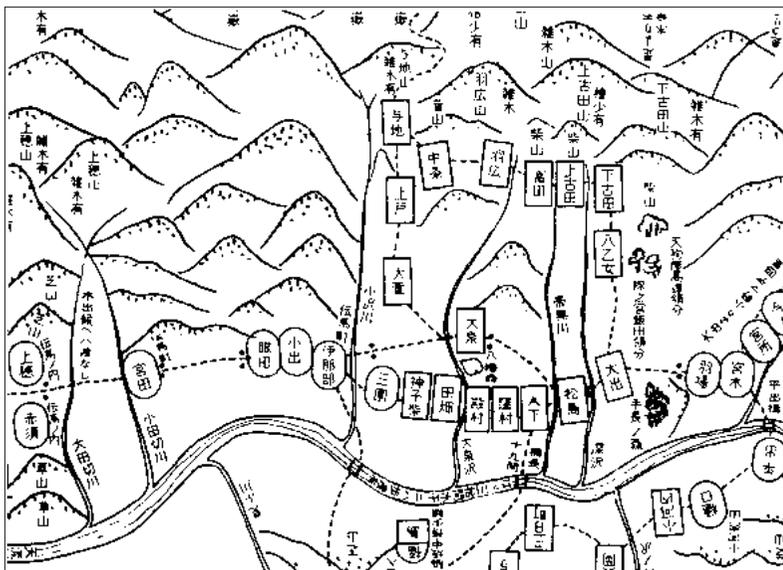
近世になり、物資の流通や人々の交流が盛んになって来ると、松本・諏訪・飯田・高遠などの物資の集散地、政治や文化の中心地である城下町等への交通が盛んになっていき、道路も整備されていきました。

大量の物資や人を輸送するには、たくさんの量を一度に運べる舟も考えられ、天竜川通船も何度か試みられましたが、成功しませんでした。

明治以降の交通の発達は目覚ましく、荷車や馬車の輸送が

盛んになり、次いで鉄道(飯田線)の輸送が隆盛しました。自転車も普及していきました。昭和の中頃になると自動車交通がぐんぐん盛んになっていきました。交通が盛んになるに従い、道路が整備されていきました。なるべく直線に、坂を避けて、舗装道路へと改良されていきました。自動車交通の隆盛は現在も続いています。

また、交通が盛んになるにつれ新しい道路が次々に造られていきました。中央自動車道、大型農道、バイパス道路などです。また、集落内の狭い道路まで舗装道路となつていきました



脇坂絵図『上伊那誌』歴史編より

た。

東西の交通は、大きな川为天竜川、東西の大山脈に阻まれて発達しませんでした。永久橋が架けられ、トンネルが掘られて、木曾へ、高遠・諏訪・遠山へと短時間でいけるようになりました。

注① 東山道は、七世紀から八世紀にかけて造られた、中央政権（奈良にあった）の治世のための道路で、今の国道にあたります。南箕輪村の中も通っていたと思われませんが、どこを通っていたか諸説があつてはつきりしません。南箕輪村の近くの駅として、南に宮田駅、北に深沢駅（箕輪町）が設置されたと伝わっています。

## (一) 春日街道

この街道の成立には諸説がありますが、慶長六年（一六〇一）から一三年にかけて造られたと伝えられています。松本（飯田間を結ぶ）軍用道路・物資の輸送道路で、速く通行できることを重視して直線的に造られたとも伝わっています。また、



春日街道（中宿から北へ）

飯田城主小笠原秀政の家臣春日淡路守が奉行として工事をしたので春日街道という呼び名がついたと言われています。

大泉宿はこの時設置されました。松島宿と伊那部宿との中間の宿として設置されました。大泉には街道や宿場の名残が見られます。

宿場は、旅行者や貨物がスムーズに通行出来るようになるための施設で、そこには貨物や人を受け取り、次の宿場へ確実に送り届けるための事務をする人と、貨物や人を運搬するための人馬が用意されていました。事務・一切の采配をする所が問屋でした。この制度を伝馬制度といい、公道では全国的に行われていました。

しかし、春日街道は、林や原野の中を通るので不用心、松島から伊那部への道順も良くないと言うことで、慶安二年（一六四九）に大泉から北殿へ宿場が移されました。北殿へ出来た宿場は、大泉・北殿両地区で仕事を受け持つことになりました。

## (二) 伊那街道

塩尻から善知鳥峠を越え天竜川西部を根羽まで行き、そこから三州（三河―愛知県）に入り名古屋に通じる街道で、伊那往還・伊那道・三州街道・飯田街道などいろいろな呼び方をされてきました。

慶長五年（一六〇〇）、幕府は江戸を中心とする五街道を

制定し、その補助道路を脇往還わきおうかんとしました。伊那街道は五街道の一つ中山道の脇往還として整備されました。(東山道の昔から伊那谷を南北に通じる街道はありました)

脇往還であったため、公用の交通が少なく、物資を運ぶ道・庶民しよみんの旅の道としてにぎわいました。江戸時代から明治・大正・昭和にかけて物資を運ぶ馬おとういの往来が多かったので中馬道ちゆうまみち(注①)とも呼ばれていました。

伊那谷の主要道路でしたので、江戸時代も交通量は多く、古文書に道路の修繕しゅうぜん・つけ替え等の記録が残っています。明治以後も改良が重ねられ、改良が困難な所はバイパス道路を造るなどをしてきました。名称も県道(明治九年一八七六)→二級国道(昭和二年一九五四)→国道(昭和四〇年一九六五)と変わってきました。



馬追いの姿

村内に江戸時代の伊那街道の面影おもかげが残る場所としては、久保く木

下への崖裾がけすその道、塩ノ井から北殿宿へ入る明和坂辺めいわさかへん、南殿の美坂みさかから田畑公民館への道、神子柴から御園への坂道などがあります。かつては街道をささみ集落が形成され、集落と集落の境界がはつきりしていましたが、現在は戸数が増え集落が東西・南北に大きく広がり、集落の境界がはつきりしなくなっています。

注①中馬ちゆうまとは、農閑期のうかんきに馬で荷物を運び、駄賃稼だちんかせぎをしたのを言います。農家が現金収入を得るための副業として始まりましたが、やがて主職業とする者が増えて行きました。飯田へは一日千頭の馬が入るといのように盛んになっていきました。

### (三) 権兵衛街道ごんべいぐさ

木曾と伊那は、昔から木曾の木製品・伊那の米を中心とした産物の流通はあったのですが、元禄九年(一六九六)木曾日義村ひよしの権兵衛が中心となって、峠のぼを上り下りする険しい山道けわを馬の通れる道に改修し、木曾と伊那の行き来が楽にでき



北殿 明和坂(右上の坂道が旧伊那街道)



権兵衛トンネル

にはそれが国道三六一号線となりまして。そして昭和五九年には舗装道路となりました。しかし、交通困難な道路で、もっと良い道の願いから、平成一八年には権兵衛トンネルが完成し新しい広い道路ができました。今では木曾福島まで四〇分くらいで行けるようになりました。

るようになり、交流が繁く出来るようになりました。それで街道に権兵衛の名がついたと言われています。

この道は、戦国時代には軍用道路として木曾や伊那の武士たちが通った道であり、江戸時代には助郷道として(注①)伊那の農民を泣かせた道でした。また、木曾と伊那の文化や技術の交流の道でもありました。

江戸時代には、人や物資の往来がにぎやかだったこの道も、鉄道中央線の全面開通(明治四四年―一九一一)により交通路としては衰退していききましたが、自動車時代が来ると道路の改修がなされ、昭和二七年(一九五二)に経ヶ岳林道が出来て車で木曾へ行けるようになり、昭和五〇年(一九七五)

注①中山道は五街道の一つで公用の通行が盛んでした。その人や

荷物の世話をするのが宿駅しゆくえきでした。宿駅には世話をする人馬が用意されていましたが、通行が多いときは世話をする人馬が不足します。そこで近辺の村々へ応援を頼み、頼まれた村々では応援に出掛けるような仕組みになっていました。その応援に出掛けることを助郷すけごうといいました。江戸時代の後半になってくると交通が盛んになり、農繁期のうはんきまで助郷に駆り出され、農民たちは苦しみました。

#### (四) 中央道・大型農道等

昭和の中頃に入り自動車時代の到来を受けると、通行がスムーズに出来るようにと旧道路の拡張・改修、新道路の開設が次から次へと行われました。

昭和五一年(一九七六)中央自動車道の駒ヶ根―伊北インター間運行が始まりました。東京へ、名古屋へと人々の行動範囲が大きく広がりました。やがて長野道へもつながり、更に人々の行動範囲は



中央道(南原にて)



大型農道（北原へ向かって）

広がっていきました。高速道路により、より速くより遠くまで行けるようになりました。

大型農道は昭和四九年（一九七四）南箕輪村部分が開通し、昭和五六年には辰野く飯島間が開通しました。通勤に利用され、交通混雑解消に大いに役立つています。

月三日のことでした。

やがて、大正一二年（一九二三）「伊那電気鉄道株式会社」になり、昭和一八年（一九四三）には「国鉄飯田線」となりました。その間に、カーブを少なくし坂を直しスピードを上げて走れるように線路を改良していきました。



伊那電車軌道、南殿駅（大正3年頃撮影）  
（「写真で見る南殿の歴史」より転載）

国道一五三号線は改良を重ねて来ましたが、改良が難しい所はバイパス道路をつけるようになりました。箕輪町から続いているバイパス道路は、長年課題を抱えていた天竜東への道路改良と結び付いて、平成二二年北殿橋の架け替えをし、広い道路となりました。

## （五）飯田線（電車）

明治五年（一八七二）日本に初めて汽車が走ってから二五年後、ようやく辰野く飯田間の電車鉄道敷設の許可が下りました。明治四〇年（一九〇七）に「伊那電車軌道株式会社」が設立され、辰野から順次開通されていきました。南箕輪村区間が開通し、利用が始まったのは明治四四年（一九一一）一

太平洋戦争後（昭和二〇年以後）は、唯一の長距離輸送を受け持つて、人や貨物の輸送に活躍し、いつもいっぱい詰まった状態で走っていました。だんだん車両や線路の改良が進み、輸送能力も増していきました。

しかし、やがて自動車の普及が進んで来ると、利用が減っていきました。それに連れて運行数が減り、急行がなくなり、貨物輸送も廃止されていきました。駅は停留所化し、無人駅が増えて行きました。「伊那電車軌道株式会社」の時は村の各区ごとに停留所が設けられましたが、大正一二年に北殿駅と田畑駅だけに減り、今はその二駅も無人駅となってしまいました。

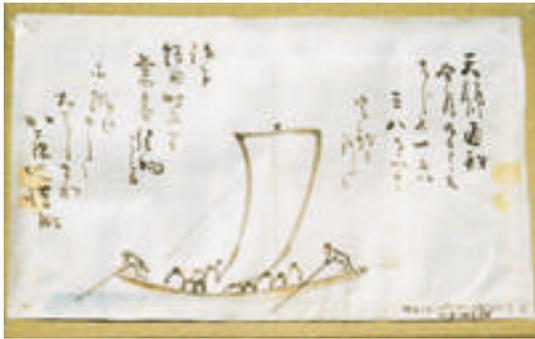
現在は民営で、「J R東海 静岡支社」の経営となっております。衰退はしてきましたが、高校生の通学にはなくてはならないものとして今も活躍しています。

## (六) 天竜川通船

舟は一度に大量の物資を運ぶには都合の良いもので、天竜川通船は昔から考えられていました。しかし、暴れ天竜であり、浅瀬あり狭い所ありで実行するとなると容易な事ではありませんでした。

上伊那で天竜川を使つての物資の輸送が始まったのは、木材を運ぶための木材の川流しでした。江戸時代の初め頃（一六〇〇年頃）には行われていたようです。やがて、人々の川渡しや農作物を運ぶ舟が現れるようになりました。川底が荒れているので、底の浅い鵜飼舟が使われていたようです。これらは近辺を行き来していただけで、遠くまでは行かなかつたようです。

南箕輪村には、天竜川通船の先達がいまいます。文政年間（一八一八〜一八三〇）、神子柴の加藤孫市が米三〇〇俵積



明治28年の通船広告紙（田畑油屋文書より）

みの船で、諏訪掛塚（静岡県）間の営業を始めました。また、田畑の加藤敬亮が明治二八年（一八九五）、坂下（伊那市）〜別府（飯田市）間の通船業（人・貨物を運ぶ）を始めました。しかし、暴れ天竜の船路の整備、中馬業や鉄道輸送業との競争などがあり、成功はしなかつたようです。

明治の初期の南箕輪村の職業調査書を見ますと、回船業と書いてある人が何人かいます。人や物資を川渡ししたり、近辺へ運ぶ仕事をしていた人達がいたのです。

## (七) 橋と渡し舟

交通の大きな障害となるのが川です。その川をどのように越えて行くか、方法は橋を架ける・舟で渡るのどちらかです。天竜川は大きな川ですから、これを越えるのに昔から人々は苦労してきました。

南箕輪村の地籍で、天竜川に初めて橋が架けられたのは、江戸時代であつたと思われまます。江戸時代の後半には北殿と田畑あたりに橋があつたことを伺わせる文書が残っています。当時の橋は、近くの山から木を伐り出し、それを材料にして、川底に太い丸太の橋脚を立て、その上に丸太を縛り付けただけのもので、丸太の上に木の枝を並べ砂利を敷いてあれば上等の橋でした。基礎もしっかりしておらず、洪水になると流されてしまうことがよくありました。鉄筋コンクリート造りの永久橋になつたのは昭和に入ってからでした。

伊那街道にもいくつか橋が架けられていました。江戸時代の古文書には、橋の修復工事に関わる文書がいくつも残されています。維持のために地元の人々が苦勞していました。

天竜川の渡し舟は相当昔からあったようで、正保（一六四四～一六四八）の絵図に北殿から福島への渡舟の図があります。また、田畑の古老の話では、大正の末頃明神橋のあたりに渡舟があつたことを覚えていると言っていました。太い針金が張つてあり、それを伝つて行き来していたそうです。

### 三 入会山野の分割と飛び地

（入会山野については、「南箕輪村の由来」注④参照のこと）

南箕輪村に関係ある入会山野として、大芝原・三本木原・中野原・上溝原・牛馬飼場・北原・蔵鹿山・矢ノ南入り・御射山・北沢山・南沢山などがありました。（別図参照のこと）

明治になつて、地租の関係で所有権をはつきりさせるために分割することになりました。それから昭和三〇年代（一九五五～）までかかつて分割されました。入会の形態や利用の仕方でも複雑で、しかも利権争いも加わつて、大変な難事業でしたが何とか終了しました。南箕輪村は、時の指導者たちが苦勞してたくさん土地を獲得しました。大芝公園も分割で

得た土地で、村有地として活用しています。また、御射山・矢ノ南入り・蔵鹿山は、村の生産森林組合で管理されています。江戸時代の村々（明治に合併する以前の村）に分割された土地は、山野として残っている所もあるし、他のものになつている所もあります。南原・大芝・北原地区、信大・上農・南部小のある所もかつては入会地で、分割により南箕輪村になつた所です。

村の地図を見ますと、西の方に大きな飛び地が南箕輪村分として載っています。すべて山地ですが、面積は東にある人々が生活している部分と同じくらいあります。この飛び地も入会分割の結果、南箕輪村分となつた所です。

#### （一）飛び地の概略

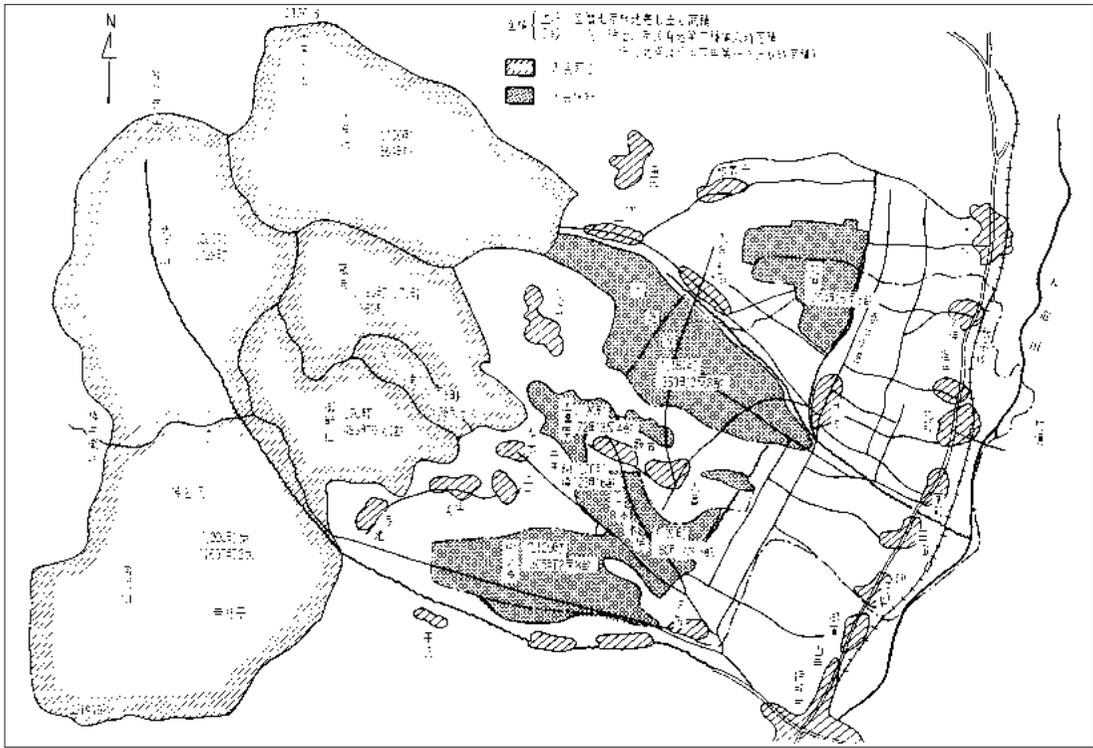
##### 1 位置と境界

位置は、およそ東経一三七度五一分から一三七度五六分と北緯三五度五一・五分から三五度五五分に渡つているといえます。

境界は、東側は伊那市の与地・中条・梨ノ木・羽広・吹上に接しています。西側は塩尻に接し、南側は伊那市の南沢に接しています。北側は辰野町・箕輪町に接しています。

##### 2 標高

黒沢山二二二六呎、経ヶ岳二二九六・三呎。飛び地は、二二九六・三呎の経ヶ岳から最低一二九六・三呎で、高く山深



南箕輪に関係のある入会山野略図

い谷のある所は二二度くらい急坂で、最もなだらかと思われ  
る所でも一六度くらい急な森林山岳地帯です。

### 3 面積

二二二二・六七畝(地図より算定したもの)

### 4 沢

主峰経ヶ岳から大きな沢が二つ出ており、北側は大泉川、  
南側は北沢川↓小沢川となって天竜川に注いでいます。大泉  
川には、上流に砂防・灌漑用のダムが出来ています。

### (二) 御射山分割記念碑

難航した御  
射山分割の記  
念碑が、西箕  
輪<sup>あそ</sup>字御射山の  
林道脇に建て  
られました。  
その碑文の概  
略は次のよう  
です。



御射山分割記念碑  
与地の西、林道端に  
建っている。

碑面 御射山分割記念 昭和三十二年四月十八日

長野県知事 林 虎雄書

碑陰 一 所在地 伊那市大字西箕輪字御射山

一 台帳面積 四百八十三町九反一畝

一 実測面積 二百七十二町一反一畝

一 分割面積 西箕輪 百六十九町八反七畝

南箕輪 七十八町六反五畝

伊那 二十三町五反九畝

(以下 関係役職者の氏名は略す)

### (三) 造林記念碑

分割に力を注いだ南箕輪村では、取得した山に植林し、造林にも力を注ぎました。その記念碑が北沢にあります。碑文の概略は次のようです。

碑面 蔵鹿山・御射山造林記念碑

南箕輪村長 清水 国人 書

碑陰 分割 植林記念碑 昭和四十年七月十五日 建之

(長文なので要点のみ記す。委員名も略す。)

昭和三十二年に分割が終わり、三十四年以降三十九年まで莫大な経費をかけて植林しました。合わせて百九十一町五反二畝に植林しました。



造林記念碑

羽広荘西、林道の分岐して  
いる所の右側の道を登って  
行った先にある。

## 四 河川・用水

### (一) 天竜川

村境を南北に流れる天竜川は伊那谷第一の大川で、昔から村人の生活に大きくかかわってきました。

一つは渡川で、橋掛け・渡舟に苦労を重ねてきましたが、昭和に入り永久橋が完成し、ようやく気軽に天竜川越えが出来るようになりました。

二つは川の氾濫です。しっかりした堤防を築けなかった昔は、大雨が降る度に洪水が起き、川の周辺が荒らされました。田畑が流され、境界が分からなくなり度々紛争が起きました。また復旧作業も大変でした。江戸時代だけでも六七回の洪水記録が残されています。(村誌下巻 p 448 参照) 昭和に入り、川底手入れや堤防の改良工事が進むと、洪水も少なくなっていました。しかし現在でも洪水の心配はあります。三つめは恵みです。川の水は田用水に利用出来ました。江戸時代の文書に天竜井(塩ノ井・北殿)、大河原井(南殿)、伊賀島井(田畑)、川原井(神子柴)などの天竜川からの用水名が出て来ます。これらは何百年かに渡って使われて来た用水です。

もう一つの恵みは、川魚です。川魚漁は大昔から行われて

三本の大泉川・大清水川・戸谷（鳥谷）川もスタートは西山ですが、途中から大部分の水が伏流して水量が少なくなり、下流へ来てまた水量が増えます。

南箕輪村には西山から流れ出している川が三本あります。他に集落内に流れ出している川が何本ありますが、それらは扇状地を伏流して来た水が、集落の近くで湧きだし川となったものです。

## (二) 大泉川・大清水川・戸谷（鳥谷）川



かつての天竜川堤防と北殿橋

いて、食卓を豊かにするとともに、人々の重要なタンパク源となっていました。江戸時代の文書に、梁漁（木や竹などを並べて川の流れをせき止め、そこに上がって来た魚を捕まえる）や鵜飼漁のことが出て来ます。また、網・うけによる漁、釣りなども行われていました。アユ、ウナギ、コイ、アカウオ、フナ、川虫などを捕っていました。

この三川も過去に何回か洪水を起こし、周辺に被害を与えたことがあります。村でも護岸工事をまだ完全という訳ではないようです。

これらの川の水も、昔から生活用水・水田用水として利用されて来ている。



水が伏流してしまい  
ほとんど水流のない大泉川（春日街道の所）

この中でも一番の大川が大泉川です。大泉区では昔から田畑用水・生活用水として大泉川から何本も井を引き、今日までその長い井を管理・保持して来られています。その苦勞の様子は村誌に（下巻P341）に書かれています。南殿・田畑地区でも、大泉川から取水（五カ所）して水田用水として利用してきています。また、川遊び（小学生の魚つかみ会、保育園の水遊びなど）の場所として河口付近が利用されたこともありました。大芝公園でも大泉川の水が利用されています。大泉川は昭和四〇年（一九六五）に一級河川になり、昭和四八年（一九七三）には治水のため大泉所砂防ダムができました。

『清寧』の碑 大泉所ダムの上の道路端にあります。

碑陰 大泉川砂防ダム施工記念

昭和四十八年十月吉日



「清寧」の碑（大泉所ダム上）

### (三) 西天竜幹線水路

南箕輪村を中心とした経ヶ岳扇状地の広大な地に、水をほしいと人々が願っていたのは昔からでした。諏訪湖から水を分けてもらおうと江戸時代から調査・計画など試みましたが、実現に行き着くことはできませんでした。しかし、明治に入り、食糧増産という問題もからんで官民手<sup>かんみん</sup>を結び、諏訪湖からの引水が実現することになりました。

明治四〇年（一九〇七）に話が決まり、大正八年（一九一九）に基本調査が終わり、耕地整理組合の設立までいきつきました。そして大正一一年に工事に着手しました。岡谷市川岸から揚水して伊那市小沢川までの水路を造る計画でした。南箕輪村部分は第四期工事で昭和三年（一九二八）に竣工<sup>しゅんこう</sup>し

ました。約五六五〇畝区間でした。飛島<sup>とびま</sup>土木が二四万九四六三円五一銭<sup>せん</sup>で請け負<sup>お</sup>いました。完成を迎えた人々の喜びは大変なものでした。その後、水路は何回か補強・改修・改善工事をしながら現在に至っています。

この水路が出来たことにより、一一八〇畝の美田が出来ました。そのうち南箕輪村分は四六一畝で、全体の三九割余になります。この結果、村の農業形態が畑作・養蚕<sup>ようさん</sup>中心の農業から、稲作中心の農業へと変わっていきました。

昭和三六年（一九六一）、非灌漑<sup>ひかんがい</sup>期の水を活用するために、流末の伊那市小沢に発電所が造られました。

利用の初めの頃、不備な分水路のためか水争いがよくありましたが、分水槽<sup>ぶんすう</sup>の工夫（穂坂式分水槽の考案）、分水路のコンクリート化などにより解決していきました。

かつては春日街道を歩くと、東西に一面水田風景が見られました。稲作<sup>いねさく</sup>農業の不振<sup>ふしん</sup>、農業後継者<sup>こうけいしゃ</sup>の不足などにより、現在はその風景が年々少なくなってきました。

#### 『鍾水豊物』碑<sup>ひ</sup>

春日街道沿いの南箕輪村と箕輪町の境、箕輪町寄りの所に大きな石碑が建ててあります。西天竜幹線水路が完成した記念碑で「鍾水豊物」と書いてあります。水を集めて物を豊かにするという意味です。

碑面には、諏訪湖から水を引くために苦心<sup>せんかく</sup>した先覚者<sup>せんかく</sup>のこ

と、計画が出来て完成するまでの作業・金銭の苦勞等が記されています。そして、最後に昭和一

九年（一九四四）一〇月と書いてあります。

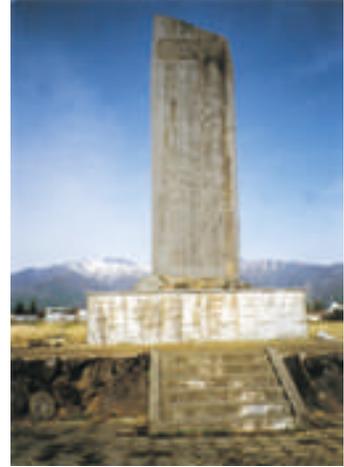
碑陰には、関係役員名・土工名・石工名・鳶職名が彫られています。

碑文は箕輪町出身の木下信の撰文で、字は東京高等師範学校の書道講師の田代其次です。「鍾水豊物」の題額はこの碑を建てるのに尽力してくれた高遠町出身の枢密院顧問官伊沢多喜男の筆によるものです。

石材は、仙台市外の稲井村から求めたもので、長さ八・五呎幅二・四呎、厚さ約〇・六呎の巨大なものです。当時の価格で七千円したそうです。

昭和一六年（一九四一）に石は購入し、太平洋戦争中のため、伊沢多喜男の力を借りて列車で運んだそうです。台石は大泉所の自然石で、長さ四呎、幅一・八呎あります。

撰文は、昭和一九年（一九四四）一〇月出来ましたが、太平洋戦争中のことでもあり建立できず、建立されたのは、昭



「鍾水豊物」碑  
西天春日街道沿  
北原と木下の境目

和二五年（一九五〇）一二月のことでした。

#### (四) 湧水と横井戸

南箕輪村は湧水の豊かな所です。経ヶ岳扇状地の上部で伏流した水は、扇状地末端の天竜川河岸段丘の端の所に湧出して来ます。村内各地にその豊かな湧水が見られます。北の方から、北沢・南沢・滝ノ沢・栃ヶ洞沢・下の沢・中井沢・車沢・南殿の清水・不死清水・半沢・大清水・長者の井等です。この湧水の出る所に人が住み、集落がつくられ、人々はこの湧水を、生活用水に農業用水にと利用して来ました。そして集落と集落を結ぶように街道が造られていきました。そして豊かな湧水は、ワサビ栽培の水、ニジマス等の養魚用水、



西天竜と分水槽（大泉にて）



円筒分水槽（神子柴あじーな南）

農業用水として、南箕輪村の産業にも貢献してきています。

また、水道での生活が始まると、その水源の役割も務めて来ました。

水を求めて苦勞して来た村人たちの足跡として、井戸・横井戸があります。昔は湧水や川の水を共同で使って生活して来た村人たちでしたが、衛生上の問題が出て来たり、水不足の時が出てきたりして、井戸があちこちに掘られるようになりました。江戸時代の終わりの頃からのことです。生活用水を求めて、住宅の近くに縦井戸が掘られ、住居の近くに水をさがせない人や農業用水をもっとほしい人は、地下水が豊かに流れている所をさがして横井戸（地下を横に掘る）が掘られました。（資料六「横井戸一覽表」参照のこと）

水道生活をするようになって縦井戸はほとんど姿を消してしまいました。農業用水としての役割のあつた横井戸は、昭和の中頃までは大事にされてきました。だんだん使われなくなつて来ましたが、現役で利用されている横井



北殿 いせんあわら横井戸

戸が村内にいくつか残っています。横井戸が多く掘られたのは明治から昭和の初め頃でした。

## (五) 上下水道

南箕輪村に初めて水道が出来たのは大正一四年（一九二五）のことで、神子柴に簡易水道が村内第一号として完成しました。その後、昭和五年（一九三〇）に久保簡易水道が出来、昭和二六年（一九五二）には田畑簡易水道が出来ました。それに続いて各地区に順次簡易水道が造られていきました。これらは、各地区の豊かな湧水を水源としました。タンクなどその当時の遺構が残っている地区がいくつかあります。

村営水道として各地区の簡易水道を統合したのは、昭和四〇年（一九六五）のことでした。やがて、人口や企業の増加に伴い水道水の使用量が増え、広域水道に参加しました。平成四年からは、伊那市や箕輪町の水も利用しています。

各地区にあつた簡易水道は、役目を終えて使われなくなりしましたが、神子柴水道は村営水道として現役で働いています。また生活用



簡易水道タンク跡（田畑半沢）

水として引き続き利用しているものもあります。

人家が密集してきて生活雑排水の処理が問題になって来たのは昭和五〇年代（一九七五）からで、始め土壌浄化方式が推進されましたが、不十分で本格的な下水処理が強く望まれるようになっていきました。

そこで村では、平成三年に大泉地区へ「農集排西部処理場」を建設し、大泉・大芝・北原地区の下水処理をするよう事業を始めました。続いて平成四年に「公共下水道南箕輪処理場」を田畑地区へ建設し、大泉・大芝・北原以外の下水処理をするよう事業を始めました。大泉の施設は平成六年から供用開始になり、田畑の施設は平成九年から供用開始となりました。平成二五年には大泉の施設を廃止し、田畑の施設に統合しました。現在普及率は九八パーセントを越えています。

#### (六) 排水・揚水

天竜川沿いの下段地帯は、西からの水が集まり、豊かな水を使つての水田耕作が広く昔から行われていました。しかし、



大泉「いずみ苑」(旧農集排西部処理場)

水が豊かすぎて、泥田で、入ると何十センチも身体が沈んでしまうような状態でした。昭和二六年（一九五一）その課題を克服するために「伊那土地改良区」を設立して、水田の区画、排水のための排水路の改良に取り組み始めました。そして、昭和三十一年（一九五六）完了しました。区画もきちんとし、大きな排水路を設けて、大型機械も入れる美田地帯へと変貌しました。余り水はくろ（黒）川に集めて天竜川へ放流しました。

この美田地帯も米余りのため減反政策の時代が来て、商業誘致地帯へと変わっていきました。今では会社・商店・住宅が建ち並び、舗装道路が縦横に走る地帯となりました。

下段で余った水を、西天竜幹線水路より西地区の農業用水に使いたいという要望は、西天竜幹線水路が出来るときからありました。その要望を実現すべく、昭和四七年（一九七二）から六二年にかけて、機場（保水タンクと揚水のための機械などが備えられている）設置・送水管敷設が行われました。そして、その第一機場が田畑地区に設けられ、送水が始まりました。計画では、水田用水の補充にもという話でしたが、米の減反政策の推進により、現在は畑灌漑用水としてのみ利用されています。



# 第二 久保



## 一 久保の由来

久保地区は、縄文時代から人々の営みがありました。河岸段丘の上ノ平遺跡では、縄文時代の住居が十八軒発掘されています。土器類もおよそ二万点も出土しています。又弥生時代や平安時代の遺構や遺物もみられます。段丘下の天竜川右岸から国道一五三号線周辺の沖積地では、縄文時代中期から弥生時代後期の土器類が発掘されており、水田跡や農具等の木製品も出土しています。このことから古来よりこの地に住居を構え、農耕に従事していた人々がいたことがわかります。

中世においても段丘中段に棚木城や久保寺がみられ、その周辺に在家（一般在郷の家）が集落をなしていたと考えられます。

古くは「供奉」、その後「窪村」となり、宝永年間（一七〇四〜一七一〇）に「久保村」に改められました。明治八年（一八七五）「久保耕地」となり、大正三年（一九一四）より久保区となって今日に及んでいます。

区名の由来は明らかではありませんが、明治九年の『長野県町村誌』には次のように記されています。

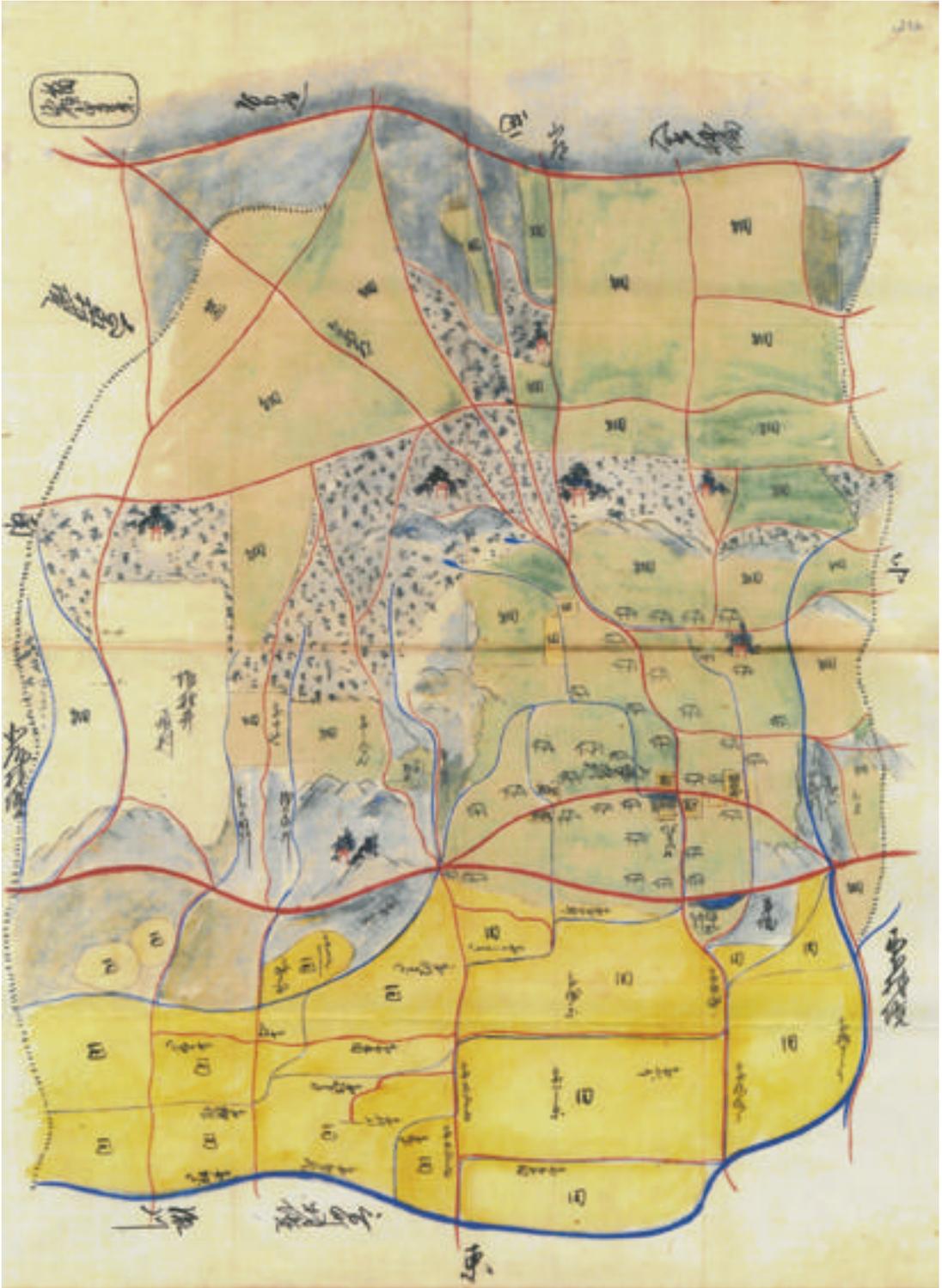
「…命を供奉し奉る地 供奉を呼びて久保となすなり…」

供奉とは「行列に加わってお供する、お仕える」という意味があります。昔この一帯で建御名方神（諏訪明神）が狩りをされたとき、行列に加わってお供をした地であるともいわれています。クブがクボと呼ばれ「窪村」と改められました。一方ここには沢が多くあり、水と草地に恵まれていて、窪地が多いので「窪」という文字が使われたのかもしれませんが、のちにそれが音だけとって「久保」と好字を用いるようになったともいわれます。

又、この地の特徴として北沢、南沢などいくつかの沢があります。この沢のある地形をくぼ地形ととらえることができ、そこから「くぼ」となったかもしれません。

久保からは塩ノ井が分村しています。分村の時期については寛保三年（一七四三）説と延享五年（一七四八）説があります。塩の井は明治時代に入って、明治五年（一八七二）久保と合併し明治八年（一八七五）に再び分村しています。分村はしてはいたものの大正初期ころまでは久保北割、久保南割と呼ばれていました。又、沢尻も一六五〇年代に分郷し、久保沢尻村と呼ばれていました。同時期、高町（吹上村）にも分郷しています。

古来より人々の営みが続き、江戸時代後期には人口が一人でしたが、その後人口が急激に増えています。明治七年（一八七四）には戸数百三戸、人口五九五人。（塩ノ井区を含



近世久保村居村の図

む)、昭和二四年(一九四九)には一三〇世帯七二人。そして平成三十年には五一〇世帯一三四八人にもなっています。

## 二 神社

### (一) 神明宮

神明宮は久保区中央西寄りの西天竜水田とほぼ同じ段丘上の東端、南箕輪村一二二九ノ二、神明宮所有の森林に囲まれた除籍地にあります。

#### 祭神

あまてらすめおおかみ 豊受大神  
天照皇大神  
いざなぎのみこと 伊弉諾尊  
いざなみのみこと 伊弉那美尊  
ことわけのみこと 事解男命  
はやたまのみこと 速玉男命

#### 由緒

神明宮と熊野社の合祀社です。熊野社はもと熊野権現社といて神明宮の南方一〇〇坪の台地熊ノ堂にありましたが明治二十六年(一八九三)ここに移し、神明・熊野両社と同じ覆屋内に並べ合祀し、明治四十年(一九〇七)合併が許可に



神明宮

なりました。神明宮の創建は慶安二年(一六四九)頃と考えられ、熊野社の創建は不明ですが、神明宮の造営とほぼ同じ時代と思われます。明治五年(一八七二)村社、昭和一八年(一九四三)神饌幣帛料共進社に指定されました。

#### 拝殿

拝殿は向拝付入母屋正面唐破風造りです。間口七・八坪、奥行八・六坪、そのうち前方の床を十五センチメートル低くして拝殿としています。後方は覆屋で右に神明宮本殿、左に熊野社本殿と並べて置かれています。

覆屋は、拝殿と本殿の覆屋が一緒になっている特徴のある形式をしています。この覆屋は本来草葺でしたが、昭和五〇年(一九七五)草葺のままの形を保ちながら上にカラートタ



神明宮本殿



熊野社本殿



水屋



修羅

んで覆って現在の屋根としました。

神明宮の本殿は間口二・三七呎、奥行二・九呎。熊野社の本殿は間口一・九呎、奥行二・三八呎。両社とも切妻の流れ造り平入りです。両殿とも縁をめぐらし脇障子を設けています。

### 舞台

舞台は、石段を登りつめた左側にありましたが、修理が困難であったこともあり、昭和二十七年（一九五二）に取り払われました。

### 水屋

水屋は、間口二・五五呎、奥行一・三呎で、左右のヒノキの丸柱は掘立の形式になっています。

御手洗の石は大正六年（一九一七）、大泉所山から氏子総

出で修羅（当時は「櫓」と言いました。）に乗せて引き出しました。大正七年（一九一八）の庚申の石もこの修羅で運びました。現在この修羅は同神社に保管されています。

### 鳥居

一の鳥居は花崗岩の円柱、二の鳥居は平成一五年木製から石製の鳥居となりました。いずれも神明造りです。

### 灯籠等

石灯籠一对に「明和七年寅六月（二七七〇）と刻まれています。狛犬一对の台石に「国威宣揚」「八紘二字」と「海軍大將塩沢幸一題」と刻まれています。この一の鳥居・石段修理・石畳・狛犬等はいずれも昭和十七年（一九四二）に久保区出身の故丸山東作氏の寄進によるものです。

## (二) 境内社他

1 拝殿南側に、秋葉神社・稲荷社・浅間神社・大山神社・疱瘡神その他の神社が合祀してあります。これらはいずれも久保区内に散在していたものです。これらとは別に境内に金比羅宮・天満宮・石碑の蚕玉神社・妙見様・八王子様・養蚕神・十二神社等が遷座しています。

2 石段を登りきった左側に目通し二・二呎、樹高三五呎、推定樹齡三七〇年のコウヤマキがあります。このコウヤマキは神明宮のご神木になります。また昭和初期までは、推定樹

齡二〇〇年以上のアカマツが数十本立っていました。

### 3 奉納額

(1) 奉額 立机披露句集

明治三三年(一九〇〇) 瓢連

覆屋南側上部に掲げられている額です。文字が消えかかっていますが、約九三の句が書かれています。

(2) 御即位記念

大正四年(一九一五)一二月

覆屋北側上部に掲げられている額です。区民の詠んだ句が約九六書かれています。

### (三) 山の神社跡

神明宮の南側の道を大泉所山に通ずる道路が、西天竜水田地帯の途中で大泉方面へ別れるところあたりの地籍を山の神といっています。山の神が神明宮境内に合祀される以前は、この地にあつたであろうと推測されます。

又、神明宮の北、中込線突き当り付近にも山の神社があつたという記録が残っています。

### (四) 滝権現・日光権現跡

天保元年(一八三〇)の村明細書上帳にこれらの社が記載



奉納額

されています。滝権現は、滝ノ沢前にあつて滝の沢を祀っています。日光権現については場所、由来等はわかっていません。

### (五) 白山神社碑

北部保育園西側に「白山神社」碑があります。白山は石川・岐阜の県境にあり、富士山・立山と共に日本三名山の一つで古くから信仰されています。

総本社は白山にあります。白山神社北傾斜地を少し登った所に浅間神社(里宮)跡があります。



白山神社碑

### 祭神

白山比咩神・伊弉諾尊、伊弉冉尊です。

## 三 寺堂

### (一) 西念寺跡

最初に西念寺が建てられたのは北沢より南側の伊那街道の

近くにあったと推測されます。それ以降所在が丸山地籍に移り、明治四四年（一九一一）以降は神明宮下にありました。

西念寺は、伝えによると文亀元年（一五〇一）に光誉説良和尚開基によって浄土宗の寺として創立されました。檀家が少なく経営困難になっていたところ、寛永一六年（一六三九）木下の法界堂に合寺され廃寺になりました。しかし正保三年（一六四六）までは堂宇と原畑が残っていました。その後、文政年間（一八一八〜三〇）に至って法界寺二世察誉和尚の代に西念寺再興の機運が起こり、天保二年（一八三一）四月に丸山地籍に再建され、察誉和尚が住職になりました。明治四四年（一九一一）現在の地に移転されましたが、その後昭和四三年（一九六八）火災により全焼しました。それ以来再建されず現在に至っています。

### 本尊

阿弥陀如来



旧観音堂(左) 旧西念寺(右)

## (二) 境内堂仏

### 1 観音堂

焼失した西念寺の南側に接続して、観音堂があり馬頭観音が祀られていました。上伊那諏訪八十八ヶ所霊場の第三十四番の札所として賑わった時もありました。この堂も西念寺全焼の際、類焼しましたが直ぐ再建し、本尊は黒焦げになったので以来秘仏とし、新たに瀬戸団治氏（辰野町出身の彫刻家）作の観音を前立本尊としてまつています。秘仏は頭上に白馬を戴く三面八臂の忿怒相の木造です。



観音堂

第三十四番札所としての御詠歌がのこっています。

うららかに黄金生むてふ真清水は

やがて弘誓のうみとなるらむ

### 2 子安観音

観音堂のすぐ南に、子を抱いた石仏が高さ五〇センチメートルの台座の上に安置されています。子安観音と呼ばれ安産



明治六年

(一八七三)

久保学校として創設され、明治七年開校の運びとなりました。初代教員は後藤杉蔵でした。(高遠進徳館出身・長野県教育行政の功勞者)。生徒数は一五七名でした。明治一一年(一八七八)には南割と北割に分かれ、南割は南箕輪学校へ、北割は木下学校へ合併することになりました。明治一九年(一八八六)になって、久保学校校舎は南箕輪学校久保派出所となりました。北割は、明治二六年(一八九三)南箕輪学校に統合されました。

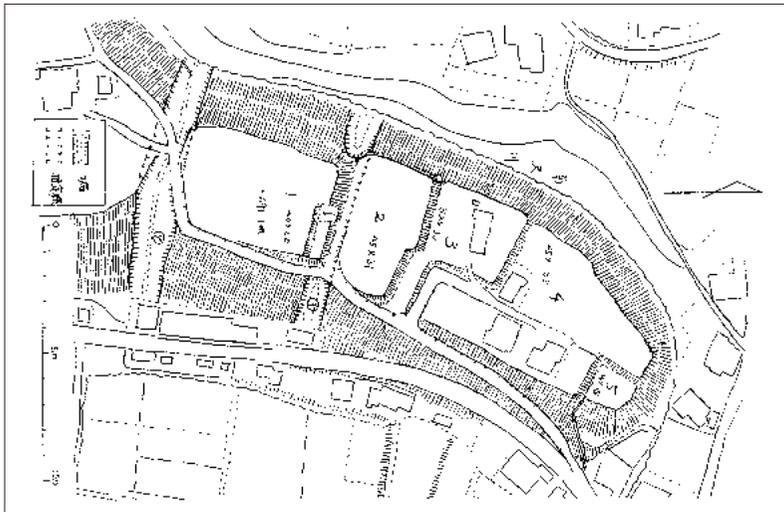


久保学校

## 五 古跡名勝

### (一) 棚木城跡

滝の沢と南沢にはさまれた中段台地にあつて、東は急斜面、西と北は南沢の急斜面となつて自然の地形が築城の好条件を整えていたよう



棚木城鳥瞰図(宮坂武男氏作図 長野県歴史館蔵)

です。城は東西三八畝余、南北五八畝余の長方形をなし、本丸跡は畑になつていますが南に一条の空濠からほりがあります。天文年間(一五三二〜一五五五)の初期に棚木四郎と称する人が沢尻宮島式部の姉むすめを娶とむりここに住んだといひます。伊

那街道から登る道を階（きざはし）  
 いています。城の大手は  
 この面だと思われれます。棚  
 木氏は、箕輪城に属した  
 郷士（農村に住んでいた武  
 士）と考えられます。後に  
 武田信玄進攻の時没落して  
 家名を失ったといひます。  
 現在この地とその周辺は棚  
 木という地字名（あき）になつて  
 います。



棚木城跡

## (二) 箕輪遺跡

箕輪遺跡は、天竜川右岸、天竜川と国道一五三号線の間にある沖積地でJR木下駅付近から北殿付近に至る水田、住宅、工場、商業施設等を占める総面積一〇〇〇餘に及ぶ広範囲な大遺跡です。

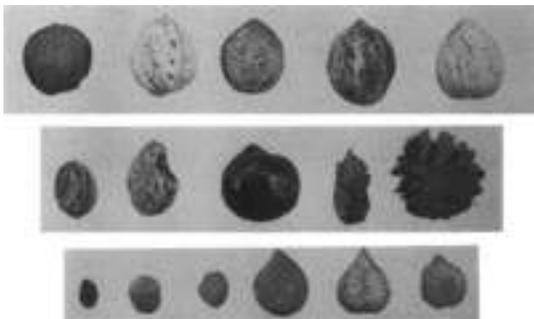
昭和二六年（一九五二）、伊那土地改良区の設立により、昭和二七年より大規模な耕地整理事業が実施されました。当初は工事に伴う遺物の表面採取でしたが、遺物の多くは昭和三〇年以前に出土しています。昭和五五年（一九八〇）、五六年に箕輪町教育委員会が発掘主体となつて本格的な調査が行われました。又、南箕輪村教育委員会が発掘主体として、

平成四年塩ノ井地区の発掘調査を行つています。長野県でも平成一三年・一四年に発掘調査を行つています。

久保区久保下からの出土物は、縄文中期から弥生後期の土器を始め、土師、須恵、内耳土器などが出土しています。石器は、磨製石斧、石皿等。構造物には木柵、畦畔跡、揚水跡、道路跡がみられました。木製品として田下駄、田舟、鋤、梶、匙、木串、幣束板、用材。金属器のキセル、食料にしたと思われる胡桃、栗、榎、梅、桃などの実、南瓜、夕顔の実などが発掘されました。字石原田周辺出土の土器の底部に籾の跡のついたものもあり、住居跡としての炉跡、焚火跡、炭、動物の骨なども確認されました。ベルシャイン西側南郷団地付



金属器



植物種子



木杭の一部

近では住居跡も発掘されてい  
ます。

木柵の出土がおびただしく、  
木柵間の幅は普通五〇から七〇  
センチメートル位ですが、橋詰  
にあったものは一四〇センチ  
メートルの幅で並んで打ち込  
んでありました。木柵の材は、  
節のない年輪が平行な柵目まさめのサ  
ワラの木を使っていました。そ  
の総延長四・三七五キロメート

ルにもなります。低湿地遺跡のため多量の木製品の出土と  
もに大規模な木柵列の存在は注目値します。

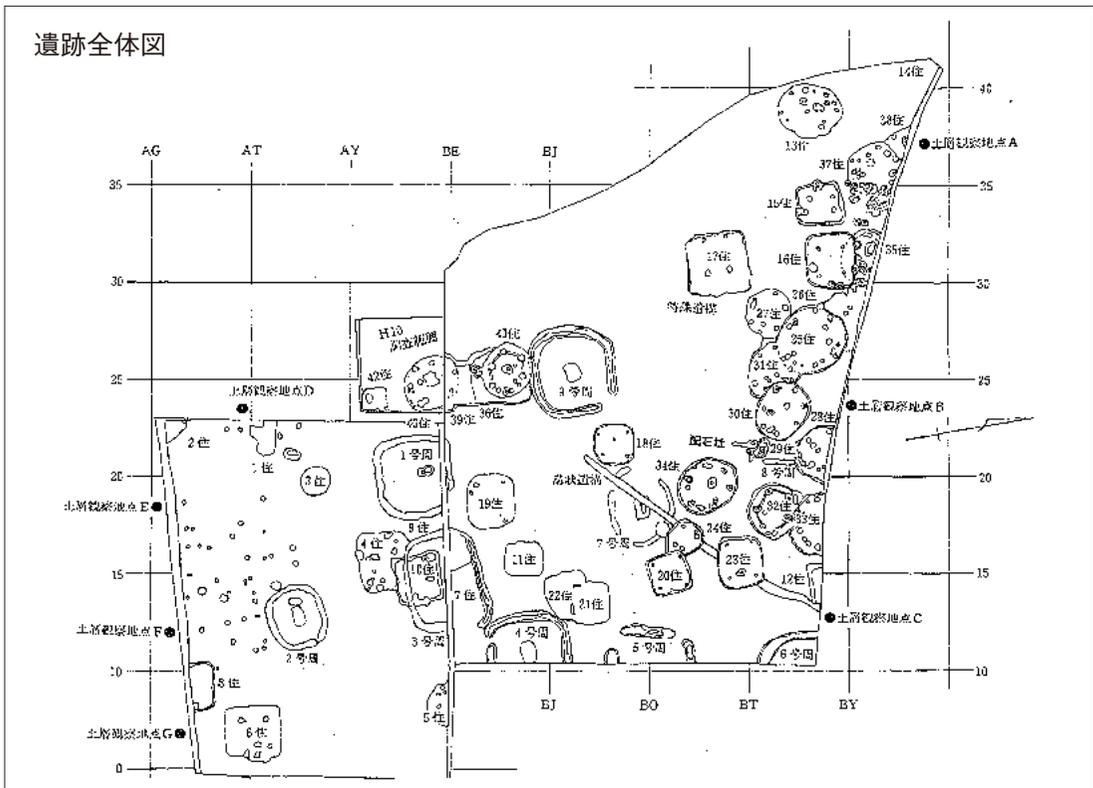
### (三) 上ノ平遺跡

上ノ平遺跡は、天竜川西岸にある久保地区の河岸段丘上に  
あります。平成七年（一九九五）墓地公園造成に伴う緊急発  
掘調査で明らかになってきた遺跡です。発掘調査をした面積  
は約三千平方メートルです。

この遺跡は縄文時代中期・弥生時代後期・奈良平安時代、  
三時代の複合遺跡です。

特に縄文中期中葉の遺物では、土器片が約二万点出土して  
います。多くは土器捨て場からの出土になっています。

遺跡全体図



祭祀が行われたと思われる遺構もみられました。底を打ち抜いた台付浅鉢型土器が逆さまに有りその上に石がのっている状態で出土、周囲には土器を二個並列にして、口を南に向けた状態にあるものが三方所みられました。装飾絵画文浅鉢型土器（長野県宝）を中心にして円を描くように意図的に配置されており、祭祀遺構と思われる。

縄文時代の土器製作では一般的に抽象的な表現が多いのですが、土器捨て場から出土した土器破片は人の手を写実的に表現し、五本の指には関節や爪がみられる土器もあります。

縄文時代の住居址は一八軒みられましたが、住居址内からも多くの土器が出土しています。人の顔が表現されている顔面把手付土器の把手部分や住居址から出土した人体文付有孔罎付土器（長野県宝）などがあります。人体文付有孔



深鉢土器

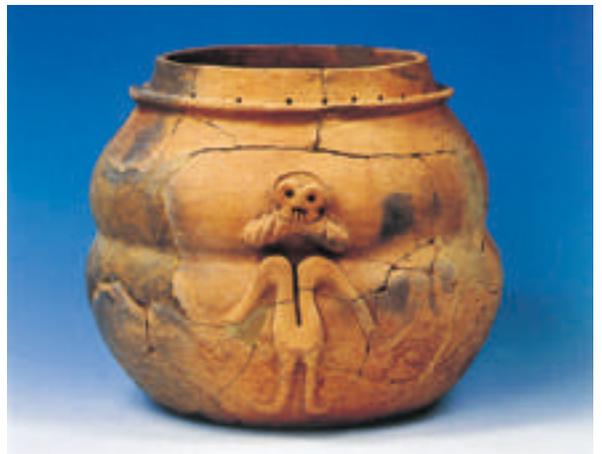


装飾絵画文浅鉢型土器



手の形をした土器

罎付土器は、高さ約三〇センチメートル、中央にくびれがみられます。この土器の正面には人体文が付られていて、腹部や両足が立体的に表現されており、頭部と胸部がくびれで分離されているなどの特徴があります。この有孔罎付土器の用途は酒造器説と太鼓説の二つの説が主として考えられていま



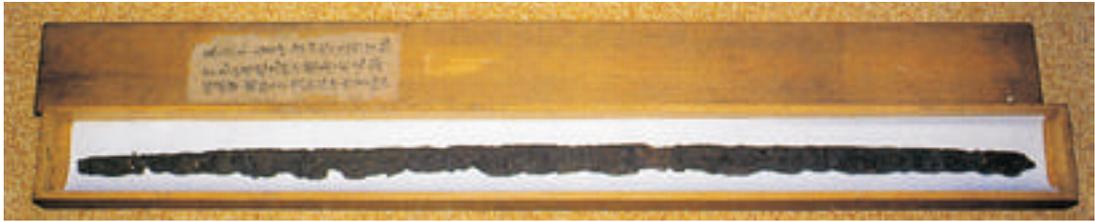
人体文付有孔罎付土器

すがはつきりしたことはわかっていません。明確に人体モチーフが現された全国的にも貴重な出土品です。弥生時代のものとみられる住居址五軒と方形周溝墓九基の遺構が発掘されました。方形周溝墓は天竜川流域では多く分布していますが、数多くまとまっている例はめずらしいことです。

奈良平安時代の住居址も十六軒発掘されました。住居址内からはたくさん  
の遺物が出土しています。主なものと  
しては、土師器、須恵器、墨書土器、  
鉄製品などが見られました。(上ノ平  
遺跡の遺物は村郷土館に展示してあり  
ます。)

#### (四) 丸山古墳

久保の集落東北部、旧三州街道東側  
の一角に丸山という地籍があります。  
このあたりは文久二年(一八六二)に  
畑地や水田として開墾され、その後昭  
和二七年(一九五二)には伊那土地改  
良工事による地形変容によって原形が  
すっかり変わり現在は水田となってい  
ますが、かつては東にゆるやかな傾斜  
地でやや小高い台地となっていました。  
そのほぼ中央に径約三〇センチ、高さ七  
センチの大きな古墳がありました。文久  
二年開墾の際、副葬品の直刀一振り  
(村郷土館展示)と、子持勾玉(所在不  
明)が発見されています。他の遺物も



直刀



伊那街道跡

何がしか出土していると考え  
られますが、特に伝承はあり  
ません。古墳時代のものとし  
て確認されています。

#### (五) 伊那街道跡

伊那街道は、三州街道とも  
呼ばれています。中山道の塩  
尻宿から分岐して辰野、伊那  
飯田と南下し、阿智、浪合、  
根羽の各村を経て、杣路峠を  
こえ、三河足助を経由し岡崎  
で東海道に合流します。伊那  
街道は中仙道の脇街道として、  
庶民や商人に多く利用されま  
した。又、物資輸送の担い手  
として、中馬も活躍していま  
す。(詳細は全村の章参照)  
街道の面影がなくなりつつ  
ある現在、村内では北殿、田  
畑、神子柴等に一部昔の街道  
の面影が残っています。久保  
区内では、伊那街道が南北に

通っていました。箕輪坂を少し登った中途に仏像が刻まれた「右木曾・左飯田道」という道標があります。そこから南に向かつて段丘中腹を進みます。途中街道東側に茶屋や銭湯があったといわれる場所があります。大東（屋号）の東を通り昔の久保寺東から旧道にでて、塩ノ井区に入ります。

箕輪町木下境の箕輪坂から、久保集落に至るおよそ二百餘、道幅二・五畧区間は、昔の面影が残っている貴重な街道跡です。

## (六) 天王

北沢の北側中段に台地があり、その周辺が「天王」と呼ばれる地籍です。『長野県町村誌』には久保には東西約二七畧、南北約三三畧の封の形をした陵墓があり、「この地を天皇という」と記されています。天皇と記されていますが「天王」と「天皇」の同一音からの宛字とも考えられますが、現在ではその面影もなく正確なことはわかっていません。

## 六 碑

### (一) 利澤千秋碑

神明宮の西、段丘上にあります。西天竜耕地整理組合が昭和二年（一九二七）〜昭和八年までに実施した久保地区の水

田の耕地整理事業を記念して昭和九年（一九三四）七月建立した石碑です。碑陰には当時の事業を推進した久保地区関係者の名前が刻まれています。碑面には利澤千秋という言葉が刻まれています。利澤とは水のめぐみ、千秋とは長い年月という意味を持ち、



利澤千秋碑

西天竜水路ができて久保地区に見事な耕地ができた喜び、そしてこれから先長い年月にわたってめぐみをもたらして欲しいという願いが四文字によって表されていると考えられます。この利澤千秋を揮毫したのは当時の西天竜耕地整理組合長、穂坂申彦氏です。穂坂氏は田筒分水槽えんとうぶんすいそうの発案者とも言われ、その分水槽は「穂坂式」といわれています。久保区内には田筒分水槽が西天竜水路東側に二カ所あります。

### (二) 桐亭良亮筆塚

旧公民館跡地（児童公園）にあります。桐亭良亮は、本名を木下周策、豊臣良亮といいました。久保の人。手



桐亭良亮筆塚

習いの師匠でした。

桐亭良亮翁 筆塚

碑陰 明治三四年辛

五月廿五日

(三) 一貫句碑(日ぐらし塚)

北部保育園の西側

にあります。一貫

の本名は木村徳太

郎といえます。(一

八七一)一九三八)

詩歌句庵一貫とい

ます。箕輪町三日町に生まれ、久保に移って、俳句会「金麗

会」の創始者となりました。

日ぐらしや目先にせまる夜の帷

一貫



一貫句碑

(四) 馬場水師夫妻句碑

昭和初年、俳句仲

間「金麗会」が結成

されました。その創

立に加わり活躍し

たのが馬場武雄(水

師)です。水師夫妻

の追悼遺稿集に「白梅集」があります。馬場家の墓地に夫妻



水師夫妻句碑

の句碑があります。

森の木の幾世香に立つ老鶯

暁や梅の白さの寒うして

水師 近江

(五) 庚申塚

西念寺観音堂の南側、道路に面した傍らに並んであります。

西念寺がこの地に移転したときに移されました。

(写真右側から)

- 1 甲子 昭和五九年(一九八四)
- 2 庚申 昭和五五年(一九八〇)
- 3 庚申 大正九年(一九二〇)
- 4 庚申 安政七年(一八六〇)
- 5 庚申 寛政一二年(一八〇〇)
- 6 庚申 元文五年(一七四〇)
- 7 庚申塔 日月・三猿・二鶏有り。
- 8 甲子 大正一三年(一九二四)
- 9 西国坂東秩父供養
- 10 大乘妙典六十六部供養
- 11 摂待供養
- 12 青面金剛像

享保一二年(一七二七)一猿の像

庚申塔と思われます。



庚申塚

(六) 旧西念寺入口の碑・像

1 二十三夜供養塔

2 聖観音像  
しょうかんのん

(七) 水神

1 久保滝ノ沢、

旧三州街道西に  
あります。



聖観音

水神

碑陰

昭和十二年四月二八日

堀久雄建立

2 久保上の段南部、

水源地にあります。

水神

碑陰

明治四十年九月

吉日建立

矢沢計十郎

堀保太郎

矢沢留次郎

山口喜十

織部源治郎



水神



水神

3 久保北垣外にあります。

水神

大正末、昭和初期の頃、堀傳一によって作られました。

(八) 道祖神

1 公民館近く、

四辻にあります。

道祖神

碑陰

天保七年

庚申十二月建立

窪村

2 猿田彦大神

①公民館北側三叉路にあります。

②公民館東、少し下った所にあります。



道祖神

## 七 用水

(一) 上井・下井

北沢と南沢にはさまれた中段畑地に、上段地のすそから湧出する水を引く二つの井があります。一つは旧公民館南東から湧出している水を引いて上井といい、いま一つは上井より

百済南のところから湧出している水を引いて下井といっています。この二つの井が久保中段地の中央を流れ、水道がひかれるまでは飲料水に使われたり、水田用水となっていました。又、南沢からもこの井に水が入っていました。

水田の少なかつた昔は、どんな苦勞をしてまでも水を引いてきて田にしようと考えていました。例えば、南沢に堤を設けて南沢西斜面に井を造り、棚木地籍の水田を潤しました。別に南沢西斜面を通り久保水源地の東側の家添いの水田を潤しました。北沢から両斜面一筋ずつの井があつて家添いの水田を潤していましたが、西天竜開田により廃止され、現在は上井と下井だけとなっています。

## (二) 沢(北沢・南沢・滝ノ沢)

箕輪町木下区との境に北沢、久保のなかば南寄りを流れる南沢、塩ノ井との境に滝ノ沢、三つの沢があります。どの沢も水が豊かで昔は採草地となつて田の肥料に、牛馬の糞まぐさにと大切な役目を果たしていました。水量が豊富だったので水車小屋が設けられ、精米所の役割もしていました。水車小屋のない地区へ出向いて米、粟あわ、稗ひえ、麦、そば、大豆などを預かつて来て、ついて、またそれを配達したりしました。この水車小屋が北沢に三軒、南沢に二軒、滝ノ沢に四軒もありました。現在は水車小屋はなくなっています。草場は化学肥料の普及により、現在は役目を終えています。しかし冷たい豊

かな水と立地条件を生かしてわさび畑となり、滝ノ沢のわさび畑は、栃ヶ洞とちがほら(塩ノ井)のわさび畑と並んで優れたわさび畑になっています。

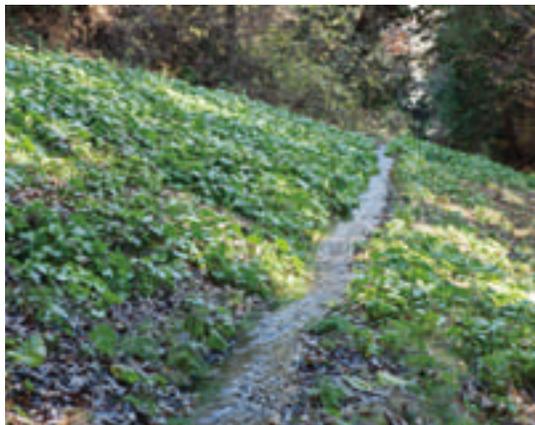
## (三) 簡易水道

久保の簡易水道は、昭和四年(一九二九)七月に竣工しています。

水源は横井戸より給水されてきました。区内全域をカバーする水道としては、他村と比べると早い時期の完成です。当時の給水人口は三五〇人、村営水道ができた以後でも、昭和三年(一九六四)二六〇人余りです。現在でも貯水槽が残つてお



貯水槽



わさび畑

り、家庭用雑用水として使用されています。

#### (四) 横井戸

##### 1 北垣外の横井戸

字北垣外、断層下にあります。正確な掘削年あきは不明ですが、堀傳一、倉田準、赤羽程助の三人によつて掘削されました。穴もみられ少量の水が流れています。

##### 2 久保の横井戸(春日道下)

高さ一・五呎、幅一・二呎、延長一八〇呎です。明治二二年(一八七九)掘削願いが提出されていますので、その後起工されたものと思われます。

##### 3 久保西の横井戸(屋号喜多屋敷下)

高さ一・五呎、幅〇・六呎です。昭和四年(一九二九)起工です。現在は少量の水が流れています。



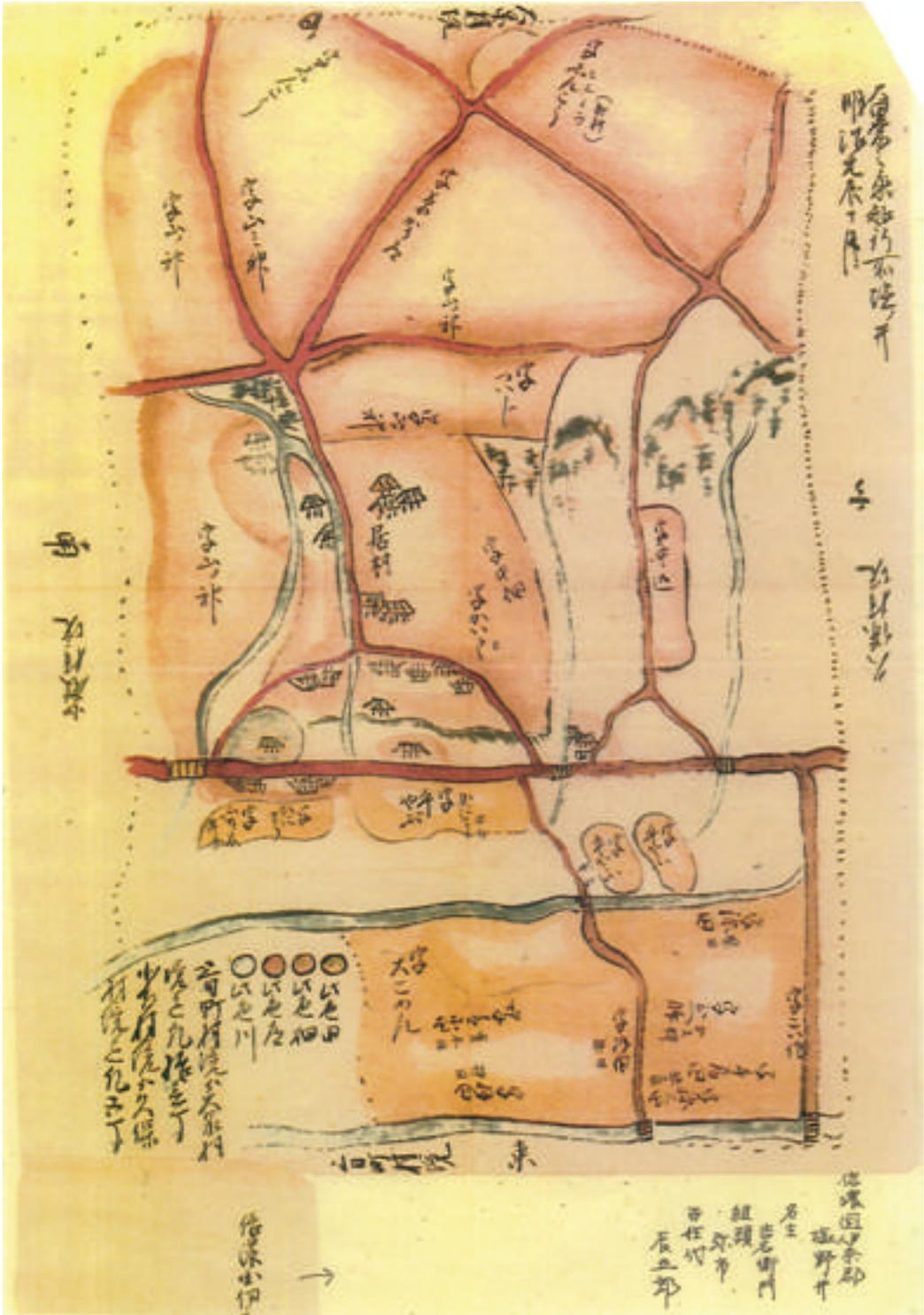
久保春日道下横井戸穴の中

# 第三

# 塩ノ井



一 明治一年（一八六八）の塩ノ井絵図



## 二 塩ノ井の由来

塩ノ井は東西に長く南北に短い地形の地区です。明治元年（一八六八）の絵図には、東西一丁（二丁は約一〇九畝）、南北は五丁とあります。

塩ノ井地区は、北から滝ノ沢・栃ヶ洞・下ノ沢の三つの沢を有し、段丘崖下は水はけの悪い湿地帯が広がり、わずかな水田はありましたが、人が住むには適していなかったため、主として西側の段丘上に居住地がありました。湿地の排水ができるようになって下段地区に人家も増えていきました。

段丘上は三本の沢筋によって中込・垣外・山ノ神の三地区に分けられています。中込地区には、中世の中込城の遺跡があります。垣外には、縄文・弥生・平安時代の歴史を語る天伯遺跡が広がっています。そして、早くから集落が形成されていました。また、山ノ神遺跡からも縄文・平安時代の住居跡や食器に使ったたぐさんの土器が発掘されています。塩ノ井地区に住んでいた人々は、段丘上の畑作を中心に生活をしてきました。

歴史史料に「塩ノ井」の名が初めて出て来るのは、永禄・天正年間（一五五八〜一五九二）のことで、諏訪上社関係文書に「廻漣神事」（春の豊作祈願と冬の収穫物収納のために、

諏訪上社の神使が関係地域を廻り神事を行う）のなかに「塩ノ井」で行ったことが記されています。この廻漣神事が行われた推定地は、小字「築地」にある古宮跡（天伯社跡）辺りとされています。

塩ノ井の区（村）名の起源は詳らかではありませんが、古くから久保（窪）村の一部で、江戸時代のほぼ半分もの長い年月を久保村に属していました。江戸から明治・大正期の史料の中には、塩ノ井地区のことを「久保村南割」と書いたものがいくつもあります。しかし、地区の人たちは早くから分村独立の思いが強く、模索を続けてきました。寛保三年（一七四三）、時の領主であった旗本の太田資賢（二代目領主）の時、ようやく分村が認められて塩ノ井村として独立しました。それ以来一三〇余年、明治（一八六八〜）まで自立した村として行政事務を行ってきました。

明治五年（一八七二）に再び久保村と合併しましたが、明治八年の南箕輪村誕生の時には、塩ノ井耕地として独立しました。大正三年（一九一四）からは塩ノ井区となり、現在に至っていますが、昭和五〇年（一九七五）中込地区に団地が造成され、中込区として独立分離しました。

かつて、湿地帯で水田耕作も容易でなかった下段の東地区は、戦後の土地改良事業によって乾田化工事が行われ、良好な水田地帯となりましたが、現在は企業・商店・住宅が立ち

並ぶ地帯へと変貌を遂げています。また、西側の段丘上も、西天用水路の完成により、広い水田地帯に生まれ変わりました。さらに、上下水道の整備等により、住宅や人口が増えました。明治元年（一八六八）当時には、家三六軒・人口二一人だった塩ノ井は、平成三〇年には一〇九世帯・人口三二八人となっています。

### 三 塩ノ井神社と境内社

#### (一) 塩ノ井神社

区の西方上段字山ノ神にあつて、「御尺地社」と「貴船社」を合祀しています。

##### 1 祭神

##### 御尺地社

猿田彦命のむすひ

大日貴命おほなむちのみこと

伊豆速男命いずはやのおのみこと

高麗神たかおかみのかみ

##### 貴船社

##### 2 由緒

社殿は、境内西側に本殿と拝殿があり、本殿と拝殿を渡



塩ノ井神社拝殿全景

り廊下で結ぶ権現造りの形式になっています。拝殿は入母屋造りで、前一間ひさし千鳥破風の向背をつけた角総檜造りです。小さな村柄には不相応な塩ノ井神社は、本殿はもちろん各所にほどこされている彫刻は、優美端麗で「塩ノ井に過ぎたるもの」の一つと言われています。

史資料によると、享保一九年（一七三四）に現在地に「貴船社」が造立され、その後「御尺地社」が合祀されたと推定されます。なおまた、合祀された本殿には「寛政九年（一七九七）三月 氏子中」と記録された金幣一対が奉納されています。天明八年（一七八八）に「御左口神 貴船大明神御宮殿（社殿）」が建て替えられ、以後、明治・大正期まで、社殿・神楽殿・鳥居の建て替えや修繕が何回か行われてきました。

明治二四年（一八九一）の「村社取調」によると、「社殿（本殿）間口三間・奥行二間半、神楽殿間口五間半・奥行二間半、境内一四八坪・境外所有地山林一反歩、氏子四六戸」とあります。

戦後間もなく神楽殿はとりこわされ、また、昭和二六年（一九五二）には、社殿の前に拝殿の新築と付帯工事が行われました。

## (二) 境内社

- 1 天満宮（天神様） 拜殿右手の覆屋
- 2 三峯社・神明社・秋葉社の合殿 拜殿左手の覆屋  
この三社は、江戸時代から村民有志による「講」が組織されて、代参が行われてきました。
- 3 御嶽神社碑 碑陰に「明治三十三年十月建之」とあり、多数の講人名が刻まれています。
- 4 蚕玉社 明治一二年（一八七九）建立し、その後屋根の修理が行われた記録が残されています。
- 5 本殿覆屋北側には、かつてはいくつかの家の氏神（小宮）も合祀されていましたが、それぞれ引き取られ、現在は大山祇大神・津島牛頭大王・疱瘡神・御嶽山大権現・金平宮・〇〇大権現（〇〇は不明）の六つの小宮が祀られています。

## 四 西光寺

塩ノ井神社と村道四号線を挟んで北東にあります。

### 本尊

薬師瑠璃光如来座像

### 由緒

西光寺の創設ははっきりしませんが、江戸中期まではさかのぼると思われまます。元文年間（一七三六〜一七四〇）に編まれた『伊那神社仏閣記』には、「塩ノ井 堂一ヶ所 薬師堂」とあり、また、文化八年（一八一）・天保九年（一八三八）の「村明細帳」にも薬師堂が出て来ます。この薬師堂が、西光寺の前身と想定されます。

薬師堂は、

明治に入る頃より「林泉堂」・「林泉院」などと呼ばれていましたが、明治二七年（一八



薬師瑠璃光如来座像



西光寺全景

九四)に間口五間・奥行四間・屋根は総瓦葺の、現在見られるような寺が建設されました。同時に本尊の化粧直しをして、盛大な「入仏式」が行われました。明治三十三年には「大般若経六百卷」(村指定文化財)が備えられました。この経本は「延宝五年(一六七七)黄檗山宝蔵禅院本」を京都で版木刷りしたもので、上伊那北部全域に広く有志を募り、一卷五〇銭で頒布し、それらの人々から西光寺へ六百巻が寄託されたものです。現在、一二の木箱に納められて郷蔵に保管されています。

寺号は、嶺頭院(木下にある曹洞宗の寺)の支援を受けて、明治三八年に取得しました。「瑞雲山西光寺」と言い、開基は嶺頭院一九世鳳山大和尚です。梵鐘もありましたが、昭和一七年(一九四二)に供出したままになっています。また、本堂には「鳳山大和尚」の位牌・「権大僧都法印秀応」の位牌のほか、墓所には文政や弘化(江戸時代後期)の元号を持つ尼僧や沙弥の墓石があつて、薬師堂の時代から庵主が堂守をしてきた痕跡が残されています。

## (一) 所蔵の文化財

- 1 大般若経六百巻 一二箱
- 2 石仏 十王像、役行者像、馬頭観音像(四体)、双体馬頭観音像、如意輪観音像、薬師地藏菩薩像、南無阿弥陀仏碑

### 3 掛け軸

涅槃像(明治三〇年購入)  
十六善神軸(明治三十三年購入―現在所在不明)



(村指定文化財)  
大般若経(六百巻の一部)



如意輪観音菩薩像、薬師地藏菩薩像



十王像石仏 双体馬頭観音像

## 五 遺跡・旧跡

### (一) 遺跡

#### 1 天伯遺跡

塩ノ井公民館周辺一帯で、遺跡碑は段丘上の標高七一〇の所にあります。

昭和四二年（一九六七）、

水田造成事業に伴う緊急発掘調査によって調査され、

ほぼ全容が明らかになりました。

古くから石鏃や土器片がたくさん出土していて、

遺跡地として知られていた所です。

トレンチを掘つての調査の結果、住居跡一四軒が掘り出され、遺物は縄文中期の石器・土器(片)・土偶、弥生後期の土器(片)、古墳時代の土師器・須恵器、鉄器(鎌・鍬・鋸・刀子など)、灰釉陶器、紡錘車(四つ)などが大量に出土しました。なかでも土師器時代のもの(住居跡も土器も)が最も多く出土しています。(詳しくは『南箕輪村誌』遺跡編参照のこと)



西から天伯遺跡を望む

#### 2 山ノ神遺跡

平成一三年に村道四号線の拡幅工事に伴い発掘調査された遺跡です。塩ノ井神社西の道路沿いに当たる所です。

縄文時代の住居跡二軒、平安時代の住居跡一軒が検出されました。

平安時代前期の住居跡からは、食器・煮炊具・貯蔵具などが良好な状態で多数出土しました。それらの中には、墨書や刻書されたものも何点か見られました。また、住居の造りには出入り口の造り方・柱の組み方・竈の造り方など村内初と思われるものがありました。(出土品と報告書は郷土館にあります。)

#### (二) 古宮跡

天伯遺跡の西南端に位置する所に、「天伯遺跡」の石碑と、石祠が祀られています。



山ノ神遺跡出土土器



石碑と石祠

ここが古宮跡と推定されます。江戸時代後期の絵図に、塩ノ井神社とともに「朱の鳥居」が描かれています。諏訪神社上社の「廻漕神事」(由来の項参照)が行われた有力な推定地です。この地の小字「築地」は、館や神社仏閣を取り囲む土塀を意味しています。

### (三) 郷土ヶ窪

中込城のあった所の南端は、栃ヶ洞の深い沢が刻み込んでいます。この沢を上り詰めると、南側の天伯の台地と緩斜面で結ばれて窪地を成しています。この辺り一帯の窪地・山林を郷土ヶ窪と呼びますが、中込城との関連が推測されます。(郷土とは、普段は農業などをしていて、戦いが起きると武士になって戦う人々を言います)

### (四) 塚畑

村道中込線添いに「塚畑」と呼ばれる小字があります。古老の話では、西天竜水路による開田以前には小墳丘があったと言います。円墳跡と推測されます。

### (五) 富士塚跡

江戸時代の終わりの頃の地図に、村道中込線と北原道(北原へ通じる道)との交差する辺りに小字「富士塚」と書いてある場所があります。どういう人達が・いつごろ築いたのか不明ですが、富士塚が築かれ、富士信仰が根付いていた時があったことを示すものです。(富士塚については「田畑」の項

を参照)

### (六) 上人塚

塩ノ井神社の西南へ一〇〇メートルほど行った所の畑地に、小字「上人塚」があります。そこに小さな野仏が



上人塚

祀られ、二元禄年中「上人」と刻んであります。(二元禄年中一六八八〜一七〇四)

この上人塚については昔話が伝わっています。旅の坊さんが、やはり病に苦しんでいる村人を、自分の命をかけて救ったという話です。(「みなみみのわのむかしばなし」参照)

昭和の初め頃(一九三〇年代)まで、小山のような塚であったようですが、今は平らな畑地になっています。

### (七) 蚕玉様

蚕玉とは蚕の神様のことです。

江戸時代から明治にかけて、耕地の八〇割以上が畑地であった塩ノ井では養蚕が盛んでした。そのため「蚕玉様」の祀りも行われるようになっていきました。明治二年(一八

七九)に塩ノ井神社の境内に「蚕玉社」が創建され、その後何度か修理した記録が残っています。

経緯は不明ですが、現在は長尾氏旧宅地裏の斜面に移され、長尾氏が蚕玉社を祀っています。

#### (八) 郷蔵ごうぐら

西光寺西隣りに、村内で唯一残されている郷蔵があります。郷蔵というのは、江戸時代中期以前は年貢米の保管をする倉庫が主な目的でしたが、中期以降、特に天明(一七八一〜)・天保(一八三〇〜)の飢饉ききんを経て、飢饉に備えての穀物貯蔵のための施設になっていきました。貯蔵した穀物は、飢饉時には救民のために配給されました。

塩ノ井の郷蔵がいつ頃からあったかは分かりませんが、天保九年(一八三八)の村明細帳には載っています。明治初め(一八六八〜)の記録には塩ノ井神社北東隅の窪地に六坪の郷蔵が建てられています。そこに「もみ粗二石五斗・大麦一二石二斗が貯蔵されている」と記されています。

現在ある郷蔵は、明治六年(一八七三)に建て替えられたものを、昭和十一年(一九三六)に現在地に移築したものです。



村内に唯一残る郷蔵

#### (九) 猿田彦命の上棟札

猿田彦命は塩ノ井神社の祭神の一神ですが(神社の項参照)、昭和二六年(一九五二)の拝殿建設の上棟式の時、正面屋根に掲げられたものが郷蔵に残っています。



塩ノ井神社拝殿  
上棟式の棟札

#### (十) 翁塚おきな

伊那街道の塩ノ井から北殿宿へ入る手前の所に、「翁塚」と呼ばれる塚がありました。そこには老松と芭蕉の句碑・矢部かくだう蟻堂の筆塚が建っていて、街道の名所にもなっていたようです。矢部蟻堂は幕末から明治の初め、塩ノ井に私塾を開き手習いを教えていた縁で塩ノ井神社の幟を揮毫しています。

北殿宿へ入る手前は急坂になっており、また、下ノ沢・大門川の合流場所でもあって土橋がよく傷み、街道の難所の一つでした。明治二十七年(一八九四)、三州(伊那)街道大改修の時に、街道が翁塚にかかることになり、塚は削られてしまいました。(碑については「北殿」の項参照)

## 六 句碑・顕彰碑など

### (一) 開田記念碑

塩ノ井神社西の庚申塚の西北隣りにあります。



開田記念碑

碑面 開田記念

前農林大臣従三位勲三等 山本貞次郎閣下題額  
なき人に 見せばや変わる 秋の来て

西天竜の 稲のさざ波 白馬堂 書  
碑陰 西天竜役員有志者名 一四名(名前略)

昭和七年十一月 六十三歳 征矢 定次郎 建立

石工 大泉 出羽沢 為十郎

### (二) 鍾水の碑

神社の北の道を西天へ上ると、中込線と交差します。中込線を北に向つて五〇メートルほど行くと東側に



鍾水の碑

建っています。

碑面 鍾水の碑

塩ノ井水利組合

碑陰 西天竜土地改良区

委員名一四名(名略)、外耕作者一同

昭和六十三年十一月二十三日建立

### (三) 征矢吉兵衛 歌碑

開田碑と同じ場所に並んであります。

碑面 年ふる松の かぜやしらぶる

聞くひと曲の このねは

碑陰 文久二戊(一八六二) 七十二 征矢 吉兵衛

吉兵衛は寛政五年(一七九三)に生

まれしました。資性温厚で学問を好み、和歌を岡山藩士・河原

文三に学び、村内を中心

に多くの門人を育成しました。弟子ととも

に「塩ノ井八景」を詠じ、清風亭

利支と号しました。



征矢吉兵衛 歌碑

### (四) 征矢貫通 歌碑

旧国道と国道一五三号線の交わる所から旧道を北へ八〇メ

ほど行った所の、西側斜面に建てられています。

**碑面** 春の田を かえすがえすも さき匂ふ

花に心を つくる賤のを

明治十七年（一八八四）やよい弥生十日 征矢貫通詠之

貫通は本名五郎吉（五六吉）で、貫通はその雅号です。幕末から明治にかけての歌人で、多くの和歌を残しています。明治二〇年に亡くなりました。



征矢貫通 歌碑

### (五) 征矢真白翁碑（筆塚）

かつては征矢貫通の歌碑と並んで建てられていましたが、道路改修の時、神社南に隣接する墓地に移されました。

真白は塩ノ井の人

で、本名虎教といい、書を教え、門人が大勢いました。この碑は、門人たちが真白七二歳の時建立したものです。真白は



征矢真白翁碑（筆塚）

明治一〇年（一八七七）七八歳で亡くなりました。

碑文には、（漢文なので、筆者が要点のみ意識）

書に秀で、数十年間大勢の人達に教えました。温順純朴な性格で、多くの門人が集まりました。酒を好んで飲みました。また、和歌にも秀で、多くの歌も作りました。（万葉仮名で書いた代表作の歌が碑文の中にも刻まれています。）

鳴く虫の 家さえ今は 寂しきに

衣うつなり まとかよの里

この碑文は、高遠進徳館教授の中邨元もと起が自ら筆を執ったもので、明治四年（一八七二）三月の建立です。

### (六) 征矢政十郎君碑

以前は貫通や真白と同じ場所に建てていましたが、現在は政十郎の生家に移されています。



征矢政十郎君碑

碑文には、（漢文なので、筆者が要点のみ意識）

天保二年（一八三一）に生まれました。若年の頃尊王思想に共鳴し、水戸浪士隊に加わろうとしました。やがて上京し囲碁や文章道を学びました。のち、明治政府の文教重視の方針にそって東京で小学校の教員となり、熱心に子供達の育成

にあたりました。かなりの読書家であり、たくさんのお書を  
読破しました。妻帯しましたが、子供はいませんでした。何  
をするにも夢中になりすぎたので、無理がたたり明治一年  
(一八七八)に四七歳で亡くなり、遺骨は父母の墓地に埋葬  
されました。

と書かれてあります。

碑は明治二三年、彼の死後一二年後に建てられました。篆  
書の題字は鍋島直彬(元鍋島藩主)、顕彰文は対馬府中藩士  
が撰し、それを重厚な書風の柳田半古が揮毫してあります。

### (七) 道祖神

1 塩ノ井神社西の庚申塚にあります。地区内の道路のど  
の分岐点にあったものか不明ですが、道路改修に際して  
庚申塚へ移したものです。

小さな文字碑で、年号等はありません。

2 国道から下ノ沢沿いに西光寺へ向かう道路端にある防  
火水槽の脇に建っています。もとは中村小路入り口東側  
にあったもの  
を、道路拡張  
のため現在地  
に移したもの  
です。

文字道祖神



中村小路入口の道祖神

で、左下に「塩ノ井村」と刻んであります。

### (八) 寒念仏供養碑(道標を兼ねている)

伊那街道(旧国  
道)から居村の集  
落に入る北の入  
り口(青ノ坂上り  
口)にあります。

かつては街道の東  
側にありましたが、  
道路改修により現在地に移されました。

寒念仏というのは、寒中に三〇日間をわたって念仏行をす  
ることです。碑は行を終えた講の人達が記念に建立したもので  
す。

碑面 寒念仏供養

寛延四年(一七五二) 三月日 講中

右横面 左 いせ

と刻まれています。

### (九) 庚申塚

塩ノ井区では、昭和五九年(一九八四)に塩ノ井神社の西  
隣の字「山ノ神(ミシヤグシ)」に、祀壇を設け以下のような  
石碑を整備しました。



寒念仏供養碑(道標)

## 1 庚申塔

- (1) 庚申 元文五年  
(二七四〇)
- (2) 庚申 寛政一二年  
(二八〇〇)
- (3) 庚申 安政七年  
(二八六〇)
- (4) 庚申 大正九年  
(二九二〇)
- (5) 庚申 昭和五年  
(二九八〇)

## 2 甲子塔

- (1) 甲子 講中 元治元歳(二八六四)
  - (2) 甲子 村中 大正一三年(二九二四)
  - (3) 甲子 昭和五九年(二九八四)
- ## 3 二十三夜塔(月待塔)
- (1) 二十三夜塔 嘉永元申年(一八四八)
  - (2) 三夜塔 村中 年号不詳

## 4 忠魂碑

碑面 忠魂碑 希典(乃木希典の揮毫)

碑陰 明治三十九年(一九〇六)十二月 耕地中建之

明治三十七・三十八年 戦没者三名(名略)



庚申塚全景

銅版はめ込み(碑陰)

昭和五十三年(一九七八)九月秋彼岸<sup>ひがん</sup>

三十三回忌 太平洋戦争戦没者十五名(名略)

塩ノ井区

## 5 馬頭観世音碑

(1) 馬頭観世音 文化五年(一八〇八)

(2) 馬頭観世音 供養碑 五基(個人建立のもの)

なお、馬(牛)頭観世音と書かれた供養碑は、他に墓地・道路端などに数多く見られます。

6 蛇絵碑 線刻で蛇が描かれています。年代不明、何のための碑かも不明です。

7 道祖神 道祖神の項に前述。

# 七 用水

## (一) 生活用水

### 1 下ノ沢の湧水

塩ノ井神社の下の窪地には三か所から豊かな湧水が流れ出ています。これが下ノ沢の湧水源です。

多くの住民が集住していた段丘上の居村の家々では、集落の中心を通る里道沿いの水路から水をくみ上げ、飲み水や勝

手、風呂、洗濯などに使うため、桶やバケツを使って天秤棒で担ぎあげ、生活用水として使っていました。そのため、ほとんどの家には大きな水瓶があり、また、風呂桶を持つ家では水汲みが子供達の日常的な手伝い仕事でした。

また、江戸時代の後半から明治・大正期にかけて段丘崖下の湧水が出ているところを中心に家ができ始めると、その湧水を生活用水としていました。

## 2 栃ヶ洞の湧水

青ノ坂の上り口周辺の家々は、栃ヶ洞からの湧水と段丘崖下の各か所からの湧水を生活用水としていました。

## 3 簡易水道の敷設

戦後、衛生上の安全性や安定した水量を確保する上水道の要望が高まり、三か所に簡易水道を作りました。昭和三〇年（一九五五）一〇月、上の段全域を対象に、三一年四月には



下ノ沢の湧水

下段北側の地区を対象に、三二年四月、下段南側地区を対象とする簡易水道が引かれ、これにより、特に主婦の家庭での労力が格段に軽減されました。

## 4 村営水道への加入

簡易水道は、いずれも小規模のもので、管理や経営面で行き詰まり、村営上水道の敷設が待望されるようになりました。昭和三九年から始まった村営上水道事業は、水利権なども絡んで困難な事業でした。各簡易水道が抱える事情を考慮しながら一本化するには多くの時間と労力を要しました。ようやく多少の課題を残しながらも、昭和四五年（一九七〇）には事業が軌道に乗るようになり、塩ノ井の三簡易水道も早くから村営上水道に組み込まれました。

## (二) 水車場利用

滝ノ沢、栃ヶ洞、下ノ沢の三河川は、年中豊かな水量を有し、また、急流でもあったため、各沢には「水車」が数多くかけられて利用されていました。多い時には大・小七か所も水車がかかっていました。

## (三) 水田用水

江戸時代の天竜川の洪水は、主なもので六六回を数えます（『村誌』下巻「水との闘い」参照）。単純に計算すると、三・五年〜四年に一回の割合で発生していたことになり、人々は驚くほど頻繁に水害を受けていたことになります。洪水の度

に水田は流され、砂に埋まり、天竜川の川筋は大きく変わりました。また、黒川の水域は、湿原地帯で水田耕作には向きで大変な労働力を要しました。また、ヨシなどが生い茂る「刈敷の草場」などに利用されてもいました。

1 天竜井（北殿の項参照）

2 中島井（北殿の項参照）

3 土地改良事業による灌漑・排水路

昭和二十六年（一九五一）から三十一年（一九五六）まで天竜井・黒川などを含む天竜川両岸の灌漑排水工事が行われました。木ノ下駅から北殿駅の区間には、字東田<sup>あさ</sup>周辺から飯田線の西側を通り長大な第一排水路が整備されました。東田・中田地区の湿田が乾田化され、生産力は一段と増しました。また、塩ノ井地籍の黒川周辺の水抜きも進み、その後、国道のバイパス道（現一五三号線）が開設されるまでになりました。

## 八 交通

### （一）伊那街道（後の三州街道）

伊那街道は、中山道の脇街道として塩尻宿から伊那谷を縦貫<sup>じゅうかん</sup>して岡崎・名古屋まで通じる交通路です。

滝ノ沢の土橋から下ノ沢の土橋までの塩ノ井地区の道筋は、

おおむね段丘崖下の県道（旧国道一五三号線）に当たります。現国道一五三号線と交差する辺りから明和坂<sup>めいわ</sup>までの所は、下段におりていました。

農閑期には農民は副業として、「飼い馬」に商人から預かった雑穀や綿、麻、紙荷、煙草などを積んで飯田、名古屋方面へ、後には松本近辺、甲州方面まで運搬し、帰り便で塩や海産物などを



伊那街道と青の坂

持ち帰る「中馬」稼ぎをしていました。塩ノ井も中馬村の一つで、久保村と合わせて五〇匹の中馬が認められていました。伊那街道は、明治九年（一八七六）に二等県道に改められ、次いで明治十九年には、二等県道三州街道と改められました。その後、何回かの改修が行われましたが、明治二十七年（一八九四）の大改修を経て、昭和四〇年（一九六五）頃、国道としての直線化改修大工事（段丘崖への高い石積み）が施されて、現在見るように大きく姿を変えました。

## (二) 居村の里道

### 1 塩ノ井神社を通って大泉への道

下ノ沢の土橋から往還道を段丘上へのぼる道は、塩ノ井神社を通って大泉へと通じる里道です。道幅は狭く一間ほどの細道でした。右手は急斜面で櫛の大木や針葉樹・広葉樹が入り交ざったうっそうとした崖になっていました。また、左手は下ノ沢に向かって野面の斜面になっていました。塩ノ井神社を南に回る道はそのまま大泉に向かっていきます。北側は山道でしたが、西光寺の少し上から五尺ほどの山道が北西方向に開いており、これを抜けると「草刈道」と呼ばれる北西に向かう道に繋がって、中込の上で「中込道」と合さり、北原の入会地や原畑へと向かいました。これを「北原道」と呼んだようです。塩ノ井神社北側の山道は直線的であったため、やがて広げられ、現在の村道四号線(道幅七メートル)となりました。

### 2 村中の道(中村小路から青ノ坂へ)

里道のほぼ中間点の高札場から右に折れて北へ向かう道を「中村小路」と呼びます。道を挟んで東・西に数軒の家並が並び小路でしたが、道幅は狭くせいぜい一間ほどであったようです。

小路の北詰まりから段丘崖を急な里道が栃ヶ洞の土橋へと下っています。通称「青ノ坂」です。この道も馬に二駄つけ

て通るがせいぜいの狭い道であったようです。栃ヶ洞の土橋の所には「寒念仏の碑」があり、道標の性格も有していました。(本文「寒念仏碑」の項、参照)

中村小路の分岐から四〇坪ほど上で、道が左右に交差し、これも古くからあった道です。右は、現在の公民館の所で左に上り字「ツイジガコシ」を通って「北原道」に繋がっていました。左は行き止まり道ですが、下ノ沢の湧水地に接しています。

上段には、このほか何本か道があったようですが、西天竜水路の開通とともに縦、横ともに切りきざまれ、現在のようにな直線的な農道に姿を変えています。

# 第四

## 北殿



## 一 北殿の由来

北殿は、大泉川扇状地の末端に形成された二段の段丘と天竜川の沖積地に立地した集落です。古く縄文・弥生時代から人が住み始めました。

北殿は南殿とともに、もとは殿村と呼ばれました。一六世紀前半の諏訪上社の文書に「殿村」が出てきます。殿村の地名の由来としては、御射山社の祭神である建御名方命が狩りをしたとき、家来たちが命をお守りした地であるところから殿衛と呼び、いつしか殿村に変わったという説があります（『長野県町村誌』）。また、この集落が段丘上に立地することから、「との」とは「棚」から転じたもので、棚状の小高い地から殿村となったのではとの説もあります。

殿村は宿場が大泉から北殿に移されたと同じ年、慶安二年（一六四九）に南と北に分かれ、北部が北殿村と呼ばれるようになりました。（寛文二年―一六七二―説もあります）北殿は呑用水に恵まれていたこともあって、伊那街道の宿場として、伝馬宿としてばかりでなく、旅籠など一般旅行者のための宿も造られ発展しました。

その後、明治八年（一八七五）南箕輪村の発足にともなって北殿耕地となり、大正三年（一九一四）北殿区となり今日

に至っています。北殿区は明治七年（一八七四）には七一戸、三一七人でしたが、平成三〇年には一一八三世帯、三三二七人となりました。住宅地はそれまでの国道一五三号線と北殿駅周辺から、県道大泉線や天竜川近くの国道一五三号線伊那バイパス周辺に拡大し、近年も住宅・人口が増加しています。

## 二 神社

### (一) 北殿神社

北殿区の鎮守社は、南殿にある殿村八幡社ですが、地元にも北殿神社がまつられています。（殿村八幡社については南殿の項参照）

北殿神社は国道一五三号線沿いの東側、消防団北殿屯所の北にあります。昭和四〇年（一九六五）三月、秋葉神社の地に社殿を新築し、北殿区内に散在していた社のうち天満宮を除く、おもな神社を集めてまつり、北殿神社と称することになりました。



北殿神社

合祀ごうしされている神社は、秋葉神社・里宮大明神・津島神社・豊川稲荷・居森殿稲荷・金毘羅宮・御鋏社・雨宮社・風宮社・居森殿疱瘡宮・子安社・山の神社の十二社です。

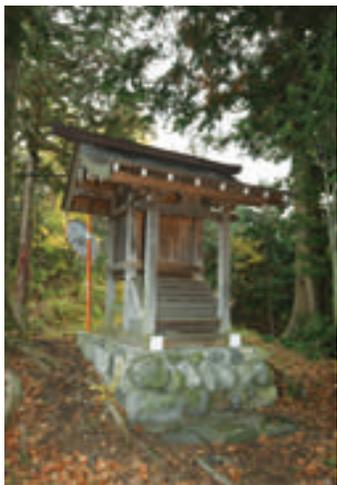
合祀のいきさつは、里宮神社の老朽化や、旧中部保育所拡充の問題とも関連し、昭和三九年九月より合祀に関する検討・協議が行われ、神社名を北殿神社と決定し、昭和四〇年三月七日遷宮祭が行われました。

秋葉神社の創建は、伝えによると北殿村に大火があった際、火災除に靈験ある秋葉大権現を勧請したものとされています。その時期は、北殿区有文書の秋葉社地売渡し証文によつて、寛政七年（一七九五）であろうと推定されます。また境内には弘化二年（一八四五）の常夜灯もあります。

## (二) 天満宮(天神様)

北殿の天満宮は松林寺南の林の中にあります。

創建年代は明らかではありませんが、北殿神社に所蔵されている棟札の一枚はこの天満宮の物と思われる。それは、元禄五年（一六九二）のもので、この天満宮創建または再建のときのもの



天満宮

思われます。この棟札から推察すると現在の社殿より大きかったと思われる。現在の社殿は平成一四年に新築されたものです。

## (三) 里宮神社跡



里宮神社跡の石碑

現在の北殿公民館の西、里宮神社があった所に「里宮神社跡」の石碑が、昭和四〇年（一九四五）に建てられました。

里宮神社の創建は明らかではありませんが、江戸時代の正徳・享保頃（一七一〇年代）に描かれたと推定される北殿宿絵図に、「里宮大明神」が記されているので、正徳以前には建てられていたことが明らかです。

また天明五年（一七八五）に建て替えられたことが、棟札によつて知ることが出来ます。それによれば、諏訪大明神をまつり、通称里宮大明神と呼ばれ、北殿の氏子のもろもろの悩みを祓い清め、火災・盗難の災いを除き、五穀豊穡を祈念したことが記されています。北殿神社に合祀される前の状

況については、明治一四年（一八八）の「神社取調書控」が残っています。

それによる

と、祭神は建御名方命・八坂刀売命・豊受大神の三神を祀り、境内三二坪（約一〇〇㎡）、社殿は間口三間半（約六メートル）・奥行二間半（約四・五メートル）、鳥居の高さ一丈一尺（約三・三メートル）開き九尺（約二・七メートル）などと書かれています。



里宮神社本殿（北殿神社内）

里宮の呼び方からして、西箕輪や神子柴などに史跡の残る御射山神社との関連が推察されますが、はっきりしたことはわかりません。



旧里宮神社（昭和初年）

現在、北殿神社に合祀されている里宮社の本殿は、一間社流れ造りです。屋根は柿葺で二重垂木。長押の裏に菱形模様の絵があります。実肘木で棟を支えています。出組の木鼻は単純素朴で、懸魚はかぶら懸魚で桁隠も付いています。両側面は板張りで縁高欄があつたあとがあります。

現在の北殿公民館の敷地には、旧中部保育所がありました。が、保育所が建設される昭和三〇年（一九五五）までは、里宮神社の参道と広場があり、桜の木が何本も植えられ、住民の憩いの場になっていました。

#### (四) 駒形大明神跡

駒形大明神は、正徳・享保頃（一七一〇年代）に描かれた北殿宿絵図に描かれています。天保九年（一八三八）の「村差出明細書上帳」には、「駒形大明神 社松森山 壱ヶ所 右境内四方式拾間 祭礼三月廿三日に御座候 村中呑用水出口の所に御座候」と書かれています。

この神社が、いつ創建され、いつごろ廃されたかははっきりしません。出頭湧水の東、通学路近くの中井沢沿いにあると推定されます。

#### (五) 山の神社跡

南箕輪中学グラウンド北の吹上線沿いに「山之神史跡」碑があります。

ここに大山祇命を祀る山の神社がありました。平成二

年道路拡張工事によって、北殿神社に合祀されたことが碑陰に書かれています。この碑は同年北殿共有財産区によって建立されました。



山之神社跡の石碑

### 三 松林寺

松林寺は北殿の北西、段丘の中段、東に開けた林に囲まれた中にあります。

(南箕輪村三二四〇の一番地)



本尊不動明王像

本尊は不動明王像です。伝えによると享禄年間(一五二〇年代)の創立で、はじめは性輪(林)寺と称し、箕輪庄殿村字大泉下にあり、両部宗の寺であったと言われています。また開基は源専法印とされています。(一説には正和三年―一三三四―覚言法印の開基。中興の開基が源専法印とも伝えら

れています。)天文年中(一六世紀中ころ)兵火にあり、下の段に移されました。

慶安二年

(一六四九)

地元信徒の願いにより、郡

内平出村(現

辰野町)の

高德寺を介し

て、高野山

金剛頂院に出

願し、同院より

遷された。

高野山金剛頂院の末寺として真言宗になりました。

明治二年(一八六九)第十五世常勝法印が亡くなり、同六年六月いったん廃寺となりました。住職の死去をきっかけに、廃仏毀釈の時代背景のもと、廃寺に至ったものと考えられます。



松林寺全景

その後、一峰松藏和尚が住職となつて再興をはかり、木下嶺頭院の末寺となり曹洞宗に改宗しました。大正八年（一九一九）、当時の住職金松道宗尼師がインド渡来の釈迦牟尼仏像を迎え寺宝としています。

なお、境内には石造の十王像があります。作られた時期や由来はわかりません。松林寺裏には歴代住職の墓塔十一基があります。また隣接する財産区有林には馬頭観音三十六体・巡礼供養などの仏教関係石塔十基・地藏尊像十体など多数の石仏類があります。これらは区内にあつた石仏類が集められたものです。



十王像

#### 四 新四国霊場（お四国様）

北殿の松林寺の裏山に四国八十八か所の霊場の本尊を石仏にして安置してあります。「新四国霊場」と称し、地元では「お四国様」と呼んで親しまれています。

#### (一) 有賀嘉吉のこと

この新四国霊場を發願し建立の中心となつたのは、有賀嘉吉（一七八八〜一八六六）です。嘉吉は天明八年（一七八八）に北殿有賀屋の長男として生まれ、幼い時に父母を失い、さまざま



奥の院 弘法大師像

苦勞を味わい、人生の無常を感じ一念発起して仏道に帰依しました。

そして全国各地にある神社仏閣の参詣を志して、天保四年（一八三三）郷里を後にしました。高野山参詣をはじめ、四国八十八か所の霊場を三度も巡礼した後、七年ぶりに帰郷し、天保十一年（一八四〇）新四国霊場の建設にとりかかりました。



奥の院

奥の院は天保一五年（一八四四）に完成しています。嘉吉は十年近くの年月をかけて、新四国霊場を完成させた後、嘉永元年（一八四八）に大願成就の感謝のために、再び四国巡拝の旅に出ています。信仰一途に生きた嘉吉は帰郷後、お四国様の傍らに法照庵という草庵を建て俳諧を趣味とし、念仏三昧の生活を送っていました。慶応二年（一八六六）正月四日に数え年七九歳で亡くなりました。

嘉吉は、嘉永元年（一八四八）からの四国西国旅行を綴った『旅行日記』や、『法照庵句集』という冊子を残しています。

## （二）霊場建立の趣旨と経過



「勧進帳」の表紙

有賀嘉吉が新四国霊場の建立を發願した趣旨と、寄付者名を記した天保一一年（一八四〇）の「新四国勧進帳」が大宗館

文庫の中に残っています。

それには、「尊い霊場の御利益を受けるためには、四国八十八か所は伊那の地からはあまりにも遠い。年寄りや子供など巡礼に出られない人たちにも何とかして霊場参拜のできる喜びを分かち合いたい。」との趣旨が述べられています。

新四国霊場の建設に

あたつて必要とする資金を、嘉吉と建立世話人たちは、三百余人から集めています。寄進した人々の名は各石仏の台座に刻みこまれています。その多くは上伊那中部・北部にわたる親類縁者や近隣の村人です。中には遠く越後・近江彦根・摂津池田からの寄進者もおります。これらは、嘉吉の四国遍路の道連れになった人々と思われ

ます。

奥の院の弘法大師像や各札所の本尊石仏は、大泉の原此右衛門とその他の石工たちの手によって作られました。



お四国様の石仏群

嘉吉は四国八十八か所の靈験にあやかれるよう、各札所の土を香箱こうばこに納めて持ち帰り、それぞれの石仏の台座の下に埋めたということです。

各石仏の台座には寄進者名と、八十八か所の本尊名が彫られ、一番札所から八十七番札所まで整然と並べられています。なぜか三十六番が「勸進帳」にも記載されず、石仏もありませんでした。また八十八番は「勸進帳」にはありますが、石仏がありません。三十六番は地元有志により、昭和五四年（一九七九）に追建されました。また参拝者は奥の院の弘法大師像を八十八番とみなして参拝しています。

### (三) 諸国神社仏閣塔

有賀嘉吉の墓と顕彰けんしょうを兼ねた石碑が境内にあります。正面には「奉拝諸国神社仏閣塔」、東面には「瓢箪ひょうたんとわれとのあひのさくらかな 湖月 有賀嘉吉」と嘉吉の句が、北面には「法照庵仏学祖印居士」と嘉吉の戒名、西面には箕輪町木下



有賀嘉吉の墓碑

の医師中川道策（一八〇〇～一八六八）が記した有賀嘉吉顕彰の文が記されています。

### (四) 信仰と保存

こうしてできた新四国霊場は、村内はもちろん近隣の村々からの参拝者でにぎわいました。特に戦前・戦中にかけては戦勝祈願のため盛大な祭りも行われました。しかし、戦後はすっかり忘れられて草にうずもれるばかりでした。

昭和五〇年（一九七五）には「新四国霊場保存会」が作られ石像や守堂もりどうの修理・境内整備が行われ、昭和五二年（一九七六）には村文化財第一号に指定されました。その後、敷地が村に寄贈され村教育委員会によって案内板などの整備が行われました。現在も北殿老人クラブにより、毎月八日に清掃活動が行われています。

## 五 遺跡・古跡・名木

### (一) 北垣外遺跡

この遺跡は、北殿駅西側の段丘上で国道東にあり、南北三五〇㍎・東西一六〇㍎の範囲にあります。

宅地造成に伴う発掘が平成三年（一九九一）四月から行われました。

その結果、弥生時代の住居址四軒分、古墳時代から平安時代の住居址六軒分と掘立柱式建物址が確認されました。また



扁円筒型土製品

遺物としては、弥生時代の甕や壺の破片や環状石斧が発掘され、古墳時代の土師器や須恵器の完形品や勾玉破片などが発掘されました。奈良・平安の遺物としては愛知県さなげの猿投産の灰釉陶器破片や一二世紀から一三世紀の中国景徳鎮産の白磁破片も発掘されています。

この遺跡の発掘により、上伊那で初めて弥生中期終末期の集落址が確認されました。また古墳時代になまかみ竈神祭祀に使われたと考えられ、全国的にも出土例が少ない上の面に四つの穴を持つ扁円筒型土製品が発見されたことも注目されます。

## (二) 倉田城跡 (付 倉田将監墓・北条丹後墓)

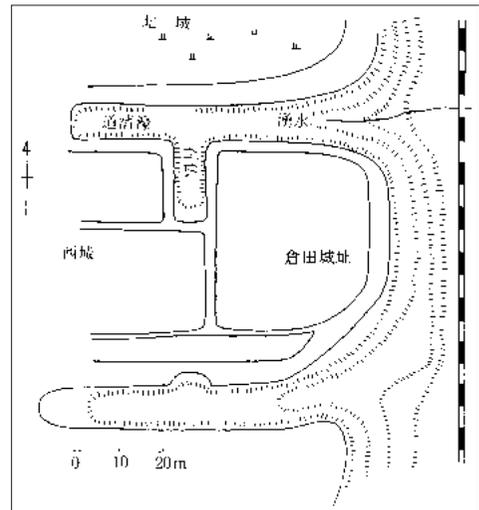
北殿駅南西の段丘上、北殿信号横の路地を入った奥の段丘端にあります。

東西約四〇㊦、南北約五五㊦の平地で、元は水田でしたが今は住宅が建っています。東は高さ二〇㊦余の急な崖で、木立の下を飯田線が走り、南と北に深い堀があります。北の堀の途中から南に向けて大きな溝があることから、昔は西にも堀が南北に続いていたものと思われます。

北にある堀は道清壕と呼ばれ、そこには清水が湧き出しています、土地の人は道清清水と呼んでいました。今も一年を通じて

じて水が湧いています。この古城跡を本城と呼んでいます。ここに接して北城・西城の地名が残っており、御小屋というところもあつたそうです。

言い伝えによると、鎌倉から来た倉田筑後守は、はじめ伊那市横山の鳩吹城に居住していました。木曾義康と与地ちで戦って破れ、北殿に来て館を構えたとのことです。その子将監安光は剛勇の士で、小笠原長時に加勢した福与城ふじさわよりちかの藤沢頼親に属して活躍し、天文七年(一五三八)七月一日、甲斐国かゐのくに韮崎の合戦で武田勢とたたかい討死したとい



倉田城跡付近の見取図



倉田城 (中央右の林に囲まれた範囲)

うことです。その子淡路守・石見守を経て子孫がこの地に住みついたといわれています。

倉田氏の子孫たちは、将監の事跡をしのいで、いつのころか城の北のヤセオにある倉田家の墓地に将監の墓を建てました。碑面には「倉田将監友綱墓」と書かれています。

なお、『伊那温知集』には、この地に倉田氏の前に北条丹後守が住んでいたと記されていますが、詳しいことはわかりません。中井沢を見下ろす段丘上東突端の北条家の墓地の中に、「北條丹五塔」と書かれた石碑があります、右側面に享保八年（一七二三）の年号が読み取れ、丹後守の子孫が北条丹後守の墓として建てたものと思われます。

### (三) 浅間塚跡碑

南箕輪村公民館上の道路沿い、アルプス信用金庫南箕輪支店斜め前、浅間塚団地北東角に昭和四〇年（一九六五）に建てられました。

この付近に富士型の富士塚があり、浅間神社もまつられていましたが、浅間塚団地造成によりこの塚は壊さ



浅間塚跡の石碑

れ、神社もなくなりました。

### (四) エドヒガン桜

南箕輪小学校グラウンドの道路を隔てた北にある古木です。この桜の木は高さ約一七呎、幹回りの太さ六・五呎あり、樹齡二七〇年余と推定されています。

開花期が早く、淡紅白色のきれいな花を咲かせます。

この桜は八幡参道に沿っており、根元に七基の庚申塔があります。そのうち元文五年（一七四〇）の庚申塔が建てられた際に植樹されたものと伝えられています。昭和五二年（一九七七）に村の天然記念物に指定されました。また、毎年開花期には北殿区によってライトアップが行われ、肥料を施すなどの保護がはかられています。



満開のエドヒガン桜

## 六 句碑・筆塚・歌碑・顕彰碑等

### (一) 芭蕉句碑(おきな塚)

上伊那郡で最も古い松尾芭蕉(一六四四～一六九四)の句碑が、国道一五三号線から北殿駅に向かう、旧伊那街道の明和坂下にあります。

かつては現在地より二百ほど離れた塩ノ井地籍に「おきななの松」があつて、その下に東向きにこの芭蕉句碑と矢部やべ蟻堂かどどうの筆塚があり、「おきな塚」と呼ばれていました。「おき



松尾芭蕉句碑

な」とは芭蕉のことを指します。矢部蟻堂の筆塚とともに明治二七年(一八九四)に三州街道の改修により、西向きになり、さらにその後の道路改修で現在地に移されたと思われるます。「塩ノ井」の翁塚参照)

碑面には中央上に「芭蕉翁」とあり、その下に三行書きで



明治27年頃のおきな塚(「今様奇談」の挿図)

「花の陰うたひに似たる旅ね哉」の句が彫られ、左すみに「尾州隠士也有七十三齡書之」とあります。碑陰には「元禄七甲戌十月十二日 当国三狂庵門人 箕輪連中」と三行に彫られています。

この句は、貞享五年(一六八八)に芭蕉が「笈の小文」の旅の時に読んだ句です。句意は「こうして桜の花の下にいると、謡曲の中の人物になったようにまことに優雅な、旅の宿りであることよ」といった内容です。

句碑の筆者は、尾張藩一二〇〇石取りの上級藩士で、御用人・大番頭・寺社奉行などを勤めた、横井也有(一七〇二～一七八三)です。也有は宝暦四年(一七五四)五三歳で隠居し、半掃庵と称し、俳諧連句を作り、多くの門人を育てました。優れた俳文学である『鶉衣』を著したことも知られています。

また、三狂庵は飯田藩士の窪田桐羽(一七一七～一七八八)のことです。桐羽は、横井也有に師事し、宝暦から天明期(一七五〇年代から八〇年代)にかけての伊那谷俳諧の指

導的な人物でした。この碑が建立される一一年前に、也有が跋文ぼつぶんを寄せ、桐羽が編纂した俳諧集『その原』が発刊されています。そこには、大泉の清水柳茂しみづりゅうも（一七二一〜一七八七）など一七人が「箕輪連」として俳名を連ねており、桐羽の門人がこの地で活躍していたことがわかります。

句碑の建立は、「也有七十三齡書之」から安永三年（一七七四）と考えられます。芭蕉没後八〇年の追善供養として、この地の俳人たちが、桐羽を介して、也有に揮毫きしこうを頼み句碑を建立したものと思われます。なお碑陰の元禄七年（一六九四）一〇月二二日は芭蕉の命日めいじちです。

## (二) 矢部蟻堂筆塚

明和坂下の芭蕉句碑と並んで立っています。碑面には上に「蟻堂 矢部 先生」と二行に縦書きされ、その下に「筆塚」と大書されています。



矢部蟻堂筆塚

矢部蟻堂（一八三二〜一八七九通称は政也）は天保三年（一八三二）、高遠藩医の家に生まれまされた。学問を好み、書道も得意でしたので、医業を継がず、寺子屋師匠となりました。文久元年（一八

六一）塩ノ井に私塾を開き塩ノ井・北殿の子どもたちを教えました。さらに明治五年（一八七二）から明治九年までは創立直後の北殿学校の教員として習字・読み書きを教えました。門人の中には清水齋しみずしなど後世村の中堅として活躍した人が多く、清水ら門人たちが明治二年（一八八八）に、その徳をしのんで筆塚を建立しました。

## (三) 伊藤翁筆塚

伊藤翁筆塚はエドヒガン桜の下にあります。

碑の表面中央に「筆塚」と大書され、右下に「世話人」「筆兎中」と二行書きされ、左に「七十五翁」「伊藤太次兵衛利庸」とあります。



伊藤翁筆塚

碑陰には「文久元酉年」「十二月」と二行書きされています。（文久元年は一八六一年）

伊藤氏は、幕末の寺子屋師匠であったということ以外は来歴等はずきりしません。

## (四) 倉田寛幹歌碑

北殿公民館の西に建てられています。碑面には「潮音四賀光子先生撰書 訪友の たたへて云ふに ほこらしく 仙丈岳と 雪の山さす 寛幹」と彫られています。

倉田寛幹（一

八八三〜一九六

七）は、久保に

生まれ、木下小

学校や中箕輪・

南箕輪小学校

などの訓導（教

員）を三五年間



倉田寛幹歌碑

歴任しました。その後、村議・収入役など要職を十数年、一生を公職に捧げた人です。一方で、短歌を好み、号を月哉といいました。潮音同人として太田水穂や四賀光子に師事し、歌集『箕輪の月』を残しています。

教え子・歌友によって昭和四四年（一九六九）三月に歌碑が建てられました。

### （五）倉田翁頌徳碑

倉田友喜（一八三七〜一九一四）の顕彰碑が、通称ヤセオ地籍の倉田家の墓地にあります。

碑面には倉田友喜（三郎兵衛、後に改め三郎）は、弥五左衛門友長の長男として生まれ、明治初年に北殿村里正・副戸長を経て、南箕輪村副戸長・村会議員・郡会議員を歴任、さらには三等郵便局長に任じられ、大正三年（一九一四）一月二九日、七七歳で病没したこと等が書かれています。



倉田翁頌徳碑

八五八〜一九一九）によって撰書され、大正五年（一九一五）四月に建てられました。

### （六）南箕輪中学校校歌碑

南箕輪中学校は戦後の学制改革に伴い、昭和二十二年（一九四七）四月に発足しました。校舎新築などの事業が進められる中で、校歌制定の気運が高まり、作詞はアララギ派の歌人で彫塑家の藤澤古實（一八九七〜一九六七）に、作曲は伊那と縁の深い高木東六（一九〇四〜二〇〇六）に依頼



中学校校歌碑

この碑は、上部に横書きで「倉田翁頌徳碑」と伯爵徳川達孝（一八六五〜一九四一）により篆額され、下の本文は仏教哲学者の井上円了（一

し、昭和二十五年（一九五〇）三月に制定、同年四月八日の開校記念日に披露されました。

中学正面玄関西にある校歌碑は、昭和五五年（一九八〇）三月に第三三回卒業生の卒業記念として建立されました。揮毫者は当時の南箕輪中学校長で書家の北原青雲（本名繁一）です。

### (七) 「若竹」の像



中学校正面  
玄関、校歌碑  
の手に「若  
竹」と名付け  
られたブロン  
ズの少年像が  
あります。中

学校創立五〇周年を記念して平成九年十月に建立されました。像の作者は辰野町出身の瀬戸剛（ごう）です。

### (八) 「人には自らは」の碑

南箕輪中学の正門西にあります。

碑面には「人には やさしく暖かく 自らは 厳しく正しく 健やかに たくましく 高坂正顕」と六行に書かれています。

碑陰にある建碑のいきさつによると、中央教育審議会の

「期待される人間像」最終報告を受け、その委員会主査であった高坂正顕（当時東京学芸大学長）に執筆を依頼し、生徒及び一般の銘とするために、PTAなどの浄財により昭和四一年（一九六六）二月に建立されたとあります。

## 七 信仰碑

### (一) 庚申塚・甲子塔

南箕輪小学校の北、エドヒガン桜の根元に庚申塚・甲子塔があります。庚申塔と甲子塔を建立順に紹介します。

- (1) 庚申（板碑）  
延宝八年（一六八〇）
- (2) 青面金剛像  
しやうめんこんごう  
正徳六年（一七一六）
- (3) 庚申  
元文五年（一七四〇）
- (4) 庚申  
寛政一二年（一八〇〇）
- (5) 庚申  
安政七年（一八六〇）



庚申塔群

- (6) 庚申 大正九年（一九二〇）
- (7) 庚申 昭和五五年（一九八〇）
- (8) 甲子 元治元年（一八六四）
- (9) 甲子 大正一三年（一九二四）
- (10) 甲子 昭和五九年（一九八四）

## (二) 道祖神

### 1 道祖神

北殿と塩ノ井境の国道一五三号線西側にあります。碑面文字は深く力強く彫られています。碑陰に「天保七秋（そうげつ）壯月（むらじゅう）邨中」とあります。天保七年は一八三六年、壮月は旧暦で八月のことです。



塩ノ井境の道祖神

### 2 道祖神

北殿字内城の三叉路の路傍、防火貯水池の前にあります。建立年代は不明です。

### 3 道陸神

2と並んで建てられています。道陸神は道祖神のことですが、建立年代は不明です。

## (三) 月待信仰碑

### 1 廿三夜塔

エドヒガン桜の根元の石碑群の中にあります。この碑は天明七年（一七八七）の二二月に建てられたものです。

### 2 二十二夜塔

北殿字内城の三叉路の道陸神の隣にあります。建立年はわかりません。

## (四) 山岳信仰碑

芭蕉句碑・矢部螻筆塚の隣の、大門川にかかる明和橋の横にあります。建てられた年代はわかりません。

石柱の正面に、「奉講」とあり、その下の右に「大峯山大権現」、中央に「富士浅間大神」、左に「金毘羅大権現」と彫られています。右側面には「立山大権現」「月山大権現」、左側面に「湯殿山大権現」「羽黒山大権現」と彫られています。これらの山は、修験道信仰の代表的な山岳修行地です。



山岳信仰碑

江戸時代に、この村の山岳信仰の講中の人々が建てたものと思われまます。

## (五) 水神碑

### 1 水神

南箕輪中学グラウンドの南東下の「いせんあわら」の横井の出口横にあります。

碑面によれば、この水神は横井発起人の倉田徳三郎が建

てたものです。この横井は「亀徳水」と呼ばれ、明治三十一年（一八九八）一月二十九日に着手し、同三十四年一月に竣工しました。この水は約二町歩の水田用水として使われています。碑陰には「あらかしめ足利て嬉しやこの清水」の句が添えられています。

### 2 水神

松林寺南西の裏山に建てられています。碑面には「水神」と書かれ、左隅下に「北殿北部水道組合」と書かれています。また「大正一四年三月建之」と右側面に書かれています。大正一三年（一九二四）に松林寺下の湧水を水源とする北殿北部上水道が、一七戸で作られたことを記念して、翌年建てられた水神碑です。



「いせんあわら」の水神碑

## 八 近代施設

### (一) 北殿学校跡

学制の本格実施に先立ち、北殿に郷学校が開校されたのは明治五年（一八七二）九月一七日のことです。松林寺が無住となり、廃寺となった建物を利用して、久保村・大泉村・北殿村・南殿村の児童が集まって授業が開始されました。同六年一月一五日には学制施行により、明治学校と改称されました。その後それぞれの地区に独立の学校が作られ、学童も各学校で学ぶようになりました。明治学校は、明治九年北殿学校と改称されました。

明治十一年（一八七八）

七月一日には、北殿・大泉・久保・南殿の四校を統合し、現在の桜ヶ丘に南箕輪学校が創設され、二月一日からは新築の校舎で学ぶようになりました。

### (二) 南箕輪郵便局

近代郵便制度が始まったのは明治四年（一八七一）



「北殿学校」跡標柱

のようですが、南箕輪郵便局の前身の北殿郵便取扱所が、松島郵便取扱所から分離独立したのは明治七年（一八七四）一月一日でした。それも明治一八年（一八八五）には再び松島に統合され、さらに明治三五年（一九〇二）に南箕輪郵便取扱所として独立し、明治三八年に南箕輪郵便局となりました。

当初無集配局でしたが、明治四三年からは郵便集配事務を開始し、南箕輪村と西箕輪村一円を担当地域にしました。また、このころに<sup>かわせ</sup>為替・貯金・電信・電話業務も扱うようになりました。

昭和五年（一九三〇）局舎を南箕輪村三四六四番地（現在の北殿青山ビルの地）へ移転新築しました。戦後、昭和三二年（一九五七）に電話交換業務は伊那電報電話局に統合されました。さらに昭和五年（一九七六）に現在地の南箕輪村三三五八―三番地に移転新築しました。平成一九年日本郵政



旧南箕輪郵便局舎



現在の南箕輪郵便局

の民営化を経て、現在は日本郵便株式会社南箕輪郵便局となりました。

### (三) 南箕輪村郷土館

南箕輪小学校の西隣、南箕輪村公民館敷地内にあります。

昭和四六年（一九七二）、改築中の中学校の木造校舎の一部を移築して郷土館が造られました。所蔵資料を整備・補充していく中で改装が必要になり、平成一四年改修して現在の姿になりました。



南箕輪村郷土館

館内所蔵資料としては、村内遺跡出土の石器・土器、大蔵館文庫、古書・古文書類、民具、写真などがあって、その一部を展示公開しています。週一日の開館で、郷土学習の拠点となっています。（開館は水曜日午前九時～一六時半、その他の見学は教育委員会事務局に連絡）

### (四) 長田製糸工場跡

幕末からの養蚕業の発達を受け、この地域でも製糸業が興ってきました。

北殿の製糸は、明治七年（一八七四）有賀又七郎が自宅に工女一〇名で座繰りによる製糸工場を始めたのが最初です。

明治十年には器械製糸を導入し工女三〇人を抱えて操業していました。

長田国吉が長田製糸を起業したのは明治二六年（一八九三）ですが、明治三六年には三州街道沿いの旧郵便局（現在の北殿青山ビル）の北に大規模な製糸工場を造りました。当初一〇〇釜ほどの工場でした。

だが、大正五年（一九一六）には二三六釜・工女三三六人という大規模な工場になりました。大正八年には工場を北殿駅前に移し、さらに規模拡大をはかり、全国各地から繭を買って集め長田製糸の全盛期を迎えました。

ところが、昭和四年（一九二九）の世界恐慌の影響を直接受け、さらに人絹の発達もあり製糸業は大打撃を受けました。その結果長田製糸は昭和五年に廃業し、業種変更しました。



長田製糸工場全景（大正末年）

## 九 用水路

### (一) 生活用水

#### 1 出頭湧水

中部保育園北の、段丘崖下の森から豊かな湧水が流れ出ています。

この水源から、小水路によって段丘面全域の家々に配水され、住民の飲料水などの生活水や、農業用水として利用されてきました。

正徳・享保頃（一七一〇年代）に描かれた北殿宿絵図にも、現在とほぼ同じ流れで小水路が描かれています。

湧水近くでは、明治以後いくつかの横井戸が掘られ生活水・農業用水として利用されてきました。

さらに、これらの湧水・横井戸を利用して、昭和三〇年（一九五五）代に、隣組単独や数組合同で水道組合が作られ、いくつかの簡易水道が敷設されました。



出頭水源付近の清流

## 2 北殿駅前水道

北殿駅付近の段丘下には湧水を利用したいくつかの簡易水道がありますが、最も古いものは昭和三年（一九二八）に着工、昭和一〇年に完成したもので、現在でも洗い物などに使用されています。

### (二) 水田用水

この地域を流れる天竜川は、現在のような護岸工事が行われる以前は、しばしば氾濫を繰り返し、流路を変えてきました。従って水田用水の井堰も埋没や取り入れ口の決壊等で、その流れは定まっていまませんでした。

江戸時代には天竜井と笠田井が、ともに三日町を水源として引かれていたことが文書によつて確認できます。また黒川の水も使用されていました。

#### 1 天竜井

箕輪町三日町の町田橋辺より取水し、三日町や本村下段の久保・塩ノ井・北殿地籍一帯を灌漑しました。

天竜井は古くより公費をもつて普請・修理してきた大切な井堰でした。洪水で増水すると、たびたび取り入れ口の牛枠が流され、その修理補修は、受益村の負担によりその都度行われてきました。

#### 2 中島井

百間堤防の上から天竜川の水を自然流入で取り入れ、旧田

中城付近一帯を灌漑しました。

### 3 土地改良事業による灌漑・排水路

昭和二六年（一九五一）からは、伊那土地改良区（一市一町一村の広域）による土地改良事業が、北殿に事務所を構え開始されました。箕輪町の三日町の天竜川に頭首工（取水口）が作られ、天竜井・黒川を含む天竜川両岸の灌漑・排水路工事が行われました。昭和三二年（一九五六）に完成し、北殿地籍においても安定的な灌漑用水の確保と、冷水・悪水排除が行われ、乾田化と耕地整理が進み、米の生産量が増大しました。

## 十 交通

### (一) 北殿宿（大泉北殿合宿）

慶長年間（一六一〇年前後）に春日街道が開かれたころ、大泉が松島宿と伊那部宿の間の宿場に定められました。それ以来伝馬一〇匹をもつて伝馬宿を勤めてきました。ところが、慶安二年（一六四九）に、伊那街道筋の北殿へ宿場を移すことになりました。そこで大泉村から問屋一人、伝馬役六匹分の百姓七人が移ってきました。同時に北殿村にも問屋一人、伝馬役六匹分が定められました。そして御伝馬役屋敷一軒分



正徳・享保ころ (1710年代) の北殿宿絵図 (原図は82cm × 116cm)

に上畑一反二畝(約一二〇〇m<sup>2</sup>)ずつの居屋敷が与えられました。北殿区有文書「北殿宿絵図」にも描かれているように大泉から移ってきた家は街道の西側に、北殿は東側に、それぞれ間口十二間(約二一<sup>ぶ</sup>丈)又は六間の屋敷を区画して宿敷を整えました。それ以来この宿場は、大泉北殿合宿と呼ばれました。この十二人十二匹の常備人馬によって、松島宿から来た旅人や荷物の世話をし、継ぎ立てを行って伊那部宿まで送り、また伊那部宿から来たものは松島宿まで送りました。

二軒の間屋はその荷継の事務を取り扱い、また公儀役人の宿泊のための本陣も兼ねました。その他一般の旅人を泊める旅籠屋もできました。旅人だけでなく馬も泊めました。

警戒を厳しくするために、どこの宿場でも入口や出口の道は、わざと鍵の手に曲げましたが、北殿でも、もと伊那街道が塩ノ井から明和坂を登って、今の国道一五三号線に出るところが鍵の手になっていました。

常備の人馬だけでは、大通行のとき不足することがあるので、その時は田畑・神子柴・南殿(以上南箕輪村)・



現在の北殿宿付近

大萱・上戸・中条・与地・羽広(以上伊那市)の八か村から村の石高に応じた割合で荷物運搬の人馬を差出すよう助郷村が決められていました。さらに大通行の時には増助郷として、大泉新田・吹上・八ッ手・野口・中坪(以上伊那市)・富田・中曾根(以上箕輪町)の七か村が指定されていました。しかも村々にはこれらの負担以外に中山道木曾助郷の負担がありました。

はじめのうちは一カ月の半分の一日ずつ、大泉と北殿が交代で伝馬役を勤めました。正徳五年(一七二六年)の御裁許で、北殿が二〇日、大泉が一〇日ずつ勤めるようになりました。

北殿宿を通過した著名人としては、本草学者で、紀行文を残した菅江真澄(一七五四〜一八二九)がいます。その著『伊那の中路』の中で、天明三年(一七八三)五月二三日北殿宿の茶屋で雨宿りをしたことを書いています。また、地元の山崎宇八郎の著した『今様奇談』には、元治元年(一八六四)一月二二日、水戸天狗党の浪士が約八〇〇人の大部隊で北殿宿を通行した様子を絵入りで紹介しています。

明治維新になって、明治五年(一八七二)宿駅制度が廃止になり、大泉北殿宿も公的な宿場としての役割は終わりました。

## (二) 北殿駅

伊那電車軌道(後の伊那電気鉄道、現在の飯田線)が木之下から御園まで通じたのは明治四四年(一九一一年)一月でした。その時に「きたとの停留場」が作られ、北殿駅の歴史が始まりました。その後、大正二年(一九一三)飯田までの全通により、旧北殿駅舎が作られました。北殿駅の大正一三年の年間乗客数は六九〇一人、最大時の昭和二八年に八〇九八八人という記録が残っています。

かつては大明化学本社工場への専用引き込み線がありましたが、昭和五九年(一九八四)に廃止されました。昭和六〇年(一九八五)には無人駅化され、平成一一年に現在の待合所が新築されました。

(三) 北殿橋(天竜橋)

江戸時代には、北殿と福島の間为天竜川に、渡し舟はありましたが、橋はありませんでした。



現在の北殿駅とホーム

明治一一年(一八七八)の『長野県町村誌』には「北殿橋長三十三間(約六〇呎)、幅六尺(約一・八呎)、土橋なり」とありますので、明治初めには橋が架けられていたと考えられます。

この土橋というのは、太い丸太棒を打ち込み、その上に丸太を組み、その上に粗朶(小枝)を並べ、土砂をのせて踏み固めて築いた橋でした。幅は荷車一台が通れるくらいでした。洪水があると橋の上まで増水し、流失することがしばしばで、そのたびごとに架け替えられてきました。

明治四三年(一九一〇)に土橋を架設したときの記録によると、四月に「橋梁架設願」が北殿・福島有志・総代により提出され、六月には許可が下りています。工事は二月一日に起工し、二九日に竣工しています。費用は北殿・福島をはじめとする天竜兩岸の一〇の耕地の分担金、および長田製糸はじめ諏訪・辰野の製糸家や個人の寄付金など合計四九七円三五銭と、資材提供でまかなわれました。橋の幅は六尺



旧天竜橋(北殿橋)

(約一・八<sup>段</sup>)、橋の長さ  
は北殿から中洲へ一四間  
(約二五<sup>段</sup>)、さらに中洲  
から福島へ一六間三尺  
(約三〇<sup>段</sup>)でした。

昭和九年(一九三四)  
にコンクリート橋脚の  
天竜橋(長さ九三・五<sup>段</sup>、  
幅四<sup>段</sup>)が永久橋として  
作られ、洪水のたびごと  
の架橋の苦しみからよう  
やく解放されました。それ以来七〇余年、天竜川の東西をつ  
なぐ主要な橋として利用されてきました。

現在の天竜橋は、平成二二年に国道一五三号線伊那バイパ  
スの竜東へ渡る橋として建設されました。それにともない旧  
天竜橋は取りこわれました。

なお、北殿・福島間の橋名は、北殿橋とも天竜橋とも呼ば  
れています。永久橋になってからは正式には天竜橋を使っ  
ています。

#### (四) 道標

元は国道一五三号線から小学校への八幡参道の分岐点に  
あったものを、エドヒガン桜の近くに移したものです。



現在の天竜橋(北殿橋)

四角柱の道標で、碑面右側に「右 はちまんみち 八幡道」、左側面に「左  
いせ道」と書かれ、正面には「天保二 かとう 辛卯歳 正月中 ちゅうかん 浣建之  
と彫られています。

これは、伊那街道を通る旅人のためのみちしるべです。天  
保二年(一八三一)は今から約一八〇年近く前になります。  
また、中浣とは中旬のことです。江戸時代の庶民の旅は、主  
として神社仏閣参詣のための旅でしたので、このような道標  
が街道沿に建てられました。



エドヒガン桜横の道標



# 第五 南 殿



## 一 南殿の由来

戦前より八幡宮西の「宮の上遺跡」からは、縄文時代中期・後期の土器・石器が多く採集されました。そして近年、八幡宮西より平安時代の無傷の「蔵骨器」が出土し、村指定文化財となりました。また、八幡宮も古い歴史を持った神社です。これらのことから、住みよい場所として、古くから人々の生活が営まれてきた地域だったと思われるます。

殿村八幡宮の社名からわかるように、南殿地区と北殿地区は昔は一つの村で「殿村」と呼ばれていました。慶安二年（一六四九）（一説には、寛文二年（一六六二）とも言う）に二つに分かれたと伝わります。



宮ノ上遺跡出土蔵骨器

江戸時代、南殿村は幕府領（天領）と旗本領（私領―太田氏）に分かれたり、また一緒になったりして村としていろいろな苦労があったようです。江戸時代の古地図を見ると集落は、大泉川左岸寄りに伊那街道を挟んで東西に広がっており、

現在の役場周辺は林が広がっています。小さな村で人口も少なかったようですが、地藏庵や行者堂などの古跡、大宗館文庫（村指定文化財）等が残されており、文化的な生活が営まれていたと考えられます。

明治八年（一八七五）、六ヶ村が集まって南箕輪村が出来た時、南殿村は「南殿耕地」になり、大正三年（一九一四）区制施行で「南殿区」となり、今日に至っています。

南箕輪村が出来て以来、村の中心に位置する南殿には村の公共施設がだんだん出来ました。それに連れて人々が集まり、集落が北へ・西へ・下段へと広がっていきました。住宅・人口が今も増え続けています。明治八年に三九戸・人口二四七人だった南殿区は、平成三〇年一月には四一五世帯・人口二二〇人になっています。

## 二 神社

### (一) 殿村八幡宮

南箕輪村役場の南の森が境内です。

祭神 応神天皇

由緒

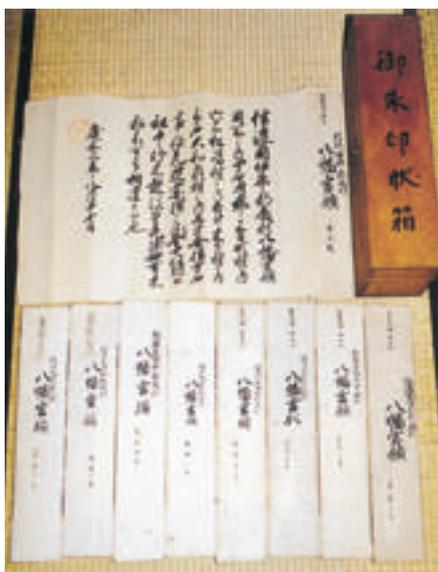
全国の八幡宮一〇九座に含まれる格式の高い八幡宮です。



殿村八幡宮社殿



殿村八幡宮社叢



殿村八幡宮朱印状

伝承によりますと、平安時代に源満仲が勅命を受けて、戸隠の逆徒征討に来た時、逆徒の勢いが強く平定するのに苦しみました。そこで岩清水八幡宮に神助を祈願し、ようやく平定することができました。満仲は凱旋の途中この地を通り、景勝の地であったので、この地に八幡宮を勧請し、弓矢を奉納して八幡神にお礼をしたと言います。時に承平二年（九三二）のことだったそうです。

その後、霊  
験あらたかな  
神社というこ  
とで、領主た

ちに尊崇されてきました。文治元年（一一八五）には信濃の国の守護・小笠原長清が田を寄進、箕輪郷の領主藤沢頼親は武器を奉納し社殿の修理を行い、武田信玄は天文二三年（一五五四）伊那郡を攻略できた事を謝し七貫二百文の土地を奉納、木曾義昌も天正一一年（一五八三）に五貫文の土地を寄進したと伝わります。その後も小笠原秀政、朝日受永などから寄進を受けています。江戸時代に入り、朱印地になり、三代将軍家光以後の朱印状が九通、社宝として残されています。（村指定文化財）

明治五年（一八七二）に村社になり、朱印地奉還により遞減録金を交付されるようになりました。明治九年、長野県第一回神饌幣帛料共進指定神社となり、昭和三年（一九二八）郷社となりました。

明治二三年（一八八九）火災により社殿が焼失してしまいました。昭和五七年（一九八二）には社務所を改築しました。

鳥居は控え柱を持つ両部鳥居で、傍らにある御手洗は、明治七年有賀光彦の寄進によるものです。数十段の石段を上ると、左側に元禄三年（一六九〇）奉納の御手洗があり、拝殿の前には、享保三年（一七一八）をはじめとする三対と四基の奉納された灯籠があります。

拝殿は入母屋造り、正面向背は唐破風造りで、屋根は銅板葺きです。擬宝珠つきの上り高欄のついた階段の上は、正面及び側面には擬宝珠つきの高欄のついた切縁を巡らし、正面は格子戸、側面は横板壁です。虹梁様頭貫の木鼻は、単純な雲形で組み物は三ツ斗の変わりものです。

本殿は切妻流れ向背造りで、棟の両端に千木を置き、五本の鯉木を乗せ鬼板を付けています。正面は板戸で、三方は横板張り、軒支輪の三段はていねいな造りで、組物は三手先の変形、向背柱は左右へ二手出る組み方をしています。蛙股もていねいに造られています。虹梁はつなぎ虹梁になっています。

社殿は森林に覆われ、参道が長く続き、高い石段の上にあつて荘厳な感じがします。御神木の社殿横の大杉は、樹齢数百年と推定され、参道の松は古い木は樹齢四〇〇年を超え

ると思われます。松の古木もたくさんありましたが、マツクイムシの被害を受け、多くの木が伐られてしまいました。家に囲まれた中にある森で、しかも大木が林立している景観は、独特な雰囲気醸し出しています。そのすばらしい景観から、村の天然記念物に指定されました。

## (二) 神明宮

八幡宮の南に隣接してあります。（境内社）

祭神 天照皇大神

由緒等不明です。

## (三) 三峯神社

八幡宮本殿の南、境内の森に隣接してあります。

祭神 伊弉諾の神・伊弉冉の神

由緒

明治一〇年（一八七七）前後頃、南殿に放火と思われるものも含め火災が頻発しました。そこで、地区の人々は話し合つて明治二〇年頃、火災盗難防除に靈験あらたかな三峯の神様を迎え祀ることになりました。そし



三峯社殿

て建てられたのが三峯社です。

神主として、神道実行教伊那協会から下伊那の林岩志郎を招いて、教会を開き祭司としました。この岩志郎は、占いも行つたため、農作の豊凶・失せ物・病気などの占いを求める人々が、近隣からたくさん訪れたと伝わります。

祭日は四月一八日で、かつては隣接している北側の公園の桜の花見を兼ねて多くの人々が集まったそうです。現在は、四月の中旬の日曜日を例祭日として祭事が行われています。その時は、区内の各戸に御札が配られます。

### 1 合祀社

山の神社（祭神―大山住神）他三三柱の神様が合祀されています。

山の神社は農協の低温倉庫の西に祠がありましたが、昭和四九年（一九七四）に合祀されました。

### 2 境内社

#### (1) 御嶽大神（石碑）

祭神 国常立尊、大己年貴命、少彦名命

#### 由緒

大正八年（一九一九）九月五日、南殿区の有志者が大泉白木屋の御嶽行者を先達として木曾の御嶽山に登拝しました。その後、毎年替わり番にて四、五人ずつ登拝を続けていました。やがて、以前大峰講が閉講になった時、講員が分け合っ

て保管していた祭具

を持ち寄って、講を結ぶことになり、南殿御嶽講ができました。先達は山崎寿恵吉・鹿角辰次郎・有賀善重でした。太平

洋戦争中は、行者堂を借りて行や祭事をしていました。昭和二五年（一九五〇）四月、この碑を建立しました。そして、八月一六日に例祭を行い、平成の初め頃まで続いていました。（現在は講は解散し、祭具は郷土館にあります。）

#### (2) 塩釜神社・青苧神社（石碑）

#### 祭神

塩釜神社 塩土老翁神 塩の神、安産の神

青苧神社 三光神（天照大御神・月読神・天之御中主神）、

麻の生育の神、中風

防止の神

#### 由緒

両社とも詳らかではありません。



三峯社境内にある御嶽大神碑



三峯社境内にある塩竈・青苧社碑

### 三 堂庵

#### (一) 行者堂(龍麟閣)跡

行者坂中ほどの北側に跡が残っています。

#### 本尊 役行者

堂内に木像が祀られています。台座に「信州飯田城紬大仏師井手橘姓通正六十八歳ニテ作之右兵衛、信州伊那郡南殿講中干時 明和四丁亥九月吉日」と記されています。明和四年は一七六七年です。



行者堂にあった役行者像

#### 由緒

宝暦年間(一七五一〜一七六三)、南殿村の有賀兵右衛門の分家で、隠居していた新左衛門が重い病気にかかり、医療に手を尽くしましたが効果がありませんでした。そこで、諸国の神社仏閣の加護を願い、兵右衛門・重左衛門の二人で巡

拜の旅に出ました。大峰山へ参拝した時、山中の賑わいも盛んで、参拝の待遇も大変良かったので感激し、御利益があるに違いないと考えて大峰講を結ぶことを思い立って帰宅しました。そして、講をつくり、大峰山への参拝を続けました。

講を結んでから約一〇年後の明和四年、村の鬼門(北東)といわれる場所に堂を建て、役行者を勧請し祀ることにしました。信者も増えて行き、他村からも参加するようになって行きました。昭和に入り(一九二六)講に参加する人が減って行き、やがて閉講されました。

行者堂の参道には、石の鳥居が建てられ、「心霊本覚 兩部習合 龍麟閣御宝前」と刻まれていました。堂には「龍麟閣」と書かれた偏額が掲げられていました。現在は堂は倒壊し、鳥居も倒れて朽ちてしまいました。

講が盛んだった頃は、境内に滝が造られ水垢離の行が行われていたそうです。また、代参の者が帰ると、盛大な祭りが行われたと伝わります。

役行者像と祭具、堂の偏額は郷土館にあります。

#### (二) 地藏庵(円明庵とも言われた)跡

殿村八幡宮の南の庚申塚の辻を東へ一〇〇ほど行った所の南側にありました。現在は石仏しか残っていません。

#### 石仏群

地藏尊、大乘妙典千部供養塔、念仏百万遍供養塔、庵主石塔(三基)、他八基の石仏

## 由緒

庵の創建年代は不明ですが、元禄年間（一六八八～一七〇三）に、個人の庵であったものを金左衛門が南殿村へ差し出したと伝わります。

天明五年（一七八五）

三月一六日に念仏百万遍が行われ、天保一四年（一八四三）には嶺頭院方丈が来て、三〇人余の

尼僧が集まって大乘経一千部の読経が行われた記録が残っており、江戸時代にはこの庵を使つての行事が盛んに行われていたことが伺えます。

庵は、文化八年（一八一二）に改築され、明治三年（一八七〇）庵主・恵照尼の記録が残っています。

明治六年、一切が競売に付されて廃庵となりました。

## 三十三所観音石仏

南殿の農業協同組合倉庫の北側にあります。もとは、地藏庵の所にあつたものを移したと伝わります。

石仏は、西国三十三所観音霊場の本尊を模して造られたも



地藏庵跡の石仏

のと思われれます。彫りがはつきりしており、三十三体そろつた石仏群で、村の指定文化財です。石工、制作年代などは不明です。

由緒は、南殿村の屋号大國やが地藏庵に寄進したものと伝わります。明治六年に地藏庵が廃庵になった時、最初の持ち主に返されたので、大國やでは自分の墓地脇に安置したと伝わります。

## (三) 十王堂跡

地藏庵跡より五〇ほど東に、大きなカヤの木が生えています。その東側の所に、十王堂が明治末期までありました。由緒など不明ですが、当時を知る人は、木像の恐ろしい形相をした十王が並んでいたと言っています。

明治末期頃、十王堂近くの家に不幸が続く、その家の方から取り壊しを懇願され、焼却されたそうです。十王はどうなったかは不明です。



西国三十三所観音石仏

## 四 南殿学校跡

地藏庵の北側、字宮ノ下にあつたそうですが、今は何も残っていません。

明治六年（一八七三）、第一一〇番小学区第一〇一番学校として発足したときは、「大成学校」といいました。当時の児童数は三〇人ほどでした。明治九年には南殿学校と改称されました。明治十一年、南箕輪学校が字桜ヶ丘に設立されることになり、南殿・北殿・大泉・久保の四校は統合されてそこに学ぶことになりました。

## 五 遺跡・古跡

### (一) 宮ノ上遺跡

八幡宮西一帯の遺跡ですが、昔から畑耕作の折、石器や土器が出土し、遺跡地であることはわかっていましたが、計画的な調査をしたことがありません。したがって、遺跡の



宮ノ上遺跡標柱

規模・内容の詳細はわかっていません。大正一五年（一九二六）に出版された『先史及原史時代の上伊那』には、大遺跡地として載っています。

集められた出土品は、畑の耕作・開田作業の際出土したもので、縄文期の石器・土器が一番多く、土師器・須恵器も見られます。

### 蔵骨器 村指定文化財（由来）の写真参照）

平成元年、農協低温倉庫の西南の畑の中から、平安時代中期（一〇〇〇年ほど前）の壺が農作業中に発掘されました。きちんとした石組みの中に納められた壺で、中に中年女性の焼骨一人分が入っていました。傷のない完形品で、「灰釉陶器短頸壺」と呼ばれる壺で、九世紀後半頃、東濃（岐阜県東部）で造られた見事なものです。郷土館に展示されています。

### (二) 有賀の城

国道一五三号線の役場入口から東へ一五〇メートルほど行ったあたりの天竜川河岸段丘突端にあります。天竜川段丘崖上、大泉川左岸段丘東端に位置し、久保の柵木城跡・北殿の倉田の城跡と同じような地形をしています。

北側にある道路が空堀跡と思われる、南側には石墨跡と思われる自然石の石垣が残されています。西に大手があつたと推測されますが、ここに入る道路がかぎの手のようになっているのも往時の名残かもしれません。『長野県町村誌』（資料の

項参照)によると、「東西二十間、南北三十五間余、今に城濠(ほり)巖垣(いわがき)を遺す…」とあり、明治の頃には城の遺構が残っていたようです。

有賀氏がいつからこの地に居住していたかは詳(つ)らかではありませんが、地方武士として、始め小笠原氏に属していましたが、武田氏との戦いの後、民間に降(くだ)って今日に至っていると伝わっています。

### 大宗館文庫 村指定文化財

有賀の城の末裔(まつえい)有賀氏は、城跡に住み続けていますが、江戸時代から明治にかけての古文書類をたくさん保持しています。内容は、村方書類・和漢の古書・著名人の書画・錦絵などで、四五〇〇点を越えます。平成に入って、これらが村へ寄贈されましたので、貴重なものとして郷土館で保管・展示しています。



有賀家にあった当時の大宗館文庫

### (三) 長慶塚跡

役場の南の道を西に上っていくと、左側に墓地が見えてくる手前に、塚のことを記した標柱が立っています。かつてこの塚は中央霊園の北にありました。大きな塚があり、周囲に樹木が生い茂っていたそうです。里人が午睡(ごすい)しようとしても落ちつけなくて誰も寝ることができなかったと言ひ伝えられています。

箕輪城主藤沢頼親(よrichか)が築いた塚であると伝わっています。天文一四年(一五四五)、頼親が武田信玄と戦った後、小笠原氏と共に三好長慶(ながよし)を頼って京都へいきました。(当時長慶は権力者として京都で勢力を張っていました。)そして、長慶から厚遇(こうぐ)を受けました。後、三好氏が滅びた時、頼親はかつての長慶から受けた恩を思い出し、ここに塚を築き、長慶の霊を供養したと伝えられています。この辺一帯の地字(あざ)を長慶塚と呼んでいます。



長慶塚標柱

### (四) 不死清水

美坂(み)の下、かつての伊那街道沿いに豊富な清水が湧き出しています。この清水は、昔から地区の人々の生活用水・農業

用水として使われて来ました。また、名水として大事にされて来ました。次のような話が残されています。

一つは、旅の長者を生き返えらせた名水として、伝説となつています。『みなみみのわの むかしばなし』参照のこと)

もう一つは、明治一一年(一八七八)からこの水で

鮭の養殖が試みられたことです。新時代の産業として、鮭の天竜川放流・遡上を夢見た村人たちが、養殖池を作るための水を調べた時、この水が最適と評価され、事業が始められました。しかし、成功はしませんでした。

今でもこの水でお茶を入れると格別うまいと水を汲みにくる人がいます。

#### (五) 松根油採取松

役場東の道路沿いに一本だけ残っています。

太平洋戦争の名残です。昭和一九年(一九四四)、戦争末期になり、日本では飛行機や船を動かす燃料が足りなくなってきました。その対策として松根油を採取して動力油をつく



道路敷設前の湧水出口(不死清水)

ることを考えたのです。全国へ指令が出て、南箕輪村でも松根油の採取をしました。松の皮を剥ぎ、幹に傷をつけて、そこから出てくる樹脂を集めるのです。何本かありましたが、一本だけ残っています。

#### (六) 猪ノ子柴

中央霊園の上から大泉川の右岸を見ると、松の木が二、三本見えます。この辺から西の春日街道へかけての一带を猪ノ子柴と呼んでいました。

昔、ここに猪が群棲していて、子育てなどをし、民害もしばしばあったと伝わっています。



現在の猪ノ子柴一帯



松根油採取の松

## (七) 同盟田跡(場所は地図参照)

水田が少なかった大正時代(一九二二〜一九二六)に、自作水田が少ない南殿区民が参加して同盟田組織を立ち上げました。この組織は同盟会とも呼ばれ、天竜川の河川敷に約三〇アールの水田(同盟田)を開墾して会員が全員で耕作し、収穫した米を役場入口信号機付近の倉庫に籾もみで貯蔵していました。

会員が新米の収穫前に飯米が不足すると同盟会の倉庫から米を借り、新米が収穫できた時に返す仕組みになっていました。なお余った米は売却して会の運営費にあてました。

会員の水田が増え、米を借りる必要が無くなると同盟会は自然消滅し、その後、同盟田は南殿財産区の管理地となり、現在は村が残土置場に使用しています。

## 六 碑

### (一) 迪齋先生筆塚

農業協同組合倉庫の北、国道東の小高い丘(桜丘)に建てられています。

碑面 題額の「迪齋先生筆塚之碑」は高津柏樹の書です。迪齋の人となり、子弟教育の功績を述べた碑文は木曾福島代

官、山村氏  
学問所の学  
頭、武居用  
拙(一八一  
六〜一八九  
二)の文で、  
小島雲溪の  
書です。



迪齋先生筆塚

書で書かれています。内容の概略は次のようです。

迪齋は号で本名は光敏みつとしといい、享和二年(一八〇二)南殿村の有賀家(中東)に生まれ、諏訪の武井見龍に学問を学び、漢学・国学に通じ詩作もしました。また書道も得意であったので弟子は数百人に及びました。家業(農業)にも熱心で、幕府に献金をするほど財産を増やし、明治元年(一八六八)死亡しました。

### 碑陰

没後に門弟が相談して明治二十七年(一八九四)に遺愛の筆を埋めて、この碑を建てたことが記されています。また迪齋遺吟いぎんとして漢詩一つ、和歌二つが記されています。

### (二) 南殿の里六人一首の寿碑

行者堂跡地にあり、安政六年(一八五九)に建てられ、碑面には南殿の清水徳光の書にて六人の和歌が書かれています。

迪齋母大槻みし子 時年八十二才  
ながらへて齡のか須も嬉しきに君が恵みをかさねつるか那

織部清水政守 時年六十四才

いつしかもいはたのをの月影にぬれて吹良ん秋のはつ風

小文治有賀其與 時年五十九才

千早振松のを山能神垣にかはらぬ春の花も咲きけ流

迪齋有賀光敏 時年五十九才

竜川を月もわたりて筏船こきゆくかミに千鳥なくなり

治郎兵衛有賀守義 時年五十八才

多なひける霞のな可をこえゆかむ名こそその関の花の盛りに

重左工門清水光康 時年五十一才

世の中のうつるならひもさく花は昔の春の匂ひこそすれ



六人一首碑

### (三) 霊松一本木遺祉碑

南箕輪小学校

プールより五〇

メートル、通学道路

の東にあります。

碑面には諏訪神

社宮司高階健一

の書になる「霊

松一本木遺址」

の文字が刻まれ

ています。碑陰

には清水政明の

書いた霊松に関

する記事が刻ま

れています。

それによると、

この松は高さ二

七メートル、周囲約四・五メートルの大木で、その偉容は遠くからも見ることができました。長野県の天然記念物に指定された古木で

したが、昭和九年（一九三四）九月二二日の台風で倒木しま

した。この松の存在を後世に残す為に昭和一一年九月二二

日に石碑が建立されました。

に石碑が建立されました。



霊松一本木の碑



かつての霊松一本木

天然記念物だった松は、古来霊松として近隣の人々や旅人からも嘆賞されていました。また伝説では、切ると赤い血を流すとか、かつては夫婦松であったとも言われています。二代目の松が立っていました。平成三十年伐採されました。

#### (四) 慰霊碑

村公民館の南庭に建てられています。碑面には「慰霊碑」

「諏訪大神宮司  
三輪磐根謹書」

の文字が彫られています。碑陰

には南箕輪村出身の日清戦争以降太平洋戦争迄の戦没者（五九

名）、義勇軍並びに開拓引揚げ物故者（四九名）、公務殉職者（二六名）名が刻まれています。

この石碑は昭和四四年（一九六九）四月に南箕輪村慰霊碑建立委員会が建立しました。

#### (五) 母子像

南箕輪小学校玄関前にあるブロンズ像で「いづみ」という作品名が付けられています。小学校では新校舎を建設して以来、情操教育のため環境整備に努めました。庭園、理科池等



慰霊碑

が次第に整備されましたが、更に芸術的気品の高い物を欲しいとの声が揚がり、

村の予算と、村民からの一般

寄付により瀬戸団治氏に制作を依頼してブロンズ像を制作し、昭和四〇年（一九六五）二月一三日に除幕式を行いました。制作の費用は五〇万円でした。

#### (六) 南箕輪小学校校歌碑

昭和四八年度（一九七三〜七四）卒業生から寄贈された物で、小学校玄関前にあります。

作詞者の青山榛三郎については、田畑の「青山榛三郎歌碑」の項を参照してください。

作曲者の井上武士は、明治二七年に群馬県に生まれ、東京音楽学校甲種



母子像



校歌碑

師範科を卒業し音楽教育者の育成に専念した人で、長野師範の教諭も務めたことがあります。音楽創作指導には特に力を注ぎました。

校歌は右の両氏に依頼して昭和二五年（一九五〇）九月二十五日に制定されました。

### (七) 南箕輪小学校開校記念碑他

南箕輪小学校の入口に建ててあります。

#### 1 南箕輪小学校の開校

明治八年（一八七五）に南箕輪村が出来た時には、村内に五つの学校がありました。経営の上から一村一校を勧告され、明治一一年に話がまとまり、南箕輪学校が七月一日に開校しました。しかし、校舎を建てる敷地に困っていたところ、南殿有賀光彦の土地（現在の小学校の建っている桜ヶ丘）を五〇坪を借りることが出来、明治一一年一〇月



開校記念碑

新築落成し、一二月一日「第六大区第一九中学区南箕輪学校」の標札をあげて実際に開校しました。

碑面 南箕輪小学校開校 明治十一年

碑陰 昭和五八年卒業生一同 題字飯澤孝良書

#### 2 奉安殿・忠魂碑・二宮尊徳像など

太平洋戦争中、小学校校庭に奉安殿・忠魂碑・二宮尊徳像などが建っていました。これらは太平洋戦争にかかわる遺物



「写真で見る南殿」よりコピー

昭和11年小学校校庭（右に奉安殿、左に忠魂碑）

であるといふことで、アメリカの進駐軍などの指導もあり、だんだんに撤去されていきました。奉安殿といふのは、御真影（天皇御夫妻の写真）・教育勅語（謄本）などを安置する建物で、南箕輪村では大正一四年（一九二五）に

建てられました。

忠魂碑は戦死者の霊を称える碑であり、二宮尊徳像は刻苦  
勉励して世のために尽くした尊徳翁を見習うための像です。

現在立っている二宮尊徳像は、昭和五九年（一九八四）の卒業生の卒業記念品です。

### (八) 庚申塚の碑

三峯神社の東道路沿いにあります。以前は字上道・庚申塚の桜の古木の南にありましたが、道路改良工事に伴い現在地にうつされました。

#### 1 庚申塔

- (1) 庚申供養 享保一七年  
(一七三三)
- (2) 庚申 元文五年  
(一七四〇)
- (3) 庚申 寛政一二年  
(一八〇〇)
- (4) 庚申 安政七年  
(一八六〇)
- (5) 庚申 大正九年  
(一九二〇)
- (6) 庚申 昭和五五年  
(一九八〇)



八幡宮南の庚申塚

#### 2 甲子塔

- (1) 甲子 元治元年（一八六四）
- (2) 甲子 大正一三年（一九二四）
- (3) 甲子 昭和五九年（一九八四）

#### 3 その他

- (1) 十一面観音像 享和四年（一八〇四）

甲子の年に建てられている事から甲子講と関係があると思われます。

- (2) 馬頭観世音文字碑

南面 南殿村田畑村山寺村羽広村御子柴村塩ノ井村

北殿村

北面 嘉永三庚戌年二月吉日桑嶋流馬医山崎政八建

世話人 山崎清七 清水彦兵工 石工 有賀伝蔵

有賀善次郎

閑童が書いた正面の「馬頭観世音」と南面、北面の達筆の文字が青石に鋭く彫られています。造立年は嘉永三年（一八五〇）です。

- (3) 蚕玉大明神碑 安政七年（一八六〇）
  - (4) 道祖神 天保五年（一八三四）
  - (5) 南無大勢至菩薩碑
  - (6) 金毘羅大神・秋葉大神碑
- 明治二五年（一八九二）一月一〇日勸請

(7) 廿三夜塔 安政二年（一八五五）

(8) その他

馬頭観音像二体、馬頭観音文字塔二六基、如意輪観音一体、地蔵尊二体

## 七 用水

南殿地区の人々は、湧水及び横井戸水と川からの井堰水で生活していました。

### (一) 川からの引水

#### 1 天竜川から（大河原井）

北殿橋（天竜橋）の下流二〇〇呎くらいの所から取水しています。天竜川の瀬に牛柁うしわくを入れて沈床ちんしょうを作って水を揚げ、くろ川の流れの上は木製の樋とじで流し、高い土手は暗渠あんきょにして流していました。この井筋は途中から三つに分かれ、約一五呎の水田用水として使われていました。

天竜川の氾濫で井堰が壊れた時は、くろ川の水を利用していただけです。

#### 2 大泉川から

大泉川から取水した井堰は、三つあります。国道西に二筋・国道東に一筋です。

昔から使われ、元禄年間（一六八八〜一七〇

三）には、この水を生活用水として、また水田用水として約一五呎の田に使用していました。

### (二) 湧水

南殿地区には、天竜川河岸段丘の突端へ出てくる湧水と、大泉川河岸段丘がけに出てくる湧水とがあります。天竜川河岸段

丘下は湿地ですので、古来段丘上に住む人々は、大泉川段丘崖がけに出てくる湧水を利用していました。それが中央水路とよばれる水路で、この水を集落内に回して利用していました。

中央水路の水源は、宮ノ上遺跡南の段丘下字清水あきから出ています。この湧水は水量豊富で、地区の人々の生活用水、水田用水として利用されてきました。

水路は、水源東二〇〇呎くらいで分流し、段丘上へ行くのとそのまま東へ行くのようになります。東へ行く水路は南田水路と呼ばれ、途中で「不死清水しんずらしみず」（湧水）の水と合流し、JR飯田線の東でくろ川に流れ込みます。



大泉川よりの取水口

分流のもう一つの水路は、庚申塚の東で東に折れ、十王堂跡の西で二筋に分かれます。一つは北に向かい八十二銀行南箕輪支店の東辺りでまた東に向かいます。もう一つはそのまま東へ向かいます。そして二水路とも国道一五三号線をくぐって、やがて下段のくろ川へ流れ込みます。

中央水路の水源の水は、昭和三二年（一九五六）南殿簡易水道が出来る時、その水源として段丘上にポンプアップし、使われました。

天竜川段丘下へ落ちる豊かな湧水は、養魚（ニジマス）水として、またワサビの養水としても盛んに使われましたが、現在は減少してきています。

### (三) 横井戸

#### 1 八幡入横井戸

役場駐車場への入り口西に水路が見えるのが、横井戸の出口です。役場駐車場の東へ流れ、豊かな水を北東へ運んでいきます。

横井掘削工事は明治二六年（一八九三）に着工し、二七年に開田工事を始め、三〇年には一部水稻の作付をし、三二年約四畝の開田が完了し、三三年に工事すべてが終了しました。横井工事請負費（水代金という）は一〇アル当り四八円でした。なお当時の作業者の賃金は一日につき二五銭前後でした。

昭和三四年（一九五九）より横井は開田地主の経営となり、三五年には水量増加の為、北の方向に支線一四〇畝を掘削し、これにより本支線合わせて約六〇〇畝となりました。その後、地主の交代もあり開田者一四名、開田面積は約五畝となりました。

#### 横井記念碑

役場駐車場東の道路脇に建っています。これが八幡入り横井戸の記念碑です。

#### 碑面 題額―御井神

（碑文は漢文なので要点を略述する）

農業の本は水である。南殿は崖の上で水が無い。明治二六年（一八九三）に横井戸を掘って灌漑用水を得ようとした。しかし、ここは御料林（皇室の山林）なので許可を得るのに苦労した。三〇〇間余掘ってようやく湧水を得ることができた。



八幡入横井戸碑

開田は五町歩余り、関係者は一〇数軒。喜ばしいことである。

大正四年（一九一五）五月

**碑陰** 起業者 一一名

開田者 一四名

## 2 上河原横井戸

長慶塚から西へ五〇竝くらい行った大泉川段丘下に水の出  
口があります。かつては水量も結構あったようですが、現在  
は少量の水しか流れていません。

**記念碑**

**碑面**

**題額** 御井神

**碑文** 祖父山崎清直は、宮の上畑を開田して食料米の確保  
をすべく、水を求めて大正四・五年にこの地に横井戸を掘つ



上河原の横井戸碑と水口

た。祖先の想いを偲しのびここに碑を建立する。今は西天竜の水  
を使った、立派な水田が出来ている。

**碑陰** 平成一二年七月吉日

山崎清房

山崎 豊建立

## 八 公共施設等

### (一) 南箕輪村役場

明治八年（一八七

五）に村が誕生した時、  
最初の事務は北殿に事  
務所が設けられました。  
その後、民家を借りて、  
役場庁舎としてそのま  
ま使っていました。

明治三五年（一九〇

二）、前年小学校校舎  
落成を受け、分教場を  
改造して役場庁舎を建  
造しました。しかし、



最初の南箕輪村役場庁舎

業務が増えるに従い狭く不便になっていきました。

昭和八年（一九三三）、現在のJA上伊那南箕輪支所の所へ新しい庁舎を建てました。木造二階建ての庁舎でした。

昭和五六年（一九八一）現在の庁舎が出来ました。

## (二) 南箕輪農業協同組合

南箕輪村に産業組合が出来たのは、明治三八年（一九〇五）大泉の「有限責任大泉購買組合」が最初でした。その後大正一〇年（一九二二）に「有限責任南箕輪村信用販売購買組合」が設立されました。しかし、販売事業は振るわず、大正一四年には、販売事業はやめることになりました。

大正末から昭和初めにかけての農村恐慌きょうこうは激しく、国や村でも産業組合の再建に力を入れ始め、昭和七年に「保証責任南箕輪村信用販売購買利用組合」となり農村再建の目処めどが



昭和8年に建てた旧役場

たつてきました。

太平洋戦争が始まると、食料増産が農村の最大使命となり、南箕輪村も農会・産業組合・養蚕組合が統合して、昭和一九年「南箕輪農業会」が誕生しました。

昭和二〇年（一九四五）太平洋戦争が終わると、昭和二二年農業協同組合法が公布され、官制ではない自主独立の農民の組合を造るべく、農業会を解散し、二三年には「南箕輪農業協同組合」が設立されました。農民の経済的・社会的地位の向上を図るのを目的としました。



現在の前の南箕輪農業協同組合の建物

昭和四七年（一九七二）八農協が合併し伊那農業協同組合南箕輪支所となり、平成八年に五農協が合併して上伊那農業協同組合（J A上伊那）南箕輪支所が発足し現在に至っています。

### （三）村診療所

南殿信号機東一〇〇  
厩位の道路北の建物が以前は村診療所でした。

昭和十一年（一九三六）「村診療所」が開所し、同二三年九月二五日には「南箕輪村立国保診療所」となりました。

昭和二十七年四月一日、嘱託しよたく医師が辞任し、後任者が無く診療所を休止しました。その後、

診療所の施設は大泉の原千秋医師が借りて診療を続けていましたが、昭和四六年に同医師が診療を休止し昭和五六年（一九八一）診療所は廃止されました。



旧診療所（現在は個人の家）

### （四）駐在所

南箕輪に駐在所が設けられたのは明治三八年（一九〇五）のことでした。

昭和十二年（一九三七）に南殿信号機東二〇厩位の道路北に駐在所の建物が落成し、一人の駐在所員により駐在所業務が行われていました。昭和二十三年より「南箕輪村巡査駐在所」と呼ばれるようになり、同二九年に「南箕輪村警察官駐在所」と改称されました。

昭和五五年、人口と交通量の増加に対応できるように駐在員三名の勤務となり、昭和五七年（一九八二）現在の場所に新築移転しました。



現在の駐在所

# 第六 田 畑



# 一 田畑の由来

区内のあちこちから縄文土器片や黒曜石の鏃などが採集されているところから、古くから人々の生活があった所だと推定されます。田畑神社の付近に御射山社の遙拝所があり、その近くに田畑神社が建てられたと言い伝えられており、中世（鎌倉時代〜戦国時代）には集落が形成されていました。

地区名の「田畑」は、『長野県町村誌』には「田畑古へ田島、中古田畑村とす」、「建御名方富命及び群臣へ餉を献ぜし地なり」とあり、昔から田畑が広がり、農耕が盛んな土地であったことが想像されます。

天竜川河岸第一段丘上を中心に集落が造られましたが、北に大泉川が流れ、その川を越えるのに二か所が選ばれ（南田橋と旧道橋）、集落の中を二本の街道が通りました。そして、田畑信号機の西二〇〇メートルの所で合流して神子柴方面へ進みました。西側の街道周辺から南方面を南割、東側街道周辺を北割と呼び、かつては（江戸時代以後）神社を別々に祀り、区別する風潮もありましたが、現在は神社も一つになり、北割・南割と言っても分からない人が多くなりました。

集落の南は神子柴ですが、かつては小中井沢川西南は神子柴地区でした。半沢の湧水を両地区で利用していました。そ

の分かれ目が小中井沢川だったので。

かつての集落は、天竜川第一河岸段丘上にまとまっていますが、科学技術の進歩によって堅固な堤防ができ、安全な排水工事がなされ、かつて川の氾濫原・湿地だった所に生活できるようになり、また、原野だった水の無い扇状地上も水が行き渡り、集落が大きくなりました。そして、昭和後半から戸数・人口も急激に増えました。明治八年（一八七五）南箕輪村に合併した時、七三戸・四〇三人だった田畑地区は、平成三〇年には八二六世帯・二二一四人となりました。

地区の景観も大きく変わり、田畑が散在していて家の裏へ行けば畑があったのが、今は家が立ち並んでいます。また、湿地だった下段天竜川沿い地区は、企業・公共施設・住宅で埋まっています。そして西天地区へも住宅が広がっています。

## 二 社寺等

### (一) 田畑神社

西方第二段丘下、半沢湧水の南、字前宮原七〇二三番地にあります。

## 祭神

建御名方命（南割地区の神社・諏訪大明神社の祭神）

天照皇大神（北割地区の神社・神明宮の祭神）

## 由緒

昭和二三年（一九四八）三月、両社氏子の総意に基づいて字神明にあつた神明宮を前宮原の諏訪大明神社に合祀して、社名を田畑神社と改称しました。昭和二八年二月に宗教法人田畑神社となり、田畑地区全体の氏神社として現在に至っています。

田畑神社は、本殿（一間社流れ造り）と拝殿が覆屋の中に



田畑神社 鳥居・手水場・制札



田畑神社 舞台

入っている造りで、他に宝蔵・舞台・社務所・水屋があります。舞台は村内に唯一残っているものです。鳥居は両部鳥居で、平成八年に建て替えられました。鳥居の右前にある看板は、明治の初めに建てられた「禁制札」で、日本語と英語で書いてあります。これも村内ただ一つ残っているものです。境内

に三対の献灯（石灯籠）がありますが、最も古いものは宝暦一二年（一七六二）のものです。

### 1 諏訪大明神社

『長野県町村誌』によると、前宮大明神といい、大山田神社の穂屋の神事（御射山神事）の遥拝所でした。社領（五反歩）より神饌（供物）を供していましたが、天正年間（一五七三～一五九一）の兵乱により神領を没せられ、それ以後は廃絶したと書かれています。大山田神社は延喜式（平安時代の書）に載っている古大社ですが、どこにあつたかについては諸説あつてはつきりしません。

明治五年（一八七二）に村社となり、明治四五年



神明宮跡に建つ碑

に神饌幣帛共進指定社となりました。昭和二三年（一九四八）まで南割地区の氏神社として尊崇をうけてきました。

## 2 神明宮跡

字神明の地の社地が児童公園と変わり、そこに「皇大神社址」の碑が建っています。神社は西側にあり、東から参道が延び、社殿は杉などの大木に囲まれていました。

神明宮は、元禄四年（一六九一）に北割地区一七戸の鎮守社として勧請されました。享保二二年（一七三六）に再建され、明治五年（一八七二）に村社となりました。北割地区の氏神社として祭事など行われてきましたが、昭和二三年（一九四八）南割地区の鎮守社「諏訪大明神社」と合祀することになり、社殿を無くし諏訪大明神社社殿に移りました。そして、田畑神社と改称され現在に至っています。

## 3 境内社

本殿の南北に祀られています。

- (1) 弁財天社 昭和二三年、弁天ヶ崎より遷座
- (2) 琴平社 昭和二三年、田畑公民館周辺の金刀原（琴原）より遷座
- (3) 巖島社 昭和二三年、字嶮ヶ上より遷座
- (4) 御嶽社 ほとんどどこに祀られていたか不詳
- (5) 塩釜社 //
- (6) 居森殿 //

(7) 秋葉社 //

(8) 御鋤社 昭和二三年、金刀原より遷座

(9) 蚕霊社石碑 二基 明治一一年建立、明治一四年建立

(10) 山の神 以前は二か所に祀られていました。北割地区の人々が山に入る入り口のけいじの庚申塚西一〇〇坪ほど行つた所に一社あり、南割地区の人々が山に入る入り口の田畑神社南に一社ありました。昭和の後半、一社にして現在地に遷座しました。平成になって社殿を新しくしました。

(11) 天満宮 北割地区

と南割地区に一社ずつあったのを昭和二三年合祀しました。社殿は「神明宮」



北割にあった社殿を  
移転した天満宮

の社殿を移したものと伝わります。

## 4 諏訪上社「御頭祭」と田畑・神子柴地区

諏訪神社上社の祭りに「御頭祭」と言つて一年の豊作・豊猟を祈願する祭りがあります。その祭りを仕切る頭屋が、一〇年に一度旧中州村（諏訪市）福島区に回つてきます。その時の祭りに昔から田畑・神子柴・御園・山寺の四地区が招待されます。江戸時代から現在まで続いています。

そのいわれは、次のように推察されます。

①昔、この四地区は諏訪の勢力下にあつて諏訪大明神を信仰していた。それで、神社への奉仕や神饌物の農作物・狩猟物を奉納していた。

②いつの頃からか、四地区が福島村の枝郷（付属の地区）となつて、福島村の手伝いをするようになった。それで、福島村に頭屋が回つてくると、祭りの奉仕がてら農産物や狩猟での捕獲物を持つて四地区の人々が参加した。

時代は変わりましたが、福島地区の人々が故事を大切に守り、今でもそれが続いています。丁寧な招待を受けると、四地区の代表者がお祝い金を持つて出掛けます。迎えられて、まず福島の氏神社（ミシヤクジ社）へ参拝し、それから諏訪上社の「御頭祭」神事に参加します。



昭和9年（1934）御頭祭参加の四地区代表と福島の神社総代の人々—背景は福島の御尺地社

## （二）堂跡

### 1 地藏堂跡とお子安様

天和四年（一六八四）の古絵図に、現在の屋号・喜多側家の東南隅にお堂が描かれています。そこには昔地藏堂があつたと伝わっています。また、けいじの庚申塚に子安観音立像の石仏が建っていますが、もとは地藏堂にあつたと伝わっています。この地藏堂とお子安様については、次のような話が伝えられています。

安政年間（一八五四～一八六〇）にこの地藏堂に老僧尼夫婦が住んでいました。子供も身寄りもなかつたので、死後は無縁仏になることを思い脇に石仏を建立しました。そして終生、お産をする人々・道行く人々の無事安全を祈りながら暮らしました。子安観音石像には、二人の法号「釈大石開道」・「釈大鏡利貞」が刻まれています。また、次のような話も伝わっています。

この地に「おしょうぶ」さんと言う人がいました。子どもを授かつたのですが、大変な難産で何日も苦しみ続けました。そのある日、夢枕にこの子安観音石仏が現れ、「お産の手伝いをしたいが、我はうつ伏せに倒れているので行かれない。我を起こして献灯し祈願すれば、必ず安産できる」と言いました。さつそくお告げの通りにしたら、間もなく元気な女の子が生まれました。「おしょうぶ」さんは、観音様に感謝を

し、自分も安産の手伝いをしようと考え、その後大勢の人の出産に尽くしました。

田畑婦人会（婦人会解散後は仏教婦人会）では、地区の人々の安産を願い、一二月の二十三夜様にじゅうさんやさまの日に、お産を待っている女性を集め、子安観音石像への参拝と僧の法話を聞く行事を行ってきました。（平成三〇年で終了）



最初地蔵堂にあった子安観世音像

地蔵堂の建物は、明治になって取り壊され、材は田畑学校の建築に使われました。また、地蔵堂周辺にはいくつかの石仏・石碑がありました。けいじの庚申塚と西天地区入り口あせうちばら字内原の区有地の隅に移されました。

地蔵堂に最後に住んでいた尼僧は、明治元年（一八六

八）に亡くなり、田島屋たじまや（木ノ島家）の墓地に葬られ、「仏参慈生尼油弥」の法号の墓碑が建てられて供養されています。

## 2 薬師堂跡

北割地区の東屋あずまや（松澤家）の南、下段へ下りる道端にあります（私有地）。記録がなくて詳細はよく分かりませんが、お堂に眼病を治すことが上手な僧が住んでいて、近郷から大勢の人々が治療に通っていたという話が残されています。

建物は明治の初めに壊されて、田畑学校の建築材に利用されたと伝わります。跡地には、いくつかの墓石と石仏が残されています。

## 三 田畑学校跡

現在の田畑公民館の所、字金刀原あざ（琴原ことばら）にありました。

明治五年（一八七二）の学制発布はつぷを受けて、明治六年筑摩県第十八中学区第百十二小学区の第百五番学校として設立さ



薬師堂跡に建つ正観世音像

れました。

開校当時は養蒙学校ようもうがくといい、官立ではありませんでしたが、義務制ではなく、授業料を納めなければなりませんでした。修業年限や教育内容の詳細はよく分かりません。

養蒙学校時代の教師は士族出身の山崎就正という人で、対象就学者六二人、就学者三五人、不就学者二七人でした。

学校の変遷は次のようです。

明治 六年 開校 養蒙学校

// 八年 田畑学校と改称

// 十一年 一村一学校制

施行 独立校維持いじ

// 二十二年 美和学校と改称

神子柴地区の生徒受入れ

// 二十九年 田畑支校となる

(二村一校の趣旨により)

// 三十二年 田畑分教場とな

る(四年生まで就学)

// 三十二年 南箕輪尋常高等

小学校に併合へいごうする

学校の設立は人材育成には

大きく貢献こうけんしましたが、その運営には大変苦勞しました。



田畑公民館南にある田畑学校跡の標柱

地元運営ですので、資金が多く必要でした。施設建設、指導者招聘しょうくわい、運営費用等々、大変なことでした。また、義務化されるまでは、不就学者も少なくなり、その教化も一苦勞でした。

二〇年に及ぶ田畑学校は、地域の人材を育てるのに大いに役立ちました。統合された後の田畑学校の建築材は、南箕輪村の役場建築の材に利用されたと伝わります。

## 四 古跡

### (一) 清水城跡

国道一五三号線から大泉川右岸を約四〇〇メートルほど行くと、その西南に湧水が出ている字清水しみずという所があります。(権現とも呼んでいます)その洞ほらと大泉川に挟はさまれた段丘の出っ張りがあります。その上に清水某しみずという地侍じまわらいが居城を構えていたと伝わります。

倉田氏・高木氏・日戸氏等と、箕輪の福与城主藤沢氏の旗き下かに入って武田氏と戦いました。天文二五年(一五四六)藤沢氏が武田氏に敗れたので、その後は農民となり南殿に移り住んだと伝わります。(『長野県町村誌』にあり)

城跡があっても不思議でない地形をしています。城跡ら

しいものは見つかっていません。

## (二) 日戸氏館跡

いつの頃から日戸氏が田畑に居住するようになったかは史資料不足でよく分かりませんが、半沢の井筋の一つが東南の集落を東に流れ下る国道近辺に日戸姓の家が数軒あり、その辺一帯が館のあった所と伝わっています。

『長野県町村誌』によれば、天文年間(一五三二～一五五四)以前にここに居住し、武田氏の伊那侵入に箕輪の藤沢氏と共に戦って敗れ、この地に農民として生活するようになったと書かれています。

古老の話では、館の一角に尼寺があつて、その名残である「阿弥陀仏」碑が今でも畑の中に残っていて、日戸姓の人々によって祀りが続けられているとのこと。また、「内城」という屋号の家があり、館と関連するのかもしれない。



日戸氏館と関係があるかもしれない阿弥陀仏碑

## (三) 富士塚(浅間塚)

西天竜幹線水路端にある南箕輪養護老人ホームの南約五〇メートルの所にある円錐形の塚が富士塚です。

土盛りをして富士山の形に造り、頂上に火口の形も造り、山頂を人が回り歩けるようになっていました。

富士山信仰は古くからありました。秀麗な山容、群を抜く高さ、大昔から人々はこの山に靈氣を感じてきました。そして、拜んできました。やがて更なる靈氣に触れるために富士登山が始められました。江戸時代(一六〇〇～)に入り、修験道と結び付き、講がつくられ、富士登山が盛んになっていきま

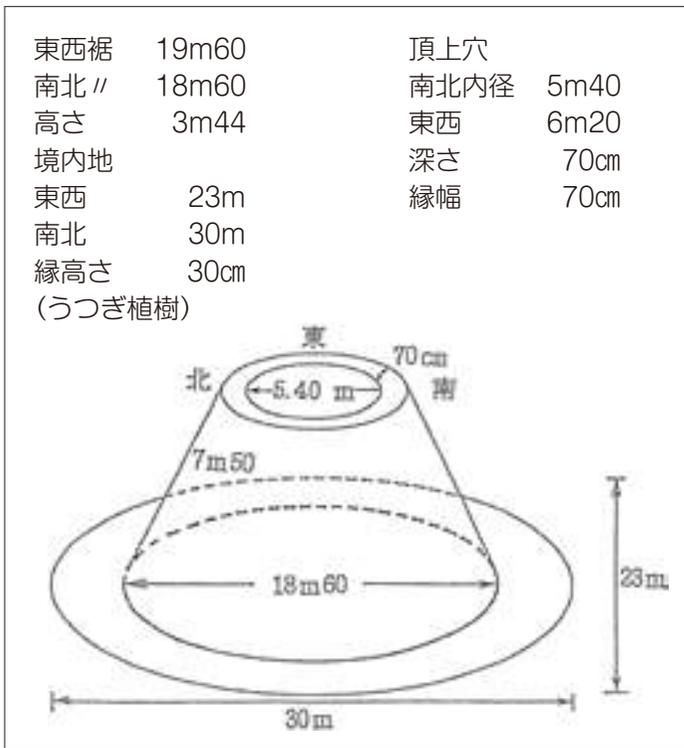
した。修験者・長谷川角行(一五四一～一六四



大芝老人ホーム南にある富士塚(所有は田畑の人です)

六)は、富士山の神は日月星の本体である仙元大菩薩(せんげん大菩薩)であり、富士山の靈氣に触れることは幸せにつながるのとだと教え広めました。この教えは、農民・商人・職人などの間に広まり、庚申信仰とも結び付いて地方へも浸透していききました。江戸では八百余の講中ができたと言われます。

昔、富士登山をすることは大変なことでした。誰でもが富士登山に出掛ける訳にはいきませんでした。そこで考えられたのが富士塚です。横造富士山を造り、そこに登って本物の



富士塚の見取り図

富士登山の代わりにしようと考えました。装束も、火口を回ることも、唱える言葉なども本物の富士登山と同じにし、富士登山の御利益に預かるうとしました。

この富士塚は、元文五年(一七四〇)に神子柴・田畑・大泉・大泉新田・大萱の五ヶ村の人々によって築かれたのが始まりと推測されます。

神子柴の高木正照(鶴翁—俳諧の宗匠)が、安政七年(一八六〇)に書き残した文によれば、寛政十二年(一八〇〇)に築き直し、安政七年(一八六〇)にまた築き直すと書かれています。

南箕輪村内には、「ふじづか」と呼ばれる地字が何カ所も残っていることから、少なくとも四カ所には富士塚があったと推測されます。

#### (四) 弁天ヶ崎

JR田畑駅の西の段丘崖の突端に一段低い出崎があります。この出崎を弁天ヶ崎と呼んでいます。

昭和二三年(一九四八)以前には、一段低い出崎の西端に小丘があつて弁天社が鎮座してました。この弁天社はいつから祀られていたかはつきりしませんが、天和四年(一六八四)の古絵図に載っています。

宝暦一二年(一七六二)の古文書(門屋文書)には、この弁天社の横の大木が村の境界の基準を示すもので、この大木が

らの方向と距離で境界の確認がなされたことが記されています。天竜川は、よく氾濫し、その都度神子柴村・上牧村・田畑村・野底村の村境が分からなくなってしまうので、この大木を基準点としたのです。古老の話では、かつて大木の根元に矢印を刻んだ大石があったそうです。

現在は、開発の手が入り、標柱（教育委員会）と標石（開発業者）が西の段丘上にあります。

『長野県町村誌』には、「・・・東に長沙を望み、遠く高遠城址あるいは六道の郊原をあわせ望み、絶崖尽くる所の沢岡・伊那部の村落あり。南ははるかに三遠の天遠く、目下に竜川激湍を帯び、春花秋月峯の白雪麓の紅葉なべて絶景の勝表なり・・・」と記されていて、景勝の地として紹介されています。



標柱と標石

## 五 碑

### (一) 芭蕉塚（尾花塚）



芭蕉塚の句碑

田畑公民館から旧伊那街道を東へ五〇メートルくらい進み、大きく曲がった所の東側に卵塔形の句碑があります。かつては丘塚があり、そこに句碑が建っていました。

この句碑は、文化四年（一八〇七）に加舎白雄門下の俳人・中村伯先の命により、その門人である里朝（鎌屋）・菊叟（井桁屋）・花六（豆腐屋）・三晝（糸屋）らによって芭蕉翁を偲んで建てられたものです。同時に建てられた四塚（鳥居

峠の雲雀塚の碑、木下の蟹清水塚の碑、山寺の秋風塚の碑、田畑の碑)の一つであると伝わっています。文化二年(一八〇四)編の伯先の句集「香組草」に四つの碑について書いてあります。

伯先は伊那に蕉風(芭蕉の俳風)を導入した人で、生涯を伊那市山寺の坎水園(かんすいえん)にいて活動しましたが、三二歳の時から三六歳の正月までの四年間田畑に生活していたので、多くの門人が田畑にいたと推測されます。発起人の四名は、当時田畑で活躍していた人達です。

碑文 兎も角も ならでや雪の 枯尾花 芭蕉翁  
 碑陰 文化六巳己歳 卯月 枯尾花 芭蕉翁

発起 里朝、菊叟、花六、三暁 社中

句は冬の句で、元禄四年(一六九一)十一月、芭蕉が江戸へ帰った時の感懐で、折しも訪れて来た旧友や門人への挨拶の意が出ています。雪の中に、秋を過ぎた枯尾花が、雨風に折れもせずまだ残っている。自分も長い旅を経て、多病の身がどうにかこうにかたどり着いたことよ、という意味だと思われまます。

また、『長野県町村誌』には「これを見れば、翁もまた我が本国酒屋の薄の古事を慕うの意明らかなり」と記しています。

## (二) 庚申塚

三カ所にあります。

### 1 けいじの庚申塚

大泉川の南田橋の南の段丘の上道路東にあります。

- (1) 奉請青面金剛庚申信心色主  
宝永五年(一七〇八)
- (2) 庚申  
元文五年(一七四〇)
- (3) 庚申供養塔  
享保一二年(一七二七)
- (4) 庚申  
寛政一二年(一八〇〇)
- (5) 庚申  
安政七年(一八六〇)
- (6) 庚申  
大正九年(一九二〇)
- (7) 子安観音立像
- (8) 馬頭観世音
- (9) 供 三宝塔
- (10) 南無阿弥陀仏念仏供養塔
- (11) 摂待供養

他に四基あるが詳細不明

年号不明

嘉永三年(一八五〇)  
寛延二年(一七四九)

□保一二年  
明和二年(一七六五)



けいじの庚申塚石碑群

2 旧道橋南庚申塚

(1) 庚申供養塔

元文二年（一七三七）

(2) 青面金剛像

安永五年（一七七六）

(3) 庚申

安政七年（一八六〇）

3 田畑公民館東庚申塚

(1) 庚申

宝曆九年（一七五九）

(2) 二十二夜供養

明和九年（一七七二）

(3) 二十三待供養

明和四年（一七六七）

(4) 御嶽座王大権現

嘉永四年（一八五二）

(5) 役行者像 年号不詳



田畑公民館東にある庚申塚の石仏群



旧道橋の所にある庚申塚の碑—この庚申塚はもとはもう少し南にあったそうです。

(三) 道祖神碑

1 田畑公民館東の庚申塚

碑面 道祖神

碑陰 嘉永三年一月 田畑村

2 田畑信号機の

西二〇路先の交差点

碑面 道祖神

碑陰 安政二年二月 田畑村中

(四) 水神碑

1 けいじの庚申塚西南段丘下字新田横井戸出口北

碑面 水神

碑陰 漣屋敬書 明治一三年 社中



横井戸北にある水神



横井戸出口



田畑信号機の西の辻にある道祖神碑

2 天竜川明神橋北三〇路先の土手西側

碑面 水神

碑陰 大正一五年四月二四日

### 3 半沢の田畑水道水源地

(横井戸の所にあつたものを移したものと伝わる)

碑面 水神

碑陰 昭和二六年四月二〇日竣工しゅうこう

田畑水道組合



天竜川土手にある水神碑



田畑半沢井の水源にある水神碑

### (五) 馬頭観音碑

1 西天への観音道の坂を上りきって四〇号先の左側

(1) 供養塔 四二基



西天の入口に建つ石碑群



田畑信号機の所に建つ  
村内最大の馬頭観世音碑 他

地区内に散在していたものを集めたものです。

(墓地などに残されたものもいくつかあります。)

(2) 地藏堂から移された墓碑・石仏 一七基

2 国道田畑信号機横

(1) 碑面 馬頭観世音(村内最大の碑)

碑陰 大正六年

田畑搬夫組合創立一〇周年記念

(役員・協力者・組合員名略)

(2) 同所に建てられている他の碑

摩利支尊天 文字碑

蚕玉神 文字碑

## (六) 青山榛三郎歌碑 二基

田畑北割地区の旧伊那街道沿いの真ん中辺西側、榛三郎生家の跡に建っています。

榛三郎（本名松澤修一郎）は、田畑の旧家に明治二六年（一八九三）に生まれました。教員生活（小学校・高等学校）をしながら作歌活動を続け、同人短歌誌「山河」を主催し、また歌集も何冊か出版しました。短歌は若山牧水、太田水穂に師事して勉強しました。南箕輪小学校の校歌の作詞者です。昭和四八年（一九七三）亡くなりました。

この碑は、榛三郎を偲ぶとともに、一族の中心であった旧家（門屋）が絶えることを悲しんだ一族の有志が、平成七年に榛三郎生家の跡地に建立しました。二基の石にはそれぞれ



青山榛三郎歌碑

次の短歌が刻まれています。

1 谷水の あらん限りは 峰の松も

青くあらんを 人は寂しき

（字は北原青雲）

2 出でて去なば 恋ひまさるべき 里ならん

在る日を惜しめ 桐咲きにけり

（字は榛三郎）

## 六 用水

田畑地区は、北に大泉川、東に天竜川が流れています。大泉川は流水が安定せず、また荒れ川で生活用水として利用するのは難しく、天竜川も荒れ川で生活用水としては利用できませんでした。しかし、沖積地の水田用水として昔から利用されてきました。

生活用水は湧水に頼ってきました。天竜川・大泉川の河岸第一段丘下へはたくさん湧水が出ていましたが、第二段丘下には初沢口（半沢）以外は水量が少なく、地区の人々の大部分は半沢の湧水を利用して生活していました。

### (一) 半沢井

初沢口から出る湧水は田畑と神子柴で古来より飲用水・生

活用水・水田用水として利用して来ました。田畑地区内に設けられた井筋を半沢井と呼んでいます。

天和四年（一六八四）の古地図を見ると、主要水路は現在とほぼ変わりませんが、人家が増えるに従って多少の変更があり、だんだん整備され現状のようになりました。延享三年（一七四六）の絵図によると、初沢口（半沢の水源地）の三方から水を集めています。利用量が増え、水源を拡大していったのです。

古老の話によると、「明治の末頃の水利権は、神子柴七分田畑三分だった。初沢口の所に水番小屋が設けられて、水確保に苦心した。水量はあまり多くなく、この水を使つての稲作はごくわずかだった。主に飲み水・家事用水として使っていた。水路は細く、下流のほうは自然の窪みを流れていた所もあった。昼間は洗い物などに使用されるので、飲み水は夜遅くに、次の日に使う分の



西天からの水とホタルの里の水源の湧水が合流する所—半沢井の始まりの所

水を瓶などに汲み貯めておいた」ということでした。

昭和四年（一九二九）、西天竜用水が行き渡り始めると、そのあまり水が合流して、半沢井の水量が多くなり、開田され水田も増えていきました。しかし、水質は落ち、飲み水に適さなくなっていました。

そこで、各家では井戸を掘り、飲み水・台所用水の確保を図りました。

昭和二六年（一九五二）、田畑簡易水道が完成して飲み水・台所用水としての半沢井の役目は終わりました。しかし、生活用水としては無くてはならない水なので、区民は毎年清掃しながら水路を守っています。

水路は、昭和の初め石垣積みに大改修し、その後コンクリートになりました。

かつて蛍が飛び、アメノウオを捕らえた半沢を取り戻そうと、平成五年、「半沢を愛する会」が発足し現在も活動が続けられています。

## (二) 伊賀島井他

いつ造られたか不明ですが、天竜川から水田用水として引かれた井です。昭和二六年からの土地改良事業により、水路などすっかり変わり分からなくなっていました。

しかし、江戸時代の古文書に名前が出てきますし、『長野県町村誌』にも「南殿耕地の東端において天竜川を堰ぎ、田

畑耕地の田に導き、また天竜川に注ぐ」と書かれています。この井の水で約二畝の水田を耕作していたと伝わります。

古文書に、他に「天竜井」、「黒川井」というのが出てきます。

### (三) 精進舎(屋)井

大泉川からの取水で、旧道橋西に取り入れ口があります。水田用水として設けられた井で、大泉川下流南側一帯の水田用水となっています。



精進舎井の大泉川からの取り入れ口

西天竜用水のあまり水、字権現のあまり水が豊かになり、現在はほとんど使用されていません。大泉川からの取水は南田橋の上からもあり、字権現地域で田用水として使っていました。が今は使われていません。

### (四) 伊那土地改良組合排水路(くろ川)

かつての下段地域は、湿地でどこどこに排水池が設けられている地帯でした。そして、排水の集められたのがJR

田畑駅の西を通って神子柴へ流れていました。

昭和二六年からの伊那土地改良組合の土地改良事業により、水路改良もなされて、一帯の水路は変わりましたが、流末の所は同じで、田畑駅の西を流れ大清水川へ注いでいます。その川を「くろ川」と呼んでいます。

### (五) 揚水機場

昭和四七年(一九七二)から五二年にかけて、西天竜幹線水路より上段地帯の畑地灌漑・水田補給用水として、下段のあまり水を集めて上段へ送る事業が行われました。田畑地区へ、水を集め、送るための施設ができました。

その施設を揚水機場と呼んでいます。大芝から大泉川南を道路に沿って下りて来て、天竜川へ行き着く手前の南側に在る施設です。送水の管は大芝へ行く道路の下に埋設されています。



揚水機場

## (六) 下水処理場

田畑公民館から東へ下り、鉄道を越え、道路を越えた所の施設が「公共下水道南箕輪中部処理場」です。平成四年着工、平成九年供用開始です。



公共下水道南箕輪中部処理場

# 七 街道

## (一) 伊那街道

### 1 三筋の道路

南殿から田畑を通って神子柴へ行く道路は時代によって変わってきました。

(1)天和四年(一六八四)の古絵図によると、田畑信号機の西から南田橋へ行く道を「大寛古道」と書いてあり、この道が江戸時代初期までの伊那街道であったと推測されます。

(2)天和四年の絵図では、旧道橋(大泉川)から北割地区を通り田畑信号機の所に出てくる道を「大寛道」と書いてあります。江戸時代初期、脇往還としての伊那街道が整備された時、この道が整備され中心道路となったと推測されます。江戸時代の伊那街道はこの道のことを言っています。

(3)明治一〇年代(一八七八)、国の道路行政が強く推進され始めると、一九年(一八八六)には伊那街道は二等県道三州街道となり、二〇年代には大規模な道路改良が始まりました。現在の国道のもとが出来ました。南殿に近い大泉川周辺は湿地で、その南が崖だったのを掘割って道路が造られました。今の国道一五三号線です。

(4)田畑から神子柴へ行く道は、信号機の西を南に折れて小中井沢川へ突き当たり、川の左岸に沿いながら神子柴へと入りました。小中井沢西一帯は、かつては湿地だったのです。

### 2 道標

#### (1)紛失した道標

田畑信号機の西二〇呎の三差路の角に、平成二五年まで折れた道標がありました。「右 ぜ」とだけ読めました。古老の話によると、元は一呎余の角柱で「右ぜんこうじ道」・「左やま道」と刻まれてあって、北四〇呎ほどの四つ辻にあったそうです。北殿のエドヒガン桜の所にある道標と酷似していたようですが、今はありません。

(2)石垣から出てきた道標

四〇年程前、(1)に書いた四つ辻周辺の道路工事をしていたら石垣の中から道標が出て来ました。「右 ぜんこうじ道」と刻まれており、人々は紛失した道標以前からあったものではないかと話し合ったそうです。

現在四つ辻に建っています。



石垣から出て来た  
「ぜんこうじ道」の道標

### 3 水準点

田畑信号機の所にあります。

水準点とは、その地点の標高を示す印です。建設省国土地理院が、水準原点を決め(東京都千代田区永田町の尾崎記念会館脇にあり、東京湾の平均海面から二四・四一四メートルの高さ)、そこから主要国道・県道に沿って約二メートルごとに設置しました。

南箕輪村の国道一五三号線には

二カ所にその印があります。一つは北殿の間屋の門前にあって五三四七号・六八二・一五メートルです。

(今は北殿屯所前に移っています)

もう一つは田畑にあって、五三四

六号・六七六・三六メートルです。

花崗岩の標石の上に、半球状の

印がついていて、その頂点が標高を示します。

### (二) 山道とかんの道

昔の人にとって山へ行く道は大切なもので、どの集落にも山へ入る道があり、大切にされてきました。田畑地区には北割地区の人々が使う山道、南割地区の人達が使う山道がありました。

北割地区の人々が通る山道は、大泉川の崖っぷちの上を西に向かい、けいじの庚申塚をさらに西へ進み、段丘に突き当たる所から山へ入っていきました。そこには「山の神社」が祀られており、お参りしてから山に入りました。南割地区の人々は、田畑神社の東をとおし、神社の南から山に入りました。山に入った所に「山の神社」が祀られていました。

半沢の洞ほらに沿って上段へ上る二本の道があります。「かんの道」(観音道がなまったもの)と呼んでいます。羽広はびろ観世



水準点

音参りをする道と言う意味だと思われれます。これも山道の一つであり、畑作道はたやくどう（西天にある畑）だったと思われれます。

右側の急坂の道が古い道で、西天地域が開墾くわんされ、車馬の通りやすい道にするために左側の広く緩斜かんしゃの道が作られました。

かんの道と田畑神社への道との分岐点ぶんきに、花崗岩かこうがんの道標があります。

「右 西箕輪方面」

「左 神子柴原へ」とあります。

### (三) 新しい道

太平洋戦争後、人口が増え田・畑に住宅が建てられていききました。また、下段地区は排水工事がなされ、企業誘致や団地造成がすすめられました。そうなれば道路が必要ですから何本かの新しい道路ができました。

1 揚水機ようすい場からの送水管の上は村道六号線となり、重要な道路となりました。交通量も年々増えています。また、泉の森を始め道路周辺に住宅がどんどん建ちつつあります。「揚水機場」の項参照）供用は昭和五九年（一九八四）からです。



西天へ上る旧道と新道の出发点

### 2 村道一〇八五号線

JR飯田線のすぐ東を南北に通じている道路です。

かつては湿田が広がっていた地帯が、排水工事のお陰で、企業団地・住宅団地に変わり、公共施設も出来、道路も開通しました。

村道一〇八五号線（産業道路と呼んだ）の供用は昭和五九年から平成七年には県道となりました。

### 3 村道二〇二四号線

田畑公民館から神子柴に通じる道路です。

細い道があつて、田畑たはただった所にたくさんたさんの住宅が建たり、広い舗装道路になりました。供用は、昭和六二年（一九八七）からです。

### (四) 明神橋

天竜川を越える橋が村内には二つあります。その一つが田畑にあります。

『長野県町村誌』には「神子柴橋」が天竜川に架つていたと書いてあり、「幅六尺、長さ三十五間、土橋なり」と書かれています。明治の初め頃には神子柴地籍に天竜川に橋が渡されていたと思われれます。

いつの頃から橋が架けられたのか不明ですが、江戸時代頃からだと推察されます。

昭和（一九二六）の初め頃には木の橋が架かっていまし



コンクリートローゼ桁橋の明神橋

た。山から伐り出した丸太を組み合わせたものでした。歩くところは砂利などが敷いてありました。手すりなど付いていませんでした。しっかり出来ていなくて、大水が出る度に壊れ、流されてしまいました。次の橋が出来るまでは、中州へ丸太(二本を縛り付けた)を渡し、それを繋げて橋の代用としたりしていました。位置なども、川の様子によって移動しました。

コンクリートの永久橋が出来たのは昭和三十七年(一九六二)でした。コンクリートローゼ桁橋と言って、アーチ型の桁の姿が他県では少ないもので、土木遺産の一つだそうです。

大正(一九一七)の頃、田畑にも天竜川の渡し舟がありました。昭和五〇年(一九七五)に、古老から次のような話を聞きました。「天竜川の土手下に小屋掛けをしている

おじさんがいて、声を掛けると舟に乗せて天竜川を渡らせてくれた。東西の土手に柱を立て、そこに針金が張ってあってそれを伝わって舟を動かしていた。」

明神橋は伊那市の管轄のようで、橋幅が狭く通勤時には野底からの一方通行が行われています。

### (五) 田畑駅

最初の電車軌道の時の駅(停留所)がどこにあったかははっきりしません。大正八年(一九一九)に改良線になってからは現在の所に停留所がありました。

駅員のいる駅(最初は地元負担で駅員を置いたので、地元の意向で決められた)となったのは、大正一二年でした。昭和四五年(一九七〇)に無人化になるまで、業務委託された女性(田畑)が、駅員として常駐していました。

田畑・神子柴・南殿の村人、川向こうの野底・牧の人など昭和四〇年頃までは、乗降客でにぎわっていました。

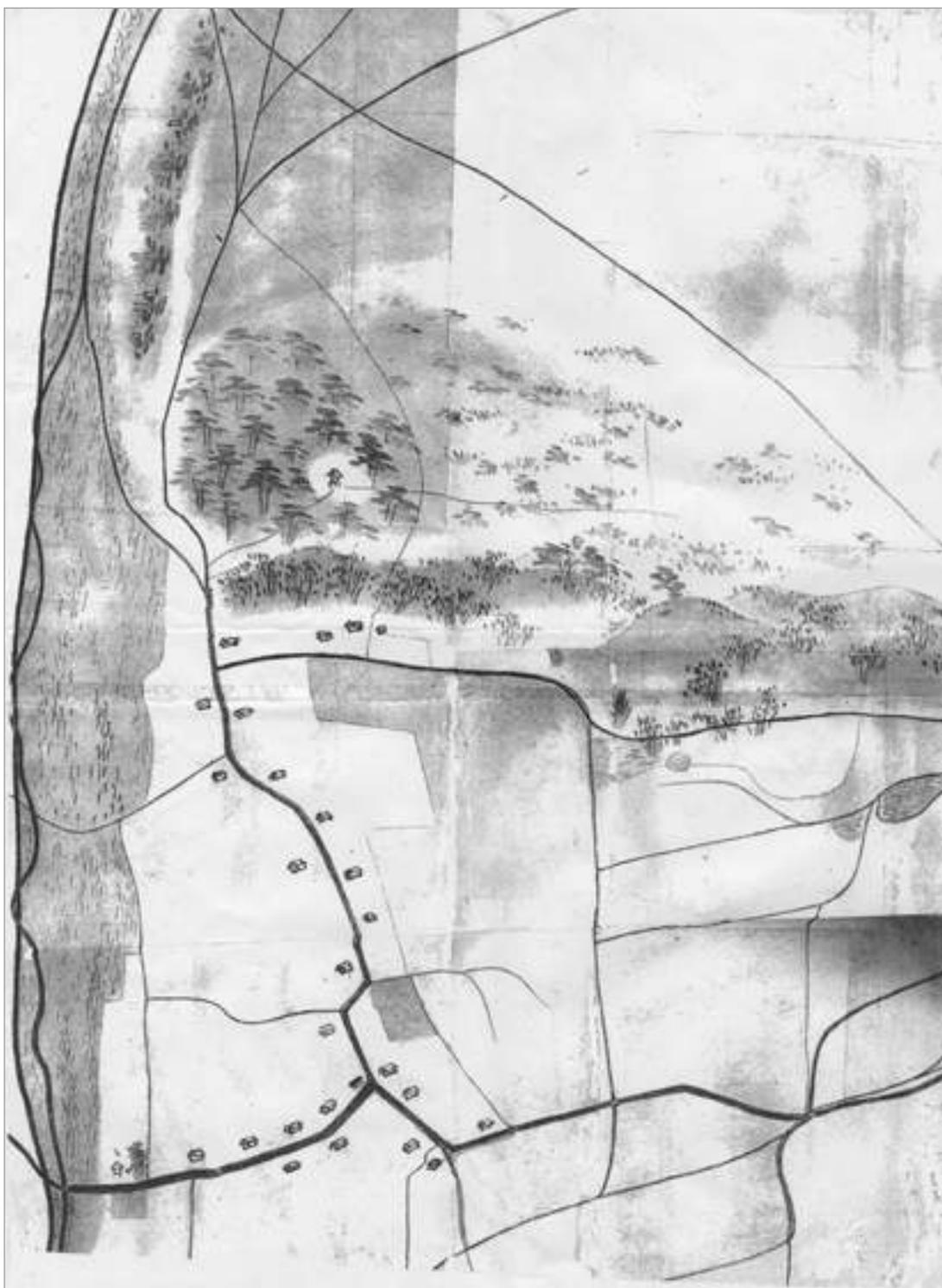


昭和の初め頃の田畑駅と電車

# 第七

# 神子柴





神子柴絵図(大和手文書) 文化元年8月(1804)215年前

## 一 神子柴の由来

ここ神子柴は、神子柴遺跡(旧石器時代)が物語るように早くから人が住みついてきたようですが、その後のことは殆ど分かっていません。しかし、御射山社の鳥居跡があり、神子柴神社の歴史も古く、古城・内城など多くの古い地名も残っています。

神子柴区は、上段・中段・下段の三か所に集落があります。中心部の中段は、大清水川と大泉川の伏流水が湧き出る位置にあることから湧き水が多く、飲み水や水田用水に恵まれ、地形も平らであることなどから早くから人が住みついたと思われる。明治半ばに伊那街道が県道(三州街道)になり、その後国道になって、水田だったところへも住宅が建ちました。商店や会社もできてきました。上段は、西天竜用水路が造られ、道路が整備された頃から家が建ち始め、上農寮や信大農学部などができて家が増え、中央道の開通によりアクセス道路が開かれたことによって市街化しつつあります。最近では春日街道沿いにも家が増え、JAの施設や病院などもできました。下段は、天竜川氾濫原の水田地帯でしたが、戦後、伊那土地改良区による耕地整理事業が行われ、村道二〇三八号線が整備されて水道管が敷設され、天竜川の堤防が強

化されたことによって家が建ち始め、現在は住宅地となりました。

「みこしば」の名の起こりははっきりしませんが、昔「神子柴」と「御園」とは一つの村でした。何時の頃か分かりませんが分かれたようです。『長野県町村誌』によると、南箕輪から西箕輪にかけての一带は建御名方命たけみかたのみことの御狩の古跡であったようで、命みことが腰をかけられたことから「御腰場」、その後御射山祭が行われるようになって「神輿場」と云われる様になり、その後「御子柴」となり、さらに延宝六年(一六七八)に現在の「神子柴」と改められたようです。今でも十年に一度、諏訪の上社の祭りに諏訪市中洲福島区へ招かれていて、



アクセス道路付近



村道2038号付近

諏訪明神との繋がりが続いています。

明治八年（一八七五）に「南箕輪村」が誕生して、「神子柴耕地」、大正三年（一九一四）から「神子柴区」となって今日に至っています。神子柴区の戸数は、南箕輪村になった当時は五十三戸でしたが、戦前は七〇戸程になり、現在（平成三〇年一月）は七〇〇世帯・人口一六三八人となっています。

## 二 神社

### (一) 神子柴神社

字駒形あさまかたにあり、白山社はくさんしゃと八幡宮の合社です。

#### 1 祭神

白山社はくさんしゃ

白山比め神しらやまひ・伊弉諾尊いざなぎのみこと・伊弉冉尊いざなみのみこと

八幡宮

誉田別尊ほんだわけのみこと（応神天皇）

創立の年やいわれは分かりませんが、伝えられるところによると、平安時代の初めの大同年中（八〇六〜）に奉祀ほうしされ、当時は盛大な祭りが行われていたといえます。社宝の神馬（木製の馬）に、「天文五年（一五三二）丙申正月献す」と有ることから推して、かなり古くからの社であったことがうかがえます。

#### 2 社殿

本殿は、一間社流れ造りで、正面には唐破風からはふ（そり曲がつた破風）が付いています。海老紅梁えびこうりょうは見事な竜の彫刻が施されています。また擬宝珠ぎぼうしのある柱を立てた欄干らんかんに施された勾欄こうらんの縁のはてには脇障子があり、右側には宝剣（尊い剣）に乗る仙人、左側には雲上の鳥に乗る仙人が彫刻されています。寛文一一年（一六七二）に再建。天保一三年（一八四二）にまた建てなおして、明治五年（一八七二）村社になっています。

覆屋おおいやの棟木むなぎには「奉上棟天郷中主神宮永久吉祥大正元年一



神馬

本殿



平成20年頃の神社

二月一五日吉祥」と書かれています。昭和五年（一九三〇）に改築され、現在の建物は平成五年に建て替えられたものです。拝殿は間口五間、奥行き三間の入母屋造りで、大正七年（一九一八）に改築したものです。

### 3 鳥居

高さ一一尺、開き七尺で控え柱を持つ木製両部式のものであったが、平成元年氏子（村中）と財産組合とによってコンクリート製に建て替えられました。

### 4 石灯笼

古い石灯笼が崩れてしまっていたのを平成五年（一九九三）一〇月に西天地区の有志（九人）の人々によって再建されました。

### 5 階段

拝殿を改築した大正七年（一九一八）に施工・建設したようです。

### 6 水屋

水屋と御手洗が造られ、水道が引かれました。御手洗には昭和天皇六十周年記念（一九八五）と記されています。

## (二) 境内社

### 1 高丘社（天狗社）

祭神

高津神（『長野県町村誌』では天狭霧命となっている）

創立の年月は分かりませんが、明治四一年（一九〇八）一月、半ノ木原にあったものを移したものです。

### 2 稲荷社

祭神

倉稻魂命、猿田彦命、大宮女命

この社も創立の年月は分かりませんが安政年間（一八五四～一八五九）に再建されていて、明治四一年（一九〇八）一月字駒形より移されたものといわれます。

### 3 金刀比羅社

祭神は大物主神・崇徳天皇

### 4 天満宮

祭神は菅原道真公

### 5 蚕玉様

祭神は蚕の神

## (三) 御射山社（御射山社鳥居跡）

祭神

建御名方命  
八坂刀売命

御射山社は、昔、豊獵と豊穰を祈った祭りとして始まったもののようですが、鎌倉時代（一一八五～一三三三）には幕府の保護を受けて盛んになったといえます。

神子柴の御射山社は春日街道添いにあり、二本の落葉松（現在は一本）の大木の根本に穂屋（すすきの屋根）を架け「御射山社」と書かれた古い碑が建っています。この碑は文政一〇年（一八二八）に神子柴の人々によって建てられたものです。碑の裏には御射山社の故事・来歴が書かれていて、この碑文は、この御射山社に関する記録の中で最も古いものです。

碑文の内容は、「御射山社の鳥居の基礎がここにある。最初の御射山社は、平安時代の大同四年（八〇九）に坂上田村丸（麻呂）が本社を建てた。その後四五一年経った鎌倉時代の文応五年（一二六四）に再建され、三二六年後の戦国時代天正一三年（一五八五）一月の大地震によって壊れた。それから二四三年も経ったが再建されることもなく、人々はただなげくばかりで昔からのしきたりも無くなってしまった。やがてこの基礎も分からなくなるのである。うから、いわれを記して碑を建てる。」というものです。



御射山社の石碑

御射山祭りには、穂屋（御仮屋）をこしらえ宮島氏が神官を勤めていたようです。神子柴からは御射山社へ御輿（みこし）を出し、途中にあった三本木で休んだといえます。また、御射山社の規模について、神社の別当寺は普光寺（藤宝寺と言う説もある）で、

一時は一二坊もある大規模なものであったと言われ、御射山社は、伊那郡一の大社だったようです。しかし、兵火や大地震に遭って、かつての姿は全く無くなってしまいました。御射山社については、『路原拾葉ひとつばなし』・『伊那志略』や『長野県町村誌』の南箕輪村・西箕輪村の項等多くの古書に書かれてはいますが、御射山社の歴史は大変古い上に、旧御射山祭が行われなくなった後に書かれた記録のみで、はっきりしない事ばかりです。

西山には「御射山」という山があり、地元の人々によると、字御射山平には御射山社や御射山社の別当寺があったといえます。西箕輪の書物『我が郷土』や『西箕輪誌』によれば、最初の御射山社は与地にあつて、それを羽広へ移したと記されています。また、明治の初めまでは第二の鳥居があり、第一の鳥居は神子柴の鳥居原にあつたと記されています。このよ



御射山社祭典（昭和52年）

うな事を合わせて考えると、神子柴の石碑には「御射山社」と刻まれてはいますが、ここに御射山社の本社があつたとは考えにくいのです。神子柴に御射山社があつたというには裏付けがなさ過ぎますし、「神輿場」の名の起りも御輿を出した村ということで、西箕輪に本社があつたとするのが自然です。

鳥居のあつたところに「御射山社」と書かれた石碑があるのは、碑文にもあるように、かつての様な盛大な祭が出来なくなつて、御射山社を分散し、祭りのよりどころとして碑が建てられ「御射山社」と書かれたものと思われまます。

写真で見ると、今も大きな落葉松の根元の石碑に穗屋を架け、神子柴では毎年八月二六日頃御射山祭の神事を行っています。

### 三 お堂など

#### (一) 薬師堂

前は宮ヶ崎にありましたが現在は神社境内の諸社を祀つた建物の南にあります。切妻造りの小祠しょうしの中に、正面に唐破風からはふの屋根を持つ、古くて小じんまりとした建物です。よく手のこんだ組み物によるお堂です。このお堂について、古書『路

原拾葉ひとつばなし』に、「内城うちじょうの城主だった近藤氏の守り本尊だった」という記述が有るといいます。お堂の中には、昔、天竜川に流れ着いたという素朴で古めかしい薬師如来が安置されています。その下に薬師如来の眷属けんぞく十二神将しんしょうが置かれていました。これらの像は、頭にそれぞれ十二支をいただいて力動感があり、おだやかで優しい美しさがあります。台の裏には、「文化拾三子九月吉日本曾宮越住加藤嘉置作之」と記されています。村の指定文化財（一体欠如）にもなっています。残念なことに平成二三年三月盗難に遭つて四体を失い、現在残っているのは七体だけになりました。



薬師堂



平成10年頃の十二神将



宮ヶ崎にあった頃の薬師堂

## (二) 金剛院

「神子柴にはお堂が二つあった」という言い伝えがあり、文化元年（一八〇四）の絵地図にも二箇所にお堂と思われる建物が描かれています。その一つが旧伊那街道沿いの大清水橋に近い庚申塚や馬頭観音碑がある場所で、今でも何本かの大木が茂っています。向かい合いには「やくしまえ」と言う小字こあざもあります。はつきりしたことは分かりませんがここに金剛院があったのではないかと言われています。

『長野県町村誌』  
や高木家（屋号  
東朝軒とうちようけん）の言い伝  
えに拠ると、先祖  
は、中期に武田  
氏に仕えた武士で  
あったが、川中島  
の戦いの後帰農し、  
神子柴に落ち着い  
たと言います。先  
祖正弘の二男盛秀  
（幼名は秀弥）が  
松島の明音寺へ弟  
子入りした後、金



金剛院主の墓

剛院を開いたと言います。

この寺について『伊那郡神社仏閣記』に、「一真言宗山伏張本三寶院派金剛院」と書かれています。盛秀はこの地方民からの信頼を得て活躍し、元禄三年（一六九〇）に亡くなりました。

金剛院はその後世襲し、明治維新の「神仏分離」により廃院となったようです。その金剛院の歴代の法印の墓石が、高木家（沢屋）の墓地に五基建っています。

廃寺になる時、不動明王と役の行者像の二体が西春近の恩徳寺へ移されたが、現在は沢尻の恩徳寺に祀られています。

### (三) 役の行者の石像

山岳修行者である役の行者の石像一基が神子柴神社境内（本殿の北の石垣の上）にあります。

## 四 公共施設

### (一) 神子柴学校跡

明治五年（一八七二）九月五日に筑摩県下で二六番目の学校として山寺村（伊那）に開校した第二六小校の学区に神子柴村は加わっています。その後、明治六年一月にこの小校は解散し、七年一月神子柴村には第一一二区一〇四番「致知

学校」が設立され、これが神子柴村にできた最初の学校です。役所に出された文書には、最初の生徒数は男二四人、女二人と記されています。明治一〇年には校名も「神子柴学校」と改められ、支校「大萱学校」(西箕輪)を持つようになりました。

明治一一(一八七八)年には、さらに山園学校(山寺・御園)へ併合しましたが、国の「一村一校制」の制度改革により神子柴学校は廃校となり、明治一二年(一八七九)には田畑の「美和学校」(のち南箕輪学校分校となる)へ併合されました。幾多の変遷を経て明治一九年(一八八六)からは漸く南箕輪学校(田畑支校・久保派出所・大泉派出所があった)で学ぶようになりました。

神子柴学校跡は、神子柴耕地の中央にあり、山園学校併合後は耕地の集会所として使われました。また、当時は学校田があつて水田から上がる米代が子供らの奨学資金として使われていたといえます。しかし、昭和二七年(一九五二)に建物は上牧(伊那)の民家へ移され、道路も拡幅されていて昔の面影はありません。

## (二) 公民館

公民館の前身である神子柴耕地の集会所は、神子柴学校の建物でした。戦後の新しい村づくりの一つに公民館の設置がありました。最初の公民館は、昭和二五年(一九五〇)の公

民館設置条例に基づき神子柴区の北方の水田へ「宮ヶ崎」(お宮前)の土砂を運んで造成した土地に建てられました。そして会議をはじめ、いろいろな文化活動が行われてきましたが、昭和五七年(一九八二)に農家の「連担団地」(耕地の団地)の研修センターが建てられ、公民館としても併用されてきました。

区の戸数が増えたり、公民館活動が活発になったり、他の区で広い公民館が建てられたこともあつて、にわかには新しい公民館建設の話が持ち上がり、平成一三年に広いホールのある公民館が完成しました。



旧公民館



現在の公民館

### (三) 保育園(所)

「就学前の幼児を保育するための施設を欲しい」という声は前々からありましたが、昭和二二年(一九四七)に出た「児童福祉法」の公布により、「保育に欠ける幼児を保育する」保育所が開所しました。

「南部保育所」ができたのは村内では一番早く、昭和二十八年一

〇月の事でした。集団生活による育児効果もあって次第に幼児の数は増え、殆どどの該当幼児が入所するようになりまた。

昭和五〇年六月に近くへ移転改築し、五七年には一才未満児も入所できる部屋も増築されました。名前も「南部保育園」と改称されました。

### (四) 上伊那農業高等学校第二農場(中原農場)

この農場は、西部公民館のすぐ南にあります。かつて「上農寮」と呼ばれていた塾風教育の宿泊施設と農場があった場



最初に建てられた保育所

所です。

この農場については、資料二の項と沢尻区の上伊那農業高等学校の項で説明されています。

### (五) 信州大学農学部

昭和二〇年に長野県立農林専門学校として開校し、昭和二四年信州大学設置に伴い吸収されて(農学科・林学科)発足しました。

昭和四七年大学院農学研究科修士課程が設置され、平成三年に岐阜大学院連合農学研究博士課程設置によりその構成大学となりました。

平成二七年四月、信州大学農学部はこれまでの三学科制から「農学生命科学科」の一学科制(四コース)に改組しました。



信州大学農学部



上農寮舎(昭和11年)

## 五 古跡など

### (一) 神子柴遺跡

神子柴水道の水源地の北方の小高い丘にあります。日当たりが良く、なだらかな傾斜地で、大泉川扇状地の先端にあたる場所です。

ここから出土した石器類は、今から一二、〇〇〇〜一五、

〇〇〇年前(旧石器時代後期)のものと言われ、歴史が大変古い上に、どれも形が整っていて美しく、昭和六三年(一九八八)国の重要文化財に指定されました。

昭和二八年(一九五三)頃、この土地の耕作者が遺物を採取したのがきっかけで、昭和三三年上伊那誌編纂歴史部の人たちによって

第一回発掘調査が行われました。この発掘調査によって多数の貴重な石器が発掘されました。上伊那に於いては旧石器時代(土器が使われる前)に人類が生活していた最初の証拠となり、この地方の人類の生活の起源が一万年あるいはそれ以上溯る事になったのです。翌、三四年に第二回めの発掘調査が行われ、石器や土器片の外、竪穴住居址三個の有ることも確認されました。

この二回の調査によって発掘された石器は古いことに加え、大きくて美しいことに発掘した人々も驚いたと言います。その後、石器には「神子柴型石器」の名が付けられ全国的にも有名な遺跡となりました。この遺跡からは、旧石器時代・縄文時代・平安時代の遺構・遺物の貴重なものも見つかっています。

昭和四三年地元



神子柴遺跡



南側から見た発掘現場

希望により、第三回発掘調査を一月に一二日間行いました。この時、旧石器時代の石核調整の作業場と思われる遺構と、石器多数、縄文時代の石組み遺構一〇址、それに土こう墓と土器、石器多数と土器の灰釉陶器・須恵器が発見され、さらに竪穴住居が確認されました。この調査の結果は、この辺りに一三、〇〇〇年ほど前から人が住んでいたことを物語っているといえます。この遺跡は青森県の長者久保遺跡とともに、「長者久保神子柴文化」として石槍いしやりや片刃石斧を持つ文化の栄えた一時期のあったことが考えられる遺跡であると考古学上注目されるようになったようです。

出土品は、「伊那市創造館」に常設展示されていて、村にもレプリカが造られ、郷土館に展示されています。また、平成二〇年に神子柴遺跡についての発掘調査報告書『神子柴』が出版されています。



神子柴型石器

## (二) 古城跡こじょう

神子柴の北西の段丘上を高圧線が通っていますが、その段丘上の林の中の鉄塔がある辺りを「古城」と呼んでいます。ここは南北の展望が開け、東は高遠方面まで見通せる好位置です。現在は、三角点があつて、「七一・一」一と記された標柱が立てられています。室町時代の文明年間（一五世紀半ば）に箕輪氏（木曾義仲の末孫と言われる人々）がここに居住していたと伝えられ、城の遺構などはないが、この山の下には城ノ越（腰）・殿垣外・小太郎という地名が残つていて「古城」もしくは「内城」に関係した見張り所か狼煙台のろしたいがあつたのではないかとされています。

## (三) 五輪塔ごりんとう

「古城」の直ぐ西側の林の中に、古い五輪塔が三基立っています。この五輪塔は『長野県町村誌』には、文明年間（一四六九〜一四八六）の箕輪氏の箕輪義建（左衛門）・同義俊（小太郎）・同義嶺（刑部）の墓と記されていますが詳しいことは分かりません。

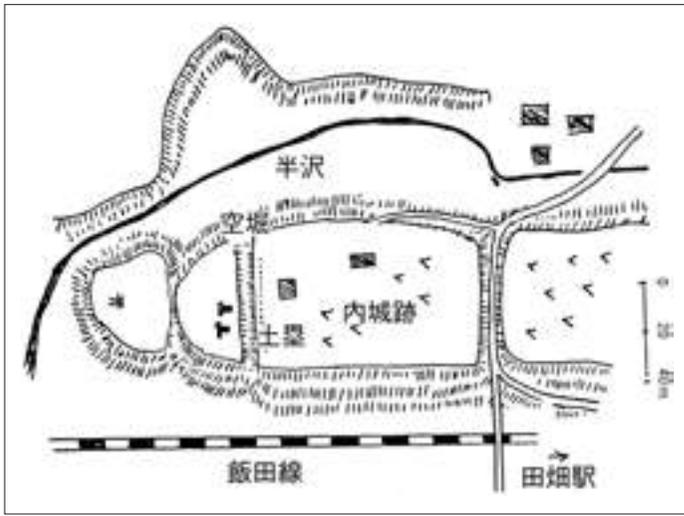


五輪塔

#### (四) 内城跡

飯田線が南下するとき、小中井沢川を渡る手前の右側の台地（飯田線の西側の断崖の上一七〇程）にあつて、地元の人たちはここを「うちじょう」と呼んでいます。

上の平は、東西六五〇南北一〇〇ほどの長方形の土地で、東に天竜川・西に小中井沢の谷・北に空堀（現在は掘り下げられて道路になっている）だったと思える小さな谷・南には幾つか曲輪があり、城の構えにふさわしい地形です。しかし、この城について



内城の概略図

いては、昔「近藤某が城主だった」という言い伝えがあるだけで、その外の事は何も分かっていません。ただ、この城の北方に町田・櫓田などという地字があり、まれに地中から古城具が出たという話が伝

わっています。櫓田からは、二回（文化年間と安政年間）にわたって大きな瓶に入った古銭が大量に出土しています。このようなことから、昔、内城があつたことは間違いないとされています。掘り出された古銭は、合わせて一一〇貫文もあつたといえます。それは中世に使われた中国銭（宋・元・明時代）の永樂通宝・開元通宝など一〇種類ほどのようです。昭和の末までは、瓶の一つが上伊那郷土館に保存され、古銭の一部は近所の人々に配られ、残りの多くは勢喜屋（発掘した人の家）に所蔵されていたと言います。

#### (五) 高木氏館跡

高木氏は、初めは小笠原氏の家臣であつたが、次に箕輪の藤沢氏に従い、天正一〇年（一五八二）高遠の保科氏に属した武士のようです。伊那一二騎の一人とまで呼ばれ、高木氏の名はいろいろな書物に出て来ますが、天正一七年（一五八九）民籍に帰つたと伝えられています。

ところで、神子柴には高木姓は多く、中でも古くから続いているといわれる家が二戸あつて、その一戸は高木氏が住んでいたという館跡（神子柴の西方の小高い丘に、東西一六間、南北二〇間、面積三二〇坪と記されている『長野県町村誌』）に近く、現在の高木家（大和手）の墓地には、古い墓石も多くあります。また直ぐ近くに「高木の城」と呼ばれる場所があつたという話もあります。さらに、現在残っている古

い土蔵の中には江戸時代の古文書が数多く保存されています。たし、古城や五輪塔の有る場所にも近く、高木家（大和手）は武士高木氏の子孫と思われるが、中世に活躍した高木氏に結びつく確かな証拠はありません。

もう一戸の高木家（東朝軒）も古くからの有力な家柄で多くの分家があり、金剛院の院主もこの家の分かれのようです。昔は墓地が大和手の墓地と同じ場所だったと言いますから同じ高木氏であったと考えられます。

## (六) 天竜川通船

天竜川通船を始めた加藤孫市の家（田丸屋<sup>たまりや</sup>）は現在の上の段へ移っていますが、家人の話によると当時の家は神子柴の中心部にあったと言います。通船による営業のはつきりした姿は分かりませんが、神子柴村の年寄孫市によつて、文政一三年（一八三〇）～天保六年（一八三五）の間営業していたようです。しかし業績がよくなく、長くは続かなかつたと言います。天竜川上流の輸送業の創始者であつた孫市



銅板の宝船

は、幾多の困難を乗り越えて松本の役所へ願いを出し、創業に漕ぎ着けた功績は大きいと言えます。田丸屋には松本藩から賞与されたという銅板の宝船の模型や通船に関する古文書が多数残っています。

## (七) 高木館製糸場（所）跡

この製糸場は現在の二組の会所のすぐ北にあります。大正一〇年（一九二一）に高木藤五が始めた製糸所で、社員が六〇人（男五・女五五）五〇釜程の規模でした。

後に山本館（伊那町）と合併して株式会社高木館下平製糸場となつて伊那町へ移転したために神子柴での営業期間は短かつたが、神子柴に最初にできた工場でした。動力には水車を使つていたと言います。



神子柴にあった旧高木館製糸場

## 六 石碑

### (一) 庚申塚・甲子塔など

神子柴の庚申塚は旧伊那街道の  
大清水橋の北方約五〇呎の所  
と、宮ヶ崎（神社入り口）にあ  
ります。

#### 1 大清水橋に近い庚申塚等

- ・ 庚申 寛政二二年  
(一八〇〇)

- ・ 庚申 安政 七年

(一八六〇)

- ・ 甲子 二基

- ・ 馬頭観音像 八体

- ・ 馬頭観音碑 五基

#### 2 神子柴神社入り口の 庚申塚等

- ・ 庚申 元文 五年

(一七四〇)

- ・ 庚申 大正 九年

(一九二〇)



神社入り口の庚申、甲子塔



伊那街道沿いの庚申塚

神子柴

- ・ 庚申 昭和五五年

(一九八〇)

- ・ 甲子 昭和五九年

(一九八四)

昭和五九年に近くに散在して  
いた庚申塚・甲子塔をまとめま  
した。さらに平成二〇年（一九  
〇八）に二八体の馬頭観音像や  
馬頭観音碑を道路端へまとめま  
した。

### (二) 道祖神

#### 1 神子柴神社下の三叉路

- ・ 道祖神 年代不詳
- ・ 道祖神 年代不詳



道祖神



集められた馬頭観世音

## 2 宮ヶ崎

・道祖神 年代不詳

## 3 屯所の西の三叉路

・道祖神

嘉永辛亥夏  
かひと

(一八五二) 四月

鼎齋方



道祖神

## 4 川原へ下る坂道の手前

・道祖神 年代不詳

(不吉の言い伝えがあり横倒しのままになっている)

### (三) 駒形道の碑

大正天皇の御即位記念の事業として大正三年(一九一四)に原(西天)へ上る道を開削した記念の碑です。

区の文書にこの時の開通式の村長の式辞が残っていて、郡長を招いていることや、今日から馬車交通が安全にしかも沢山の荷物を運べるようになるという喜びが書かれています。



駒形道記念碑

### (四) 川原の碑

村道七号線が天竜川の堤防と交わる三叉路の直ぐ南にあります。現在は川原井沿いにありますが、元の位置は田畑駅の少し南の高く(三辺程)盛り上げた小山の上にあります。戦後の耕地整理の時にここへ移転したものです。

碑文

明治十八年

戸隠大神

水波能売神

九月

この碑は川原井近くにあったので用水の水神かと思われるやうですが、

・洪水による災害が続いた明治一八年(一八八五)の九月に建てられていること

・水波能売神(水みずを司る神)と戸隠山大神とを祀っていること

・水田地帯へ小山(二〜三辺)を造りその上に建ててあったこと

さらにはこの石碑が大きいことなどから考えて、堤防が未だ不完全で、何度も水害に苦しめられた人々が、水波能売神に水害を防いで貰う願いを込めて建てたものと考えられます。

現在でも水との戦いは続いています。昭和になって堤防

を造る技術が進んでからは水害は少なくなっています。

## (五) 芋ノ田の碑

信大の農学部のある農場の上の林の中にあります。明治の初め、この一帯は草刈場で水もなく家もありませんでした。明治の半ばを過ぎた頃、西箕輪村大萱の原杉蔵とその子孫が危険を犯して長い横井戸を掘り、林を開墾して水田を開いたことなどを伝える記念碑です。石碑は三基ありますが一連のもので明治三六年（一九〇二）に建てられたものです。

碑文は読めない部分もありますが、当時の水田の面積は九反歩（〇・九<sup>反</sup>）程だったようです。その後も開拓が続ぎ、現在この一帯は信州大学農学部のある農場になっています。

近くに横井戸があり現在も途切れることなく清水が流れています。

## (六) 神子柴水道水神碑

神子柴水道の完成記念の碑です。昭和の末になって建てられました。



芋の田の記念碑

碑面 大清水湧水

水神

碑陰 大正一四年三月 水道完成

昭和六二年五月 神子柴水道組合建之

## (七) 伊奈誠一郎 慰霊碑

うらだて横井戸に沿って登り、山道に出た右側の林の中にあります。天保四年（一八三三）高木家（大和手）勘之丞の三男として生まれ（幼名一甲子次）医師になりましたが、幕末、幕府軍に身を投じ、北海道函館の五稜郭（ごりょうかく）の戦いまで参戦しました。

その後、石川県内の警察署長などを歴任し、明治二二年（一八八九）五月十五日在任中死去しましたが極めて烈士であつたので人々の同情をかい、昭和六二年（一九八七）一月村内の有志（伊奈誠一郎移設顕彰会）によって能登に在った慰霊碑が移設されました。

碑には「故石川県警部伊奈誠一郎之碑」明治二二年五月一日死去静岡県伊奈太郎建之」とあります。そして、すぐ左に副碑があります。

## (八) 宮ヶ崎の碑

公民館を造るために宮ヶ崎の土砂を削り取って埋め立てましたが、土砂を取る前は眺めの良い高台（広場）になっていて、そこには、薬師堂とこの碑がありました。薬師堂は神社

の境内へ、宮ヶ崎の碑は現在の所へ移されました。この碑には「宮ヶ崎」大正四年青年会建之とあります。

## 七 用水

### (一) 生活用水（神子柴水道）

神子柴の人々は昔、大清水川添いの下の沢の清水二カ所（上村・横小路）と・さいかち清水（下村）を飲み水にして生活していたと言います。その後、用水路が整備されて、区内全体を流れるようになり、不自由無く生活することが出来るようになったようです。しかし、伝染病等の心配などから大正一四年（一九二五）簡易水道が創設されてカランをひねるだけで良い水が使えるようになりました。

戦後、人口が増え水の需要が増したため、昭和四八年（一九七三）にタンクを大きくし、配水管を太くし、水質も向上させて今日に至っています。

神子柴の水道は村内で一番早く創設されましたが、現在もなお村内最後の簡易水道として続いています。

### (二) 半沢井

神子柴区と田畑区の境が半沢で、ここから流れ出る沢水を田畑と上井・下井（小中井沢川）に分けて区内に引き、主に

水田用水として使ってきました。この辺りは早くから水田になっていたようで、昔の検地の時には「上田<sup>じょうでん</sup>」が多かったといえます。

### (三) 川原井

この井は、天竜川にしっかりとした堤防が造られた頃、田畑区の東の地点で天竜川の水を取り入れ、神子柴地籍の水田へ引水するために造られたようです。この井は水神橋（伊那町）方面へも延びていました。

現在の水路は昭和三二年完成した幹線用水路（伊那土地改良区の事業による）になっていて、箕輪町地籍の天竜川から取水しています。

## 八 橋

### (一) 大清水橋跡

三州街道（県道）に改修される前の伊那街道は、幅が狭く、カーブや坂の多い道でした。神子柴と御園（伊那村）の境には大清水川があるため、坂を下って橋を渡り、また坂を登る急カーブの道でした。大清水川を渡るこの橋が大清水橋で、長野県町村誌によると、長さ二間（三・六<sup>六</sup>）・幅九尺（二・七<sup>七</sup>）の板橋であったと記されています。

明治半ばに行われた三州街道と大清水川の大改修工事によつて昔の面影はありませんが、大清水川橋までの伊那街道の道筋の一部は現在も残っています。

## (二) 神子柴橋

神子柴橋について『長野県町村誌』に「神子柴耕地の東にあり。伊那部村及高遠へ通ず。長三十五間、幅六尺、土橋なり。」とあります。田畑の橋の記載はなく、北殿橋と並んで書かれています。

古老の話に拠ると、大清水川が天童川に流れ込む辺りに（昔は高い杉の木が立っていてその根元に水神碑―現在の二葉町神社の石碑）神子柴橋があつて、橋を渡つて上牧に通じていたと言います。初めのうちは、芦の生い茂つた中州と中州の間に丸太を渡した程度のものでつたようですが、高遠に通じる大事な橋だつたようで、やがて橋脚のある土橋になり、長さ三五間（六三<sup>尺</sup>）・幅六尺（一・八<sup>尺</sup>）の橋になつたようです。

その後、堤防工事が繰り返して行われて当時の面影は全くありませんが、竜東の人たちがこの神子柴の橋を渡つて里道を通り御射山社の方へ向かつたという話が残っています。

## 九 道路

### (一) 伊那街道筋

伊那街道は、人や牛馬が歩くための狭い道で、坂があり曲がりくねっていました。明治になって産業が盛んになり、荷馬車や乗合馬車などの車馬交通の必要に迫られて、鉄道と共に全国的に近代道路整備事業が行われました。県道三州街道も、明治二八年（一八九五）に塩尻から飯田まで改修されました。しかし、神子柴と田畑は完成するのが大幅に遅れました。この県道が完成したのはいつだったか確かな記録が見つかりませんが、大正一〇年頃のことと思われまゝです。それは、古老



旧伊那街道

が「県道が出来上がったのは昭和になってからだ」と言っていたことや、大正八年にこの道が「県道長野飯田線」と改名されていて、長野〜飯田間の交通を円滑にするため、遅れていた部分や不完全な部分を完成させたと考えられるからです。神子柴と田畑の間が完成したことによって、伊那〜辰野間の交通（特に荷馬車・自転車）は盛んになったことが交通統計にも表れています。その後、乗り合いバスも開通しました。

## (二) 東西の道

南北に通じる道は古くからありましたが、東西に通じる道はかなり遅れて開発されました。神子柴の東西の道に荷馬車が通れるようになったのは、大正三年（一九一三）の御大典（天皇即位の祝い）の時の道路改修以後の事でした。続いて翌年、下道が測量されさらになだらかな道が開かれました。

区の古文書に拠って、川原へ下る道も、ほぼ同じ頃測量され改修されたものと思われま

## (三) 国道一五三号線（伊那バイパス）

県道は、昭和の初めに完成し、二九年（一九五四）に二級国道一五三号線（名塩国道）に昇格し、拡幅・直線化・舗装化されている



バイパス工事の大看板



入舟へ向かって進められた工事風景

道路になりましたが、交通がさらに激しくなったために、昭和四七年（一九七二）伊那バイパス（神子柴〜入舟間）として天竜川の堤防の上を走る広い道路が開通しました。この道路はその後小黒川まで延長されました。

旧国道（神子柴〜沢渡）は、県道一四六号線となりました。



# 一 沢尻の由来

古くは沢渡さわたりといい、その後沢尻と改められました。この地名の由来は定かではありませんが『長野県町村誌』によると、建御名方たけのみかた富命とみのみことが猛獣を追いつめた極みの地の意味で、ここから沢を渡る所、言い換えれば沢の尻、沢尻と称したといわれています。

また、羽広山王権現の棟札むなふだに文応年間（一二六〇～一二六二）に沢尻居住の神職宮島津盛つもりが御射山社再造の式を行ったという記述があり（『長野県町村誌』）、かなり古くからあった村と思われます。文禄元年（一五九二）になって里長と神職を兼ねていた宮島式部一族が、近郷の住民に襲われて数人で他地区に逃れ、この時より村が亡くなってしまいました。その後式部は姉の嫁ぎ先、久保の城主榎木四郎を頼り久保に暮らしていました。やがて承応年間（一六五二～一六五四）になって、再び一族と共に沢尻へ帰って村を構えました。これは明暦二年（一六五六）との説もあります。それから「久保村沢尻」と称して明治八年（一八七五）まで久保村に属していました。また昭和三〇年（一九五五）に中ノ原が沢尻に合併しました。

沢尻耕地の明治一六年（一八八三）の人口は二二一人でし

たが、戦後信州大学農学部が設立され、昭和四九年（一九七四）には長野県上伊那農業高等学校も移転してきて、更に伊那インターの開通や平成八年に南部小学校が開校されて発展し、平成三〇年の沢尻区は六五七世帯、人口は一四一二人です。

## 二 神社

### (一) 日光社月光社

恩徳寺から北に一〇〇坪ほどのところにあります。古くは下日光平にあったものを、今の日光平に遷うつしたそうです。

#### 祭神

天照大御神  
月読命つきよみのみこと

#### 由緒

いつ頃創建されたか定かではありませんが、棟札によると明和四年（一七六七）に建立され、「日光大権現社」と称し、神主は伊藤伯耆守ほうぎのかみ、大工は伊那市小沢の小林喜右衛門と記されています。同じ明和四年に「月光大権現社」が建立され、『伊那郡神社仏閣記』には「日光大権現」とあります。二社が合殿されたのですが、いつかは分かっています。嘉永五年（一八五二）に覆屋おおいやが造られました。明治一〇年（一八七七）



日光社月光社

には久しく風雨にさらされ  
祭典も滞っていたのを憂え  
て、覆屋を村中で葺き替え、  
祭典も復活させました。

明治四一年（一九〇八）  
年に、氏子の少ない神社は  
合祀するよう県知事から訓  
令があり、辰野町川島の飯  
沼沢の諏訪神社に合祀され  
ました。しかしそれは帳簿  
上の合祀で、実際はそのま  
まで祭典も毎年行われてい

ました。昭和二七年（一九五二）の五月に県知事の許可を得  
て、神社本庁に所屬する神社となり、今日に至っています。

### 社殿

覆屋は銅葺。本殿は一間社流造、擬宝珠勾欄の縁を廻し、  
脇障子があり、屋根は柿葺きで、二重繁垂木です。拜殿は昭  
和五一年（一九七六）に建立されました。

本殿内には、諏訪社（文政九年——一八二六）、御射山宮（嘉  
永五年——一八五二）、式部明神（明治二年——一八六九）、稻荷  
社（文政九年）、寿命天神社、筒男三社、伊知気社、弁財天  
社などの十五社が祭られています。

また、境内社には東に木造の秋葉神社と石碑の蚕玉神があ  
り、西に石祠の天満宮があります。



秋葉神社（左）と蚕玉神（右）



天満宮

### (二) 伊雑皇大神宮

宮島氏館跡から西に二〇〇坪ほどの丘の上にあります。

### 祭神

天照皇大神と  
思われます。

### 由緒

創建など定か  
ではありません。  
明治四一年（一  
九〇八）に区内



伊雑皇大神宮

のしょうし小祠を合ごうし祀した際に、この神宮だけは合祀できませんでした。村人はこの宮を「いぞうこうさま」とか「おこわさま」と言つて、十二月二十日を祭日として祭さいし祠を怠おろそかなかつたそうです。現在は、祠ほらでなく石碑が建てられています。

碑陰には、次のように記されています。

奉納祀伊雑皇大神宮 文政十三庚寅歲二月廿七日 氏子中  
奉屋替伊雑皇大神宮 明治三十三年一月一日 氏子中  
奉再建伊雑皇大神宮 昭和二十年二月二十日 氏子中

平成元年 秋之建

講中

### (三) 諏訪社

上伊那農業高等学校から西に一五〇坪ほどのところにあるイチイの木の下に石碑があります。

祭神

建御名方命

由緒

西天竜の開田に当たつて、入植した人々が奉祀した神社です。



諏訪社

## 三 恩徳寺

沢尻区のほぼ中央丘の上にあります。

### (一) 本尊 不動明王

由緒

恩徳寺は以前は薬師堂で、薬師如来を本尊とする寺で現在の庫裏のところにありました。寺伝によると、建永二年（一



恩徳寺全景

二〇七）真海法印の開創の祈祷寺で、春近郷（伊那市西春近表木）にあったものを、寺有の山林田畑などの財産をはじめ歴代住職の墓にいたる一切のものを、明治一七年（一八八四）に現在の地に移しました。

現在は「沢尻のお不動様」として近郷の人々から尊崇されています。本尊が不動明王

とされるまでには、次のような経過がありました。

明治維新まで、箕輪領のうち五千石の領主であった太田資智すけとちの奥方である梅崎は、維新の後不幸が続いていました。ある夜梅崎の夢枕に不動明王が現れ「成田不動明王を迎えまつれ」とお告げを受けました。これを聞いた沢尻村の人々は、梅崎のためにも、世の人々のためにも、成田不動を迎える決心をし堂を建てることにしました。近隣の村にも協力を呼びかけ、太田氏の寄進百円をもとに沢尻村の人々の献身的な奉仕と努力によって、明治二年（一八八九）現在の庫裏のある場所に本堂が完成しました。

## (二) 本尊以外の仏像

### 1 本尊不動明王（南箕輪村指定文化財）



本尊不動明王

不動明王は火焰光かえんこう背を背負い、巻髪けんぱつの弁髪べんぱつ、蓮の花を付け、憤怒の相をして、制せい多迦たか、矜羯羅こんがらの二童子を脇侍わきじとしています。千葉県成田山新勝寺ぎょうほの行場に安置されてきたものを、明治一七年（一八八

四）に迎えて祀られました。江戸中期の仏師、不動金兵衛の作と伝えられています。

### 2 不動明王二体（南箕輪村指定文化財）

明治三五年（一九〇二）伊那市西春近上嶋ほつしやういんの法性院ほつしやういんから一体、神子柴金剛院から法性院に移されたもの一体を、一緒に迎えたと伝えられています。作者は不明です。

### 3 薬師如来

恩徳寺の銀杏の木で雲海法師が刻んだと伝えられています。不動明王を迎えるまでは、本尊とされてきました。



薬師如来



不動明王（金剛院）



不動明王（法性院）

#### 4 行者三體

沢尻に古くからあった大峯講おおみねこうの人たちが、大和の大峯から迎えたものだろうと伝えられています。年代・作者とも不明です。



行者

(写真は三体の内の一体)

#### 5 十三仏

明治二八年(一八九五)伊那市西春近恩徳寺から迎えました。作者など不明です。



十三仏

#### 6 仁王像

昭和五三年(一九七八)建立



仁王像

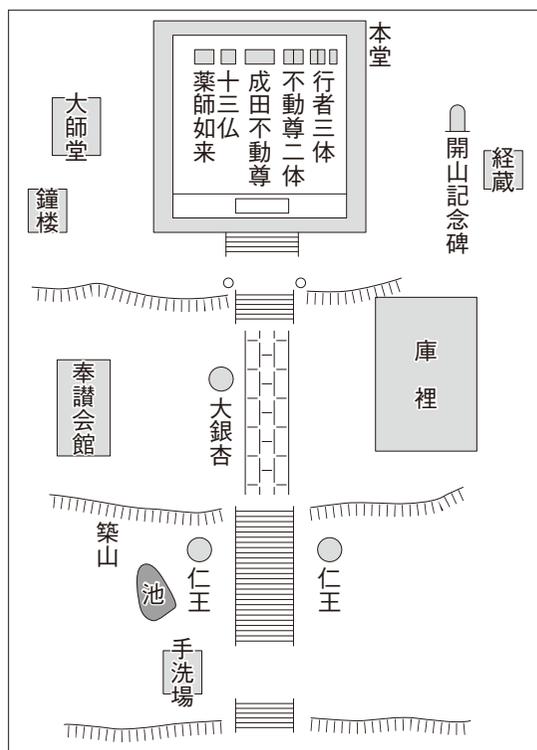
### (三) 堂宇

#### 1 本堂

昭和四年(一九二九)に新しく造られた手洗を左に、昭和五三年(一九七八)に作られた仁王像を仰いで石段を登ると、正面に本堂があります。本堂は「前方二面吹き出し」の建築で、唐破風の正面に雲の上を鶴が飛んでいる「兎毛通」があります。

柱は全部自然石の上に立ち、床から下は八角で床上是円くなっています。外陣の天井は格天井で柱の間が吹き通しになって外陣と内陣の間は格子窓になっています。

屋根の四隅は太い「二重隅尾極木」で、四隅の間には「二



恩徳寺平面図



本堂

重繁極木」、三斗の斗組の上に更に「花肘木」をのせて桁を受けています。四方の隅の柱や向拝柱に象と獅子の彫刻の木鼻が付いています。

二重虹梁の間には龍の彫刻があり、上の虹梁と輪極木や菖蒲棟の間には獅子のぼたんの彫刻を充填した見事なものです。

本堂建築の棟梁は、諏訪市湖南の大隅流の伊藤義範で、彫刻は立川流の流れをくむ木曾郡上松町の林作十の作です。伊那市長谷非持の伊藤助弥もこの建築に従事し、南・北・西隅の三箇所の木鼻はこの人の彫刻です。

## 2 大師堂(旧辻堂)

恩徳寺の宗派は真言宗智山派で、中央に本尊の大日如来を、西に宗祖の弘法大師を、東に中興の祖の興教大師を安置しています。

## 3 庫裏

平成一六年に、旧本堂の場所に新築しました。

## 4 経蔵

大般若六百巻および十六善神幅などを収めています。明治二八年(一八九五)建立されたものを今の場所に移しました。

## 5 鐘楼

昭和四八年(一九七三)建立

## 6 奉賛会館

昭和三二年(一九五七)建立 檀信徒の休憩所です。

## (四) 大銀杏(南箕輪村指定天然記念物)

推定樹齡三七〇年、

幹の周囲三・五尺、高さ二〇尺、地上三尺程で四方に枝分かれし茸状になっており、秋の黄葉は見事です。言い伝えによると、恩徳寺の前身薬師堂の時、境内の大銀杏を切り、本堂の薬師如来を刻んだと言われ、その切り株に生えたのが現在のものであるとのこと。



大銀杏

## 四 沢尻学校跡

沢尻学校は、明治六年（一八七三）六月二日創立の久保学校の支校、久保沢尻支校として発足しました。場所は恩徳寺（当時の薬師堂）の庫裏であり、唐沢金一郎氏が教員であったと言われています。古い沢尻耕地の図面によると、「三二四番、学校、三畝一六歩村扣（約三五〇平方丈）」とあります。明治十年（一八七七）四月九日学区改正により「沢尻学校」となりましたが、同年十二月二日今の伊那市伊那小学校との合併の相談がまとまったので廃校となりました。しかし、雪の深いときは本校から教員がきて、通学困難な児童の教育をする約束がありました。

それ以来沢尻の児童生徒は、行政区域の異なる伊那市の伊那小・中学校へ通学していましたが、平成八年に新設の小学校として南箕輪村立南部小学校が開校したので、同校と南箕輪中学校に通学するようになりました。

## 五 宮島氏館跡

宮島氏館跡は、恩徳寺を西に一〇〇mほどのところにあります。沢尻の字古屋敷にあつたと言われていますが、はつきりとは定まっていません。古絵図には「長者の井」「拜殿」「神殿」「的射場」などもあります。

『長野県町村誌』によると、関ヶ原の戦いの少し前、文禄初年（一五九二）までは宮島氏がこの地に邸宅を構え、里長と神職を兼ねていました。それよりずっと昔の文応年間（一二六〇～一二六一）には御射山社が再造営され、その式を執り行ったのが宮島氏でした。また羽広山王権現の棟札には、「宮島津盛」の名が記されています。これらから宮島氏は古くから箕輪郷の総社である御射山社の神職であり、他の社の神職も兼ねた実力者であつたことが推測されます。



宮島氏館跡（明治初年）

# 六碑

## (一) 成田山開山記念碑

昭和一六年（一九四二）建立

恩徳寺本堂の西に建っています。碑文には恩徳寺の由緒が書かれています。題額は太田資時の筆で、碑文は箕輪町木下の笠原政市の撰文により、片桐安司の筆です。建立は唐沢恵泉個人の志によったものです。



成田山開山記念碑

## (二) 庚申塚

日光社月光社の上り口にあります。

- (1) 庚申 年代不詳
- (2) 庚申 年代不詳
- (3) 庚申 大正九年（一九二〇）
- (4) 庚申 昭和五年（一九八〇）
- (5) 甲子 元治元年（一八六四）
- (6) 甲子 大正一三年（一九二四）
- (7) 甲子 昭和五九年（一九八四）

## (三) 水神

伊雑皇大神宮の右隣にあります。

水神 大正一三年（一九二四）春日



庚申碑



甲子碑



水神碑

(四) 供養塔

(1) 念佛若干遍供養碑 日光社月光社の南にあります。

文化三年(一八〇七)

(2) 大乘妙典一千部 日光社月光社の南にあります。

文政五年(一八二三)

(3) 念佛供養 大萱荒井

線と恩徳寺から

の道の交差点に

あります。

年代不詳



念佛供養



念佛若干遍・大乘妙典供養塔  
(左は馬頭観音)

(五) 「舊領主太田家分墓」碑(江戸時代箕輪領主)

年代不詳

日光社月光社から西に上がる道を進み、沢尻屯所から一〇  
〇段程行った所にあります。すぐ西には唐澤家の墓がま  
まっており、古老によると唐澤家の先々代が建てたこと  
ですが、いきさつは不明です。



領主太田家分墓

(六) 丁石

丁石とは伊那市坂下の辻を出発点に、伊那市西箕輪の羽広  
山仲仙寺(羽広観音)に参拝する道に、一丁(一〇九段)ごと  
に安置された高さ五〇センチほどの観音像のことです。

伊那市の小沢川の室渡場橋へつづく坂道は昔から「十丁目  
の坂」と呼ばれていますが、坂を上りきって沢尻に入ってい

く大萱荒井線沿いに、八つの丁石があります。(南箕輪村地籍内)

一五丁石は沢尻信号機の西の道路北側にあり、一七丁石・二〇丁石・二四丁石・二八丁石・三〇丁石・三二丁石・三四丁石(大萱信号機手道路南側)が建てられています。丁石には施主名や村の名前、丁番が彫られています。伊那市の上牧、小沢、羽広などに混じり、高遠の下山田や長谷の非持村、溝口村、黒河内村、そして今の沢尻の施主名も見られます。



丁石 (24丁石)

## 七 横井戸

### (一) 月見横井

宮島氏館跡の西にあります。この横井戸は大正時代に掘られたものと思われます。戸谷川右岸の小崖しょうがいに掘られた横井戸で、夏の濁水期かつすいには枯れてしまう戸谷川の代わりにこの水を使ったそうです。この水は伊那市小沢の月見松付近の水を引いてきているので、月見横井と呼ばれています。

他にも横井戸が幾つか掘られたようです。



月見横井

沢尻が水に乏しく苦労した一端が伺われます。

## 八 学校関係

### (一) 長野県上伊那農業高等学校

明治二八年（一八九五）伊那村（現伊那市狐島四一八三番地）に仮校舎を設けて開校し、正科・冬期科を置きました。翌年新校舎が落成し移転（現伊那市中央四六〇五番地―伊那警察署辺り）し、開校式が挙行されました。そして明治三二年（一八九九）郡立上伊那甲種農学校と改称されました。明治三七年（一九〇四）に県立移管し、長野県立上伊那甲種農学校と改称されました。更に明治四四年（一九一一）長野県立上伊那農業学校と改称され、昭和一〇年（一九三五）学則改正により上農寮に第一種（修業年限三年）を収容し塾風教育を創設しました。

昭和二三年（一九四八）長野県上伊那農業高



上伊那農業高等学校（校門付近）

等学校と改称、農業科、林業科を置きました。また昭和二五年（一九五〇）農業科に女子生徒が入学し、上農寮は経営農場（第二農場）と改称されました。

昭和四六年（一九七一）に南箕輪村から寄贈された土地に新校舎が起工され、昭和四九年（一九七四）新校舎へ移転しました。そして、昭和六三年（一九八八）には生物工学科が設置されました。

現在は、生産環境学科・園芸科学科・生物科学科・緑地創造科・生物生産科・生命探求科・アグリデザイン科・コミュニケーションデザイン科と多くの科があります。

明治二八年（一八九五）、上伊那郡立上伊那簡易農学校として開校して以来一二〇有余年の間、上伊那地区の農業の基幹校として、一万九千名を越える人材を社会に送り出しました。

### (二) 長野県上伊那高等学校 中の原農場（上農寮）

中の原農場は神子柴地籍にあります。農場の門柱から入って左にある碑文には、このように記されています。

「この農場は、塾風教育として全国に知られた農業実践教育の舞台となった地である。

時の学校長 村上明彦は、昭和初期の経済恐慌で疲弊していた農村の窮状を打開するため、青少年の強固な精神力を涵養し優れた農業自営者の養育を図った。理念に賛同した三町

村(伊那町・南箕輪村・西箕輪村)から広大な原野の寄贈を得て、上農寮塾風教育が創設された。

高学年は一ヶ年、全校生徒は適時、教師と共に宿泊して真摯に学んだ。

一九三五年(昭和十年)開墾開始

第一農家(正大家) 稲作主体

第二農家(明徳家) 果樹主体

第三農家(誠敬家) 養蚕主体

第四農家(極天家) 畜産主体

戦後この地は第二農場として当番の宿泊を併せて、農業教育の場として長く活用されている。

二〇〇二年(平成十四年)名称を旧に復して、中の原農場とした。

上伊那農業高等学校、並びに同窓会は、同校創立百十周年を記念してこの農場を整備し、学校の好意で愛称を村上記念農場とした。

二〇〇四年(平成十六年)十一月十三日

上農寮塾風教育は学校長の村上の手記によると、予想以上の成果を上げて、昭和一四年は入学志願者が二一〇名にもなりました。また、当時民間人の旧満州への移民が進みました。昭和一二年に日中戦争が開戦しました。大陸農業開発による食料の飛躍的増産と農民の指導啓発は戦力増強上重大な要務

と村上は考え、昭和一五年四月に学級増加を行い、第一種の第五学年に内地科・大陸科の二学級を編制しました。

中の原農場の門柱から入っていくとユリの木並木があり、更に進むと駐車場があります。その反対側には小屋が建てられ、その手前には上農高校創立一一〇周年と定時制創立五五周年を記念して平成一六年に建立された「寮歌の碑」が、そしてその奥に昭和四〇年に建立された村上明彦の胸像の碑があります。



村上明彦胸像



上農寮 入口



# 第九 大泉



## 一 大泉の由来

大泉という集落名が近くを流れる大泉川に由来しているのか、集落名から河川が大泉川という名称を得たかは文献上からは明らかではありません。大泉を尾泉と記した古文書があるといいますが、古い時代には当て字で地名を表記することは多くありましたので、尾泉という字も当て字の可能性は否定できません。

しかし、帯無川が尾水無川と記された文書があるといいますが、大泉川は尾泉川であったことも考えられます。「尾」を下流という解釈をすれば、下流に泉のある川の意でしょうか。そうすれば他の近隣の河川

(大清水川・小沢川・小黒川など)名が「お」で始まる事実の解釈にもなります。また、大泉の集落名は河川の名称に由来することになります。

大泉と「大」の字で記すのは和銅六年の「諸国郡郷名著好字令」以来全国的にしばしば行われてきた瑞祥地名の流れによる



下井頭首工

ものであり、大という好字をあてたものと思われます。永録年中(一五五八〜一五六九)の鹿祭りの古文書に大泉と書かれたものがあるというので、一六世紀には既に大泉という集落名を使っていたのでしよう。また、殿村八幡宮の古文書に「大和泉村」と記されたものがあります。最古のものは慶安二年(一六四九)と記されておりこれもまた「大」と「和」という好字による瑞祥地名表記であると思われる。

縄文時代、現在の中央自動車道周辺には人々が住んでいました。北高根

遺跡からは県宝となった釣手土器が見つかっています。大泉は大泉川の段丘北側に東西に長く発達した村であり、高根社がその中心であったといわれています。

天文年中(一五三二〜一五五四)に福与城の戦で活躍した大泉上総(武士が本姓の他、地名を名乗ることは往々にしてありました。)は、大泉に館を構えていました。

慶長一三年(一六〇八)、春日街道ができると、宿場として各戸に八間の町割をして南北に長い村となりました。塞ノ



殿村八幡宮文書

神としての役割を成している立石（庚申塔）や道祖神の位置、「中村」や「市場（通常村の端に市場ができた）」という小字の位置等の事実から春日街道開鑿時は、村の規模は、大和泉神社（近くに村南の道祖神がある）から春日街道旧道と県道北殿・吹上線の交差する四つ角までであったと思われる。勝光寺が宝堂院跡から現在大泉第二公民館のある地へ移り、その後、春日街道に沿って更に南北に長い村に発展しました。唐松公園にある道祖神は安政七年（一八六〇）建立が記されています。

慶安元年（一六四八）には大泉新田が村として独立しました。また、慶安二年（一六四九）には北殿との合宿として伊那街道へ問屋一戸、伝馬六戸が移っています。

大泉川の扇状地扇央部にあるため、古来、水を得るに苦労した村です。稲作ができる場所は小字「田代（大和泉神社前旧春日街道の西付近一带）」などの場所に限られていて畑作が中心でした。大泉川の上流から長い水路を引き、家の敷地内に井戸を掘り、段丘を利用して横井戸を探り、生活・耕作をしてきました。大泉新田の上部付近（下井開鑿当時大泉新田は未開拓・現在の吹上橋よりやや上流）からの水路である下井は戦国時代にはできていたといわれています。上流の吹上や大泉新田との水争いは西天竜用水路が完成するまでは絶えませんでした。昭和三年（一九二八）の西天竜用水路竣工、

昭和十年の開田竣工以降の時代は、上手田の用水路をコンクリート化し、上下水道が完備されて生活用水も灌漑用水も豊かに利用できるようになりました。

明治七年（一八七四）に世帯数八十戸四六〇人だった戸数・人口は平成三十年（二〇一八）には五一八戸、一四九一人になりました。

## 二 神社・仏閣

### (一) 大和泉神社

大和泉神社は大泉区の南方にあり、大泉川の段丘の上に位置し、春日街道旧道に面しています。諏訪大明神社本殿と鹿頭祭及び瘡守稲荷神社本殿は、村の指定文化財になっています。

#### 祭神

建御名方命（諏訪大明神社）

伊弉冉尊（高根神社）

速玉雄命（高根神社）

事解男命（高根神社）

#### 由緒

明治四〇年（一九〇七）二月二日、諏訪大明神社と高

根神社等を合祀して、「大和泉神社」と改称しました。

諏訪大明神社の創立は明らかではありませんが、御朱印高五斗の社領を持っていたので、江戸時代のはじめにはすでに相当の社格を持っていたと思われまます。さらにさかのぼって、戦国時代末期の永禄年中（一五五八〜一六六九）には鹿祭りが始まっていることからみて、大泉の諏訪大明神社は箕輪の惣社南宮神社に属する神社の中でもこの頃既に有力な神社であったと思われます。棟札によると明和六年（一七六九）に建て替えられています。文政九年（一八二六）焼失したため、文政一二年（一八二九）に再建されて、今日に至っています。

春日街道から石段を上って境内に入ると、高い常夜灯が左右に一基ずつ立っています。石の御手洗が神社に向かって右側にあります。入り口に近くところに控柱を持つ両部鳥居が立つ



大和泉神社 (平成30年)



大和泉神社 (昭和50年頃)



大和泉神社 (昭和初年)

ています。銅板で覆った木製で真新しい扁額には「大和泉神社」と揮毫されています。近年更新したのですが、古い扁額には「諏訪大明神」と刻まれていました。その奥に石製の鳥居があります。明神鳥居です。さらに常夜灯が左右に一基ずつ据えられています。「天保十四年（一八四三）八月奉納」と記されています。なぜ鳥居が二基あるのかは不明です。「遷座合祀したとき鳥居も移設した」「鳥居を新調したとき古い鳥居を壊さずそのままにした」などが考えられます。



諏訪大明神社本殿

諏訪大明神社本殿は、文政一一年（一八二八）七月諏訪高木村の立川流宮大工小口直四郎（棟札には小口求四郎）が請負の

一札を入れ、翌一二年九月に竣工しています立川流の特徴を顕著に形にした建築様式上も、美術史上も貴重な社屋です。拝殿は入母屋造り正面唐破風瓦葺（昭和の屋根修理により現在は銅板葺）で虹梁と桁の間に龍の彫り物、木鼻には象や獅子の彫刻が刻まれています。正面や瓦、大棟には「丸に諏訪梶」の紋が施されています。

本殿は、覆屋の中に安置されています。覆屋の大棟には、

「諏訪櫛」の紋があり、これは諏訪大社上社、南宮神社の紋とほぼ同じです（若干のデザイン的な違いはありますが、根の部分の本数は四本です）。

本殿は、六尺の間社で流れ造り正面唐破風です。向拝柱は面とり角柱、頭貫は虹梁様、木鼻は象です。正面虹梁と桁との間には鶴に仙人の彫刻

があり、破風の下の軒の桁も虹梁様彫刻があり、中心の棟との間にも彫刻があります。卯の毛どおしは龍で、母屋と向拝の虹梁も龍を彫刻したえび虹梁です。正面長押と台輪の上にも彫りものを置き蛙股があり、柱の上の組物は三手先斗拱で軒支輪も設けられ手の込んだものです。正面及び両側面に縁をめぐらし、脇障子にも彫刻が施されています。

の組物は三手先斗拱で軒支輪も設けられ手の込んだものです。正面及び両側面に縁をめぐらし、脇障子にも彫刻が施されています。



熊野社本殿



諏訪大明神社本殿脇障子の彫刻  
(竹林の七賢)

向拝の前は浜縁になっていて五段の木階、擬宝珠勾欄を設けています。背面は横板張り、両側面には七賢人の彫刻が施されています。

右側にある熊野社本殿は高根社から遷座したものです。一間社流れ造りの階段のない見世棚造りです。柱は全部角柱で、貫は絵様くりがた、妻は大瓶束です。

### 鹿祭り(村指定文化財)

大和泉神社境内に勢揃いした稚児が、行列をつくり鹿頭の冠り物をつけ太鼓に合わせて左回りに三回、廻って奉納する祭りです。お鹿祭り或いは鹿頭祭と呼んでいます。古来より天竜川西の集落の鹿頭は、大泉で合流し諏訪大明神(大和泉神社)に奉納、その後南宮神社で奉納するという形をとってきました。

この祭の起源は明確ではないのですが、永禄年中(一五五八〜一六六九)に大干ばつがあり、雨乞いをしたところ大願かなったので御礼に鹿頭七五を出したのが始まりであるといま



鹿祭り(平成29年)

す。また、諏訪では年々御射山<sup>みさやま</sup>で明神の大祭を行っています。近在では三日町にその例式が残っています。これははじめ西山の御射山平で行われたものでした。鹿祭りはこの御射山神事の残ったものかともいわれています。七五という数字は諏訪神社の猪鹿七五をまな板にのせて供えるという御頭祭<sup>おんとうさい</sup>の数とも一致しています。起源は御射山神事或いは御頭祭の可能性はあると思われます。

南宮神社は箕輪郷一万石の中心的な社であつて箕輪二七箇村民の信仰の対象でありました。子どもの健全な成長や雨の恵みによる豊穰な農作物は民の切実な祈りの表れであろうと思われれます。

## (二) 境内社

### 1 瘡守稻荷<sup>かさもり</sup>(村指定文化財)

諏訪大明神社の北に西面して祀られています。

祭神

豊宇気比売命<sup>とよけひめのみこと</sup>

由緒

もとは春日街道の西側(二〇〇四番の口)にありました。明治一二年(一八七九)三月現在地へ引宮しました。天明年中(一七八一〜一七八八)に飛騨国の茂助という人が江戸の在<sup>やなか</sup>、谷中の笠森稻荷の神主方へ奉公し、国許へ帰る途中大泉に来て番人・下僕を勤めるようになりました。その時、この

稻荷社の分霊をここに祀ったということ事です。

現在の本殿は三度目の改築で、原直八によるものです。覆屋の中に安

置されているので、外からはよく見えませんが唐破風に千鳥破風の手の込んだ細工が施された社殿です。

### 2 天満宮

諏訪大明神社の南の祠に西向きに祀られています。

祭神 菅原道真

### 3 蚕玉社

諏訪大明神社の北の祠に西向きに祀られています。原此右衛門作の石像の蚕玉神です。なお、大泉の市場の蚕玉神も昭和五〇年(一九七五)に合祀されました。

### 4 太子様

諏訪大明神社境内の北側の祠に南に向かって祀られています。建立不詳。昭和四七年(一九七二)春日街道バイパス開鑿<sup>せんくわう</sup>によって遷宮しました。



瘡守稻荷本殿

### (三) 高根社・山の神

#### 1 高根社

大泉集落の西方、高根信号機の南東に高根社跡があります。現在は祠と昭和十二年（一九三七）建立の熊野三社跡の碑があります。旧来の高根社は明治四〇年（一九〇七）に大和泉神社に合祀されました。中央道の西約三〇分の地点、大泉・吹上線の南側に高根神社の碑があります。付近の田の中から出たものであるそうですが、この位置にある理由等は分かりません。

#### 2 山の神

荒井坂東、大泉川南の山林中に祀られています。御嶽神社碑・清澤<sup>せいざい</sup>霊神<sup>れいじん</sup>碑があります。

大泉北部<sup>あき</sup>字北原の神社林の中にも山の神がいましたが荒



高根社跡碑



高根社（熊野三社）跡

井坂に遷座されました。近年ですがいつ行われたかは分かりません。

現在荒井坂の社は「ふるやまのかみ」と呼ばれています。社殿はありません。近くに多くの馬頭観世音の碑が安置されています。

#### (四) 大泉山勝光寺

西部保育園の東にあります。

#### 本尊

十一面観世音菩薩

村指定文化財です。

十一面観世音菩薩といわれてきましたが、手の形へ合掌と宝珠または鉢の持仏は千手観世音菩薩です。十一面観世音菩薩なら通常<sup>にひ</sup>二臂<sup>すいびょう</sup>で水瓶<sup>よがんいん</sup>と与願印<sup>よがんいん</sup>などでなくてはなりません。頭上に十一面を有するのは十一面観世音菩薩も千手観世音菩薩も該当します。しかし、千手を付けていた痕跡は認められません。仏像の手の形や持仏は功德を示し非常に大切です。「千手観世音菩薩立像」或いは十一面菩薩の功德を残した「十一面千手観世音菩薩立像」ではないかと考えられます。

#### 由緒

勝光寺は古くは大泉の北西、字宝堂院の地にありましたが、春日街道が開通したとき慶長一三年（一六〇八）、春日街道沿いに移されたといわれています。昭和三〇年（一九五五）



勝光寺

四月、西部保育園がこの寺の場所に開設されましたので約三〇分ほど西の場所に移され現在に至っています。建物の向きは変わっていませんが、寺名「勝光寺」と記した板の位置（寺としての向き）は、東向きから南向きに変わっていると思われます。一説に、本尊は平安時代前期天台座主であった慈覚大師の經が岳修行時の作であり、羽広仲仙寺、上古田正全寺と姉妹像であるといえます。しかし、観察によれば羽広仲仙寺の像とは仏師が異なると思われます。また、大泉上総はこの仏像に強い信心を寄せたという言い伝えがあります。江戸時代の民間仏師の作という説もありますが、台座裏の宝永四年（一七



勝光寺本尊

〇七）の「腐朽による修理」の記録から考えて、大泉上総が活躍した天文年間（一五三二～一五五五）には存在していたと考

えられます。仏像の腐朽による修理が必要になるには少なくとも百年以上の星霜を要すると考えられるからです。この時の修理は本尊ばかりでなく、堂宇の修理も同時に行っています。

昭和一三年春までは、堂守の僧侶がいましたが、以降、無住となり現在に至っています。

現在、高齢者によって春の彼岸には彼岸会を行って造花をしたり、五月八日（月遅れ）には灌佛会をし数珠回しをし甘茶を配ったりしています。

堂宇の東北部の外部から見える格子戸の中に十王像があります。地域民間信仰の信心の深さが偲べれます。昭和五四年（一九七九）には堂が大修理されました。

什物

勝光寺什物には本尊の他、釈迦涅槃図一幅・四天王像二体・仁王像一体・伏鉦一・大数珠一などがあります。涅槃図は、掛け軸の裏に『安永六歳 丁酉 三月吉日 信濃 伊奈郡 大泉村 観音堂 什物 発願主 庵主 玄門 施主 観音講中』と記されています。安永六年は、一七七七年であり、



勝光寺十王像



勝光寺・四天王

勝光寺釈迦涅槃図

伏鉦は、裏に『天保一〇年 亥年 二月 西村和泉守作』と記されています。天保一〇年は、一八四〇年です。江戸の神田鍛冶町で作られ

近郷の寺院の涅槃図（明治以降のものが多い）と比較して大変古いものであるといえます。

四天王像二体は手や持ち物が欠けてしまっているのですが、四天王の誰であるかはわかりません。しかし、正しく修業を積んだ仏師の作であることは像の姿や彩色の細かさからわかります。

たものと考えられます。大数珠や寒念仏塔・念仏供養塔の存在などと併せて考えると、念仏が盛んな時代があったと思われる。

なお、春日街道西側勝光寺が現在地に移転する前の地（大泉第二公民館）に「郷藏敷」という字名の所があります。こ

こは大泉の郷藏のあった所でもあります。境内には以下の塔碑があります。このうち廻国供養塔の一基（写真・勝光寺石仏群Ⅱ・一番右奥）には元禄一二年（一六九九）建立と記されています。南箕輪村内では最も古い廻国供養塔であるといわれています。

境内の石仏

- 五輪塔（部分） 一基 権理塚から移したといわれています。
- 馬頭観音像 五〇体 ○馬頭観音（文字）碑 二二基
- 聖観音像 六体 ○如意輪観音像 二体
- 地藏像 四体 ○二十三夜塔 一基
- 南無阿弥陀佛碑 一基 ○寒念佛碑 一基
- 念佛供養塔 二基 ○廻国供養塔 三基
- 観音講中碑 一基 ○無縫塔 七基
- 墓碑 一三基 ○秋葉神社碑 一基



勝光寺石仏群 I



勝光寺石仏群 II



五輪塔 (部分)

### 三 大泉学校

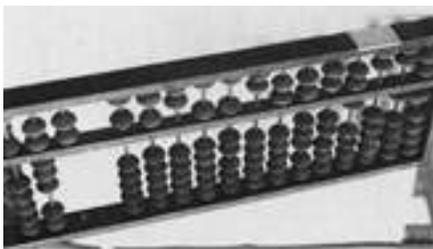
大泉学校は、大泉村の中央、屋号中西の北側にありました。児童数は明治九年（一八七六）には男四二人、女七人でした。

#### 沿革

大泉では明治五年九月二四日から、久保南割（塩ノ井）、北殿、南殿と相談して北殿の松林寺で学校をはじめました。明治五年（一八七二）八月二日の学制頒布をうけて、明治六年一〇月一五日、北殿南殿と大泉で明治学校を設立して教育が行われました。

しかし、遠くて幼童の通学に不便であり雪道の困難もあったので、大泉学校を建てて明治八年四月二五日から独立開校しました。明治一〇年には合併を県から勧められています。明治一一年七月一日「南箕輪学校」が現在の南箕輪小学校のある字桜ヶ丘に創立され、大泉学校は廃止されました。

しかし、降雪時等の幼童の歩行通学が困難であるとの状況



大泉学校使用のそろばん

を踏まえ、大泉に出張所をおき教員一名を配置しこの問題に  
対処しました。その後、明治一六年にも大泉の総代は独立校  
設置の願いを県に出したり、県の許可なしに学校を始めよう  
としたりしました。明治一九年、田畑・神子柴・久保も合併  
した南箕輪学校になって以降も大泉には派出所が置かれまし  
た。当時の教育にかける期待の大きさと熱意の高さをうかが  
い知ることができます。

## 四 古跡

### (一) 高根遺跡

大泉高根、大泉川北岸段丘上にあ  
ります。

昭和四七年一〇月から一二月にか  
けて、中央道開鑿に関わり緊急発掘  
を行いました。続いて、大型農道の  
開鑿により緊急発掘調査が行われま  
した。これらの調査によってこの辺  
りは古代の集落址として重要な遺跡  
があることが確認されました。

南高根遺跡からは、平安時代の住



県宝釣手土器

居址一・土壙一が発掘されました。また、縄文時代早期・前  
期・中期・晩期の土器及び平安時代の陶器が出てきました。  
縄文時代中期の土器が最も多数発見されました。

北高根A遺跡からは縄文前期の住居址二・縄文中期住居址  
三・弥生時代住居址五・柱穴四・溝及び土壙三七、それに縄  
文中期土器が発掘されました。

北高根B遺跡からは、土壙五・竪穴三・縄文期の土器多数  
と古銭や一一世紀後半の美濃産灰釉陶器などが発掘されまし  
た。この遺跡は東西一五〇坪、南北一〇〇坪に及ぶ地域に存  
在しているものと考えられます。県宝となった釣手土器二点  
は北高根遺跡から出土したものです。

また、ここに熊野三社址のあるところから推察すると、平  
安末期から鎌倉時代には、旧大泉集落はこの神社を氏神とし  
ていたと考えられます。

### (二) 大泉氏の館址

大泉の南端、大泉川の北の低地を字田代といいます。この  
辺りに大泉上総（本姓は原氏と伝えられる）の館があったと  
いわれています。ここは、近年まで湧水があり水の便の良い  
ところでした。中世の武家屋敷の常識からすると、防御機能  
の高い高所に屋敷を構えるのが普通でした。このことを考え  
ると、大泉川の段丘上にも館を構え緊急時に対応し、普段は  
水の便の良い田代に居住していたのかも知れません。

天文一三年（一五四四）の武田氏と藤澤氏の福与城の戦いに大泉上総は、倉田氏、有賀氏、清水氏、日戸氏などと共に伊那衆・箕輪衆として参加しています。この戦いは小笠原氏の援護もあり大きな戦でした。大泉上総は弓の名手でこの戦いで活躍し四天王のひとりとして『伊那温知集』『伊那志略』などの古文書に名を挙げられています。

なお、天文一四年六月、和睦が成立し藤澤頼親は武田一門衆である穴山信友の配下となりました。その後、藤澤頼親は、三好長慶に仕えるなど転々しますが、天正一〇年（一五八二）、徳川氏と結んだ保科氏によって急襲され滅ぼされました。

天文一四年の戦いで福与城は敗戦落城したという記述が散見されますが、この戦いでは、和睦条件は藤澤氏に厳しいものでしたが、和睦が成立しています。西上を目指す強力な武田軍と戦い和睦を持ち込んだ大泉上総をはじめとする伊那衆・箕輪衆の活躍や結末は特筆すべきであろうと考えます。

### (三) 一里塚址

大泉の北、公園或いは唐松公園と呼ばれる地に一里塚があったと伝えられ標柱が立っています。正保年間（一六四四―一六四七）に作成された「信州伊那郡之絵図（脇坂絵図）」には、大泉の北端に一里塚の印がつけられています。ここには昭和二七年（一九五二）頃まで唐松の古木が聳え立っていました。

ました。古老の話では、春日街道がつくられたとき、間縄けんなわの古くなったものを埋めてそこへ唐松を植えたといえます。

ここには一里塚の他、道祖神・庚申塚・甲子塔・清水翁頌徳碑などがあります。設置された年月は不明なものが多いのですが、庚申塚碑の最古のものは正徳二年（一七二二）です。この時にはここが大泉の村の北端になっていたのでしょう。



一里塚址



庚申塚碑

### (四) 蛇塚

大泉神社の東方約五〇〇呎、大泉川の段丘を上った道と交わるところに経塚がありました。その西方約一〇〇呎の位置に蛇塚跡があります。現在は田の畦に標柱が立ててありません。

天正年間（一五七三―一五九一）に時の領主保科弾正が、

家臣の井澤某なにかしに命じて、大蛇を退治して埋めたところと伝えられています。天正一〇年は保科氏が藤澤氏を滅ぼした年であり、近くに長慶塚は藤澤氏が三好長慶をしの偲んで作ったといわれています。いずれにしても藤澤氏にしの関わる塚が近くにあることとなります。歴史的な関連があるのかも知れません。

また、この辺りは、現在も蛇が多く観察されます。蛇の棲息に適した自然環境的条件があるのかも知れません。

## (五) 立石

大泉の中央である字市場に立石があります。「たていし」と呼ばれています。道路拡張や消防分団の屯所の移動等に伴い何回か移転されましたが、古来よりこの四つ辻の南側付近にありました。今は、旧春日街道の西側に東面して立っています。表面は良く読めない様な状態になっていますが、近年、「奉供養青面金剛」「宝永八辛卯年おと(一七二一)二月大泉村



市場立石

中」と書かれています。傍らに道祖神もありました。この辺りは昔宿駅がありました。火の見櫓のある広場は

慶安二年(一六四九)、北殿との合宿となった伊那街道に転じる前の屋号角屋のあった所です。

## 五 道路

大泉は、天竜川西の段丘上のほぼ中央、大泉川扇状地の扇部に位置するので、幾つかの道路が交差する交通の要衝ようしゅうでした。木下方面、羽広・木曾方面、沢尻・小出方面、大泉新田・吹上方面、北殿方面、南殿方面等々への道は大泉經由通じています。



道標



市場道祖神

## (一) 道標

### 1 道標一

かない道と唐松公園の西方約一五〇呎の交差点塩ノ井・北殿方面と吹上・中曽根方面を結ぶ道路と木下と羽広方面を結ぶ道路の交差点にあります。「昭和一二年建立」と書かれています。

### 2 道標二

北殿と吹上を結ぶ道路と大芝・荒井坂方面を結ぶ道路の分岐点にあります。「昭和一二年建立」と書かれています。

## (二) 春日街道

春日街道は、小笠原秀政の命により、奉行春日淡路守により開鑿されました。慶長六年（一六〇一）着手、慶長一三年（一六〇八）頃の竣工です。一説にこの春日街道は、重要な



信州伊奈郡脇坂絵図（部分）

古代官道であった「東山道」を改修したものであるといえます。伊那市山本以北の東山道のルートは三説ほどありますが、春日街道ルートは最も可能性が高いといわれています。現在の大泉の集落の

形は、春日街道の宿がここに置かれたときに八間の町割等、計画的に家屋を配置したものが原型となっています。

近年高度経済成長に伴い家用自動車での移動が中心になりました。国道一五三号線の自動車の往来が激しくなり、旧春日街道の拡幅舗装整備の需要が高まりました。大泉区内の春日街道は道路沿いの住宅も密であり拡幅は容易ではないことから、昭和四七年（一九七二）区内の東側に春日街道バイパスが開鑿されました。

以降、久保・北原方面への住居家屋の新築が著しくさらに北方へも集落が長くなりつつあります。

## (三) かない道

大泉の北東方面から南西方面に斜めに通じる道路。北東方

面は屋号紙屋の北東、西天竜用水路の東側は西天耕地整理のためわかりませんが、方向的に考えて久保の箕輪坂に通じるのではないかと思われます。南西方面は大泉川の渡河位置は分かるのですが、大芝の開墾や西部開発の耕地整理により大泉川南の段丘上が不明です。しかし、方角と古来の集落等を検討すれば



かない道（中村わかされ付近）

羽広方面に向かってのことがかかります。羽広には「かねえば（かないば）」と呼ばれる場所（みはらしファーム付近）があり、伊那市平澤で出た砂鉄（鉄は鐵ともいう）を農具に鑄造したといえます（一説に仲仙寺の鐘を鑄て失敗したといえます）。この道はそこに通じる道であり、さらには代官所のある木下と木曾福島を結ぶ木曾道であったと考えられます（古来道は通じている先の名前を街道につけました）。「かねえば道」である「かない道」は「鐵鑄道」ではないかと思われま

## 六 碑

### (一) 庚申塚など

#### 1 市場の碑

前述の大泉市場の四つ辻にある立石は庚申塚の碑です。

この他に屋号榊屋（現在立石のある隣り）の西南に

道祖神

廻国巡礼塔

白衣観世音碑

大日本神社仏閣□碑

があります。

#### 2 唐松公園の一里塚周辺の碑など

○奉供養庚申塔 正徳二（一七二二）年壬辰二月吉日

願主 大泉中

（上に日月、下に三猿の像があります。）

○庚申 寛政十二年（一八〇〇）

○庚申 安政七年（一八六〇）

○庚申 大正九年三月（一九二〇）

○庚申 昭和五五年三月（一九八〇）

○庚申（年号なし）

※唐松公園の一里塚周辺にはこの他次の碑があります。

○一里塚址碑・一里塚説明の碑

○甲子 大正十三年（一九二四）

○甲子 大正十三年

（一九二四）二月 大泉中

○念仏塔 庚申七月

○念仏供養 寛延三年

（二七五〇）辰十二月

○寒念仏 宝曆十年

（二七六〇）辰三月

○道祖神（次項に再掲）

○馬頭観世音

○馬頭□□ 明治□□午三月



甲子塔一里塚跡

○馬頭観音像 □化十六年二月

○地神 年月不記

○清水重賢翁碑

清水翁は 屋号

中西の人で農蚕業をしながら学問をしました。近郷から教えを請ひ学びに来る人が多かったといひます。明治三八年(一九〇五)門弟によりこの碑が建てられました。

## (二) 道祖神

1. 大泉中央の字市場の立石の傍

原 周□□妻

2. 大泉中央の字市場屋号神屋の宅地西南

(古老の話では神屋の西北より移動しているといひます。)

□□十二巳七月

願主辰吉



田代道祖神



清水重賢翁碑

3. 現在は老人集会所の敷地内南西の隅・・・『南箕輪の史跡』には「大和泉神社西南の辻にある」と記されています。古老の話では大和泉神社北西の角の旧春日街道を挟んで西の辺りにあったと言ひます。いずれにせよ、ガードレールの設置或いは大泉老人集会所施設の新築などによつて移されたものかと考えられます。

施主 原信一

4. 唐松公園の一里塚付近にあります。

安政七庚申年(一八六〇) 願主 未年男

## (三) その他の碑

1. 田代の大新横井戸のところに石碑の水神が祀つてあり、その横に「奥山半僧大権現」の碑、馬頭観世音の碑、巳□□(コンクリートに埋もれて判読不明)の碑があります。

2. 屋号毛利の前に、道路に面して合掌の二臂と後ろに四臂(商売繁盛をかなえるという不空縹索観音か)の石仏及び風化が著しく不明の石仏の計二体があります。

3. 大泉第二公民館の東側に自然石に文字を彫つた石碑が三基あります。廻国供養塔と思われるものが二基あります。一基は風化が著しく読めません。

4. かない道の中村わかされ(字中村方面への用水の分岐点)付近など村内のあちらこちらに馬頭観世音の碑が多数あります。

#### (四) 開墾の碑

大泉の北西、西天竜用水路より約一〇〇以西の林檎畑にあります。

西天竜用水路開墾により広大な土地が水田として生まれ変わりました。しかし、畑の必要性、水の供給等を考慮して西天竜用水路の更に西の山林をも開拓開墾しました。これはその記念碑です。

碑面 開墾之碑 耕地課長 穂坂申彦

側面 右 大泉耕地整理地区

左 昭和十年十一月 石工出羽澤為十郎

## 七 井堰・横井戸

### (一) 下井



下井

現在の吹上大橋西約二十メートルに頭首工とうしゅこうがあり、大泉川から取水している用水路です。大泉新田の東で上井うわいと合流しています。大泉で開墾した水路の中では最も

古い水路で、戦国時代には存在していたといわれています。現在はコンクリートU字溝によって水量が減らない工夫がされています。

### (二) 上井

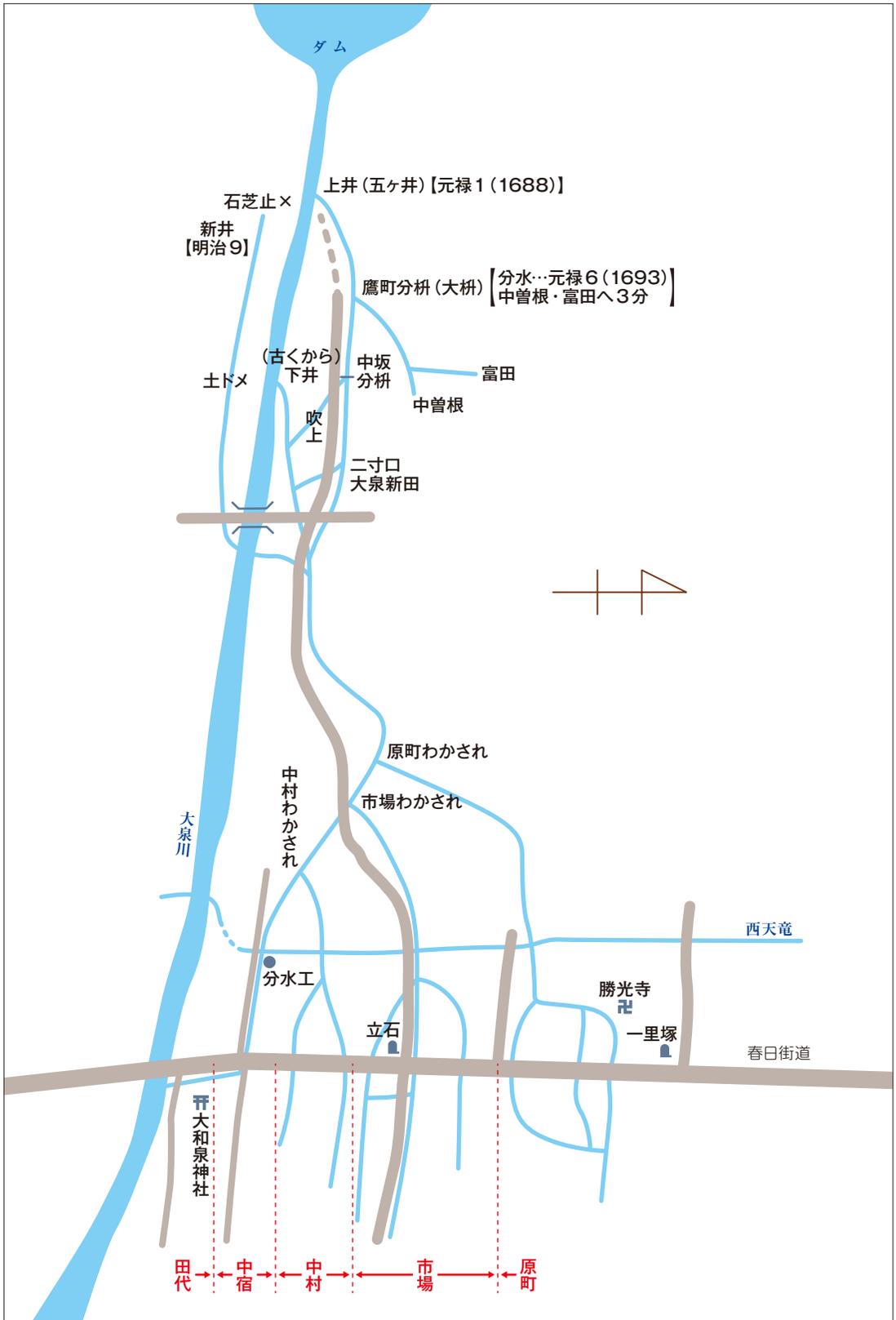
大泉所山ダムの下から取水して吹上・大泉新田を通り大泉に達する井堰いせきで五箇井ごかんせい(大泉・富田・中曽根・吹上・大泉新田)とも呼ばれています。西天竜用水路が完備した現在も上手田わでだ(大泉の集落の西側の耕作地)はこの水路の水が主となっています。

大泉村では、元禄元辰年(一六八八)、時の領主板倉頼母守に願い出て、井の許可を取ることができました。しかし、大泉村の人力だけでは水を引くことが困難であるので領内他の四箇村から人足を出してもらって掘った井です。

途中、元禄三年(一六九〇)、富田と中曽根からこの井筋の水を分水して欲しいと申し込みがありました。大泉村にとっては貴重な水ですので、拒否したのですが、領主からの命があり、やむなく三分の水を富田・中曽根に分け与えることと



中坂分枿



大泉の用水

なりました。鷹町分柵たかまちぶんさく（大柵ともいう）がそれです。その時は吹上・大泉新田は井端で生活用水を汲み取ることしか許されていませんでしたが、後に訴訟などを頻繁ひんぱんに起こし、中坂分柵（吹上）や二寸口（大泉新田）などの分水口が設けられるようになりました。

昔の記録には、ほとんど毎年のように井筋の決壊や修理が記されています。先人が力を出し合って守ってきた井です。

### (三) 新井しんい

上井・下井の水を以てしても、大泉の水の需要を十分に満たすことはできませんでした。そこで、明治になって、大泉所谷の南側（ひかげ）の水を大泉まで引くことを願い出しました。下流の地域の反対を解決し、明治八年この水路が完成し新井と名づけられました。

大泉川の四ノ沢、三ノ沢、二ノ沢、一ノ沢の水、いわゆるひかげの水を岩石だらけの急斜面に井堰を築いて引いてくることは困難な大事業でありました。水量の多い四ノ沢からは上下二箇所から取水しています。

明治一六年の大芝原分割に



新井跡

際して、この井敷のべ三二九二坪（一一〇アール）を特売してもらい取得しました。これが平地分でいわゆる「二間幅」といわれている土地です。更に、その奥の山の部分は大正五年大泉所の分割の時に、井堰保全地として上下二〇間（三六畝）幅、のべ一八町七反九畝五歩（一八七九アール）を特売してもらっています。

大泉所で取水された新井は、二間幅を下り、大泉川を樋で渡り生活用水として活用されました。後、井の一部分は大泉川を渡さず大芝林を東へ流し荒井坂まで通じていたといいます。荒井坂あらいざかは、新井坂しんいざかであったと思われる。大泉川を渡す樋は大水の度に流れてその都度修理を要しました。

西天竜水路が開鑿され、新井は井堰としての役目を終えました。しかし、昭和二年、入植当時の大芝の人々の生活・農業用水としてこの水は活用されました。また、昭和三年、その地下に上水道管が埋設されました。この水道管により大泉ばかりでなく南箕輪村は平成四年（一九九二）一月に水道用水企業団の上水道ができるまでの長い間、豊かな生活用水を得ることができました。現在、大芝湖の水はこの水を使っています。

### (四) 横井戸

大泉は、大泉川の扇状地のほぼ中央部分にあるため、川の水は伏流水となってしまうため水を手に入れるのに様々な工

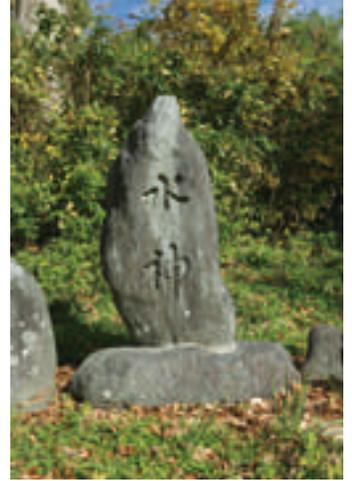
夫・努力をしてきました。横井戸はその一つで、伏流している地下水を段丘のような高低差のある地形を使って掘り出したものです。明治以降の工作物ですが、横穴などは崩落によりもはや不明となつているものもあり、詳細はわかりませんが次の場所の横井戸は現在確認できています。

### 1 大新横井戸

大和泉神社の西・字田代にありました。耕作用水の溜め池としてかつてあったという田代池の水源です。水神が祀つてあります。現在は湧水していません。



西村横井戸



大新横井戸の水神

### 2 西村横井戸

大芝・吹上への追分になつている場所の東側、県道吹上線の南側、道下に湧水のように円筒コンクリート管から

流れ出ています。石碑の水神が祀つてあります。

### 3 カネ中（東垣外）の横井戸跡

村道五号線の南側・四阿の設置場所（南箕輪小中学校の西方約1キロ<sup>あき</sup>・字東垣外）石碑があり、いわれ等が書かれています。現在湧水はありません。

### 4 ムクリ横井戸

大泉集落の西北、南箕輪村一八〇番地、字ムクリにあります。コンクリート製の階段付きの水枡があります。雨がほとんど少量の水が流れています。



## 一 南原の由来

当地域一帯は、昔「中野原」と呼ばれていました。入会いりあひ秣野まきぎの（「全村・由来」の項の「注」を参照）で、今の南箕輪村の人々・伊那市の西箕輪・御園・山寺・伊那部・小沢・狐島の人々が共同で利用していた原野でした。明治以後分割され、所有者が決まりました。

昭和二〇年（一九四五）太平洋戦争が終わると、外地からの帰還者きかんしや・職を失った人々・住む所を失った人々の生活場所を探すこと、食糧不足の解消かいしょうが急務となりました。そこで昭和二〇年一月、国は「緊急開拓事業実施要綱」を策定しました。開墾かんた・干拓かんたにより入植帰農させようと計画しました。北原・大芝原・中野原は、その適地として知事指定の対象になりました。そして、入植開墾事業が始められました。

中野原には、昭和二二年春から入植が始まりました。地元帰農組合（沢尻の人達）、岡谷帰農組合（岡谷へ疎開そかいして来ていた人々等）、開拓増産隊（長野県により募集された人達）、西原帰農組合（西箕輪村の人達）の人々が入植し開墾が進められました。昭和二二年には地元帰農組合、岡谷帰農組合、開拓増産隊が合体して南原開拓帰農組合が結成されました。総会で組合の名称が問題になった時、南箕輪村の南端だ

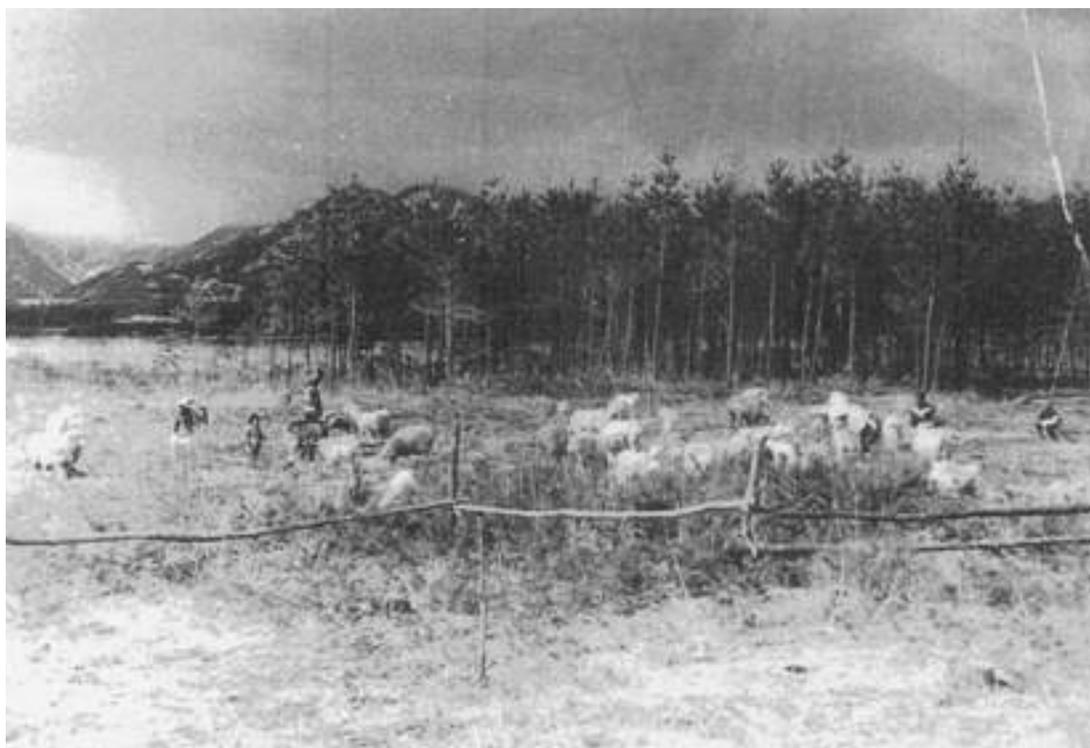
から「南原」と名付けました。

中野原の開拓はこれ以後、「南原開拓帰農組合」と「西原開拓帰農組合」の二組織で進められました。昭和二二年一つの区となることになり、「南原区」と名乗り両組織が属することになりました。

組合の名称は、昭和二三年には「開拓農事実行組合」となり、昭和二四年には「開拓農業協同組合」と変わっていきました。そして、昭和四九年（一九七四）には開拓事業も一応終わったということで、「開拓農業組合」が解散されました。この頃には、地区内の道路・水道・電気・公共施設等の整備がほぼ整っていました。

この地を開拓し現在に至るまでには、大変な苦労がありました。まず、土地の解放で、村有地・区有地・企業などの私有地が混在していて、話し合いが困難きんなんを極めました。次に水の無い大地にどうやって水を得るか、そのためのさまざまな苦労がありました。一戸当たり平均一町九反歩の土地は得たが、木の根を掘り起こし、厚い苔こけを除き耕した土地は痩せ土やせで、土作りから始めなければなりません。また、集まってきた人々が心を合わせるための苦労もありました。

入植以後、中央道・大型農道が開き、権兵衛トンネルが開き、交通の便が良くなり住宅、商・工・運輸の事業所が増え続けています。また、近くに信州大学や南部小学校、南信工



昭和29年、開拓7周年の時の神社南の場所です。土作りのためのめん羊の放牧風景。

科短期大学校もできて、発展を続けています。七〇戸の入植者で始まった南原区は、平成三〇年一月には五二二世帯・一四一二人になりました。

## 二 神社

### (一) 二宮神社

南原コミュニティセンター南隣二宮にあります。

祭神 主神 二宮尊徳

他に秋葉権現あきばけんげん、大山祇神おおくみ、大国主神 ほか

由緒

神社前の「報徳 二宮神社」碑の碑文を記します。

「そもそも この神社は終戦直後、食糧増産県営緊急開拓団として入植した、南原開拓組合の人々が心の拠り所として創建した。神社設立にあたり、沢尻恩徳寺の宥人和尚に依頼し、高遠樹林寺に保存されていた旧高遠藩上級藩士の神棚を譲り受けて祀った。祭神には二宮尊徳翁を祀るのが相応しからんと衆議一決し、昭和二十三年五月組合の共有地に祠を建立して二宮神社と号した。其の後二十数年を経過し、地域内を中央自動車道が通過して、南原周辺は急速に宅地化が進み人口も急増して来た。こうした社会環境の変化に伴って、社

殿新築を要望する気運が高まり、崇敬厚い区民の浄財を得て、昭和五十六年四月十八日建坪三十五平方分の社殿の新築が完成した。旧祠は、そのまま隣接地に遷座し天満宮として奉安した。この神殿造営を機に、小田原報徳二宮神社末社として草山朝子宮司により認証された。……以下略……」

左端の社殿が最初の二宮神社で、現在は天満宮となっています。真ん中が現在の二宮神社で右側に二宮金次郎像が立っています。

(二) 天満宮 石碑  
西原公民館敷地内にあります。

碑面 天満宮

昭和五三年  
十二月吉日



西原天満宮石碑



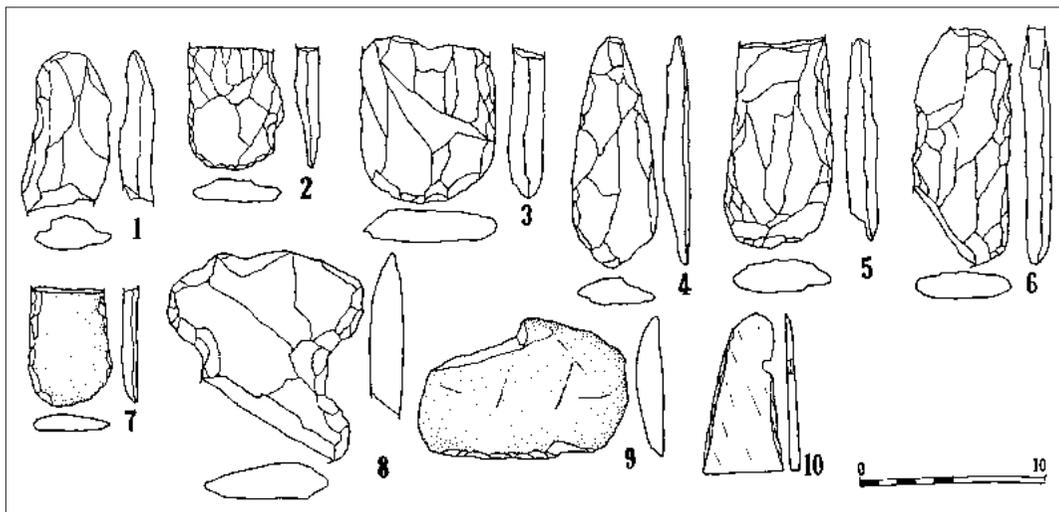
「報徳二宮神社」碑と二宮神社

### 三 遺跡

#### (一) 南原遺跡

三本木原八六六九一〜八六七二番地が発掘調査のされた範囲で、この遺跡は戸(鳥)谷川右岸の河岸段丘にあり、現在は畑地と宅地となっていて、中央道がこの遺跡を南北に横断しています。

昭和四七年(一九七二)、中央自動車道の建設工事実施にともない、道路用



南原遺跡出土石器実測図(1:4)

地の範囲で緊急発掘調査が行われました。

調査の結果、遺構は見つからず、また出土した遺物も少なく、縄文時代中期の土器片が十数点と打製石斧七点・石匙さし一点・横刃形石器一点・用途不明の石器一点の出土にとどまっています。

このことから遺跡の性格としては遺物の散布地になるといえます。

## (二) 曾利目遺跡

この遺跡は南原遺跡の北側に隣接している場所で戸（鳥）谷川と小さな沢にはさまれた、小さな舌状台地にあります。南原遺跡と同様に中央道建設工事にもない発掘調査が実施されましたが、遺構はみられず、出土した遺物も縄文時代中期の土器片



曾利目遺跡全体風景 北より

が一点のみでした。

この遺跡も遺物の散布地になるといえます。

## (三) その他の遺跡

南原区内には中央道建設工事にもない調査がされた南原遺跡・曾利目遺跡のほかにも戸（鳥）谷川右岸沿いにある九尊洞遺跡、戸（鳥）谷川と村道八号線の間広がる畑地と住宅地となっている付近にある狐窪遺跡きつねくぼがあります。これらの遺跡は本格的な発掘調査がされていないため詳細は不明ですが、これらの遺跡からは縄文時代中期の土器片・古墳時代の鉄鏃てつぞく・平安時代の灰釉陶器片かいゆうとうぎが地表で採集されていること、また南原区の南に隣接する伊那市地籍内の小沢川左岸河岸段丘上には大遺跡である月見松遺跡があることからこれら未調査の遺跡のある場所またはその周辺には複数の時代の集落跡が埋蔵まいざうされていることが考えられます。

# 四 碑

## (一) 南原「拓魂」の碑

南原コミュニティセンターの南にあります。

題字は長野県知事。「拓魂」は事業を記念するのみでなく、この魂を永く子孫に伝え、村造りの原点としたい悲願をこめ

た言葉です。

碑面 拓魂

長野県知事西沢権一郎書

碑陰

樹幹聳ゆる

大平地林にし

て流水更に無

き標高七八〇

分の地に地元

有志開拓増産

隊岡谷帰農組

合合体し南原開拓農業協同組合を組織し此の地を拓く



南原「拓魂」碑 (公民館南)

入植年月

昭和二十一年十一月

入植戸数

四十六戸

開拓総面積

八十余町歩

電気導入

昭和二十四年二月

水道完備

昭和三十一年二月

開拓者氏名

五四名

石工 岡谷市長地 森田石材

昭和四七年建立

(二) 西原「拓魂」の碑

南原区西原公民館の南にあります。

題字は長野県知事。「拓魂」の趣意は南原と同じ。

碑面 拓魂

長野県知事西沢権一郎書

碑陰

朝に夕に星

を頂き鋤をと

り原野を拓き

今日の繁栄の

基をなした物

故者を含む左

の人々及び家

族の汗と涙の辛苦を讃え永遠の平和と弥栄を祈念して此の碑

を建つ



西原「拓魂」の碑

一 入植

昭和二十一年 入植戸数 二十四戸

一 電灯完備

昭和二十七年九月

一 水道施設

昭和三十一年三月

一 水道完備

昭和四十七年四月

三五名の氏名

昭和五三年一二月建立

(三) 水神碑

1 南原公民館南にあります。

碑面 水神

碑陰 「沿革」

南原は開拓地にして昭和二十一年入植、水の無い地域のた



南原（公民館南）水道記念碑

め共同井戸を  
数ヶ所掘り生  
活用水とする。  
昭和三十一年  
四十六戸で水  
道組合を設立、  
共同井戸二ヶ  
所より電動ポ  
ンプにより各

戸へ給水する。昭和三十九年国の施策に依り開拓地畑灌漑事業として、南箕輪村九六三三ノ九地点に深さ百餘余の井戸をボーリングして水中ポンプにより南箕輪村九六一一ノ二地点迄揚水し給水する。人口の急増に依り将来を展望する上にたつて平成四年十月広域水道供用開始と同時に村営水道に移管、其の機能一切を停止し南原水道組合を解散する。ここに水神の碑を建立し之を祀る。

解散時 組合員数 百二十八戸

施設利用口数 五十三戸

給水人口 六百五十人

平成五年七月吉日 南箕輪村南原水道組合

## 2 池上家 水神碑

公民館から西へ二〇〇歩ほど行った池上家の庭にあります。

碑面 水神

副碑 「沿革」

南原開拓地第一号井跡

深サ 拾五間

利用戸数 拾参戸

昭和二十二年

増産隊掘之

昭和六十二年

十二月吉日建之

## (四) 道標

1 権兵衛街道から南原集落へ入る分岐点

碑面（西向）

右 上戸・中条

左 与地・権平・

平沢

（横に「奉賛観音□□

□□」の碑があります）



南原道標石 権兵衛街道との分かれ



池上家水神碑

2 公民館西の

道路分岐点

碑面 右 上戸

左 中条

碑陰 原中や

雲にもつかず

啼く雲雀

(文久三年(一八六三)道

標兼芭蕉の俳句碑を鈴木

箕道が建立した)

(五) その他

1 庚申塚

大型農道東一〇〇〇メートル

いの権兵衛街道沿い

(1) 庚申 万延元年

(一八六〇)

(2) 庚申 寛政一二年

(一八〇〇)

(3) 庚申 元文五年

(一七四〇)

天十月三日



是從東高遠領の標柱の近くにある  
南原の「庚申塚」



南原道標「右上戸・左中条」公民館西

2 碑塚

大型農道の信号機南の交

差点西側

(1) 庚申

(2) 弘法大師 碑

(3) 南無阿弥陀仏 碑

(4) 三界万靈塔 碑

(5) 馬頭観音 碑 三基

(6) 金毘羅大権現 碑

(7) 天神 碑

3 公民館東 庚申塚

(1) 庚申 昭和五五年

(一九八〇)

(2) 甲子 昭和五九年

(一九八四)



南原公民館東「庚申塚」



大型農道沿い「碑塚」

## 五 公共施設

### (一) 南部小学校(学校の位置は沢尻地区です)

明治十一年(一八七八)村内各地区にあった学校の統合が始まった時、この地域の学校であった沢尻学校(久保支校)は西伊那部学校へ合併することになりました。それ以来、この地域の児童・生徒は行政区の違う伊那市へ教育委託されました。その後この地域一帯が開発され、住宅が増え、平成元年には委託児童・生徒が二〇〇人を越えました。それ以前から委託児童・生徒については村の課題として問題になっていたことでもあり、平成四年新しい学校を建設し委託児童・生徒の解消することになりました。一〇余年の教育委託解消が実現することになりました。

村の南部に位置することから「南部小学校」と命名し、平成八



南部小学校遠景

年から開校しました。そして、校歌も校章も制定されました。なお、中学の生徒はスクールバスで南箕輪中学校へ通うようになりました。平成三〇年度の児童数は二〇七人です。

### (二) 長野県南信工科短期大学校

大型農道の南原入り口西側にあります。

平成二八年、産業技術が急速に進歩する中で、それに対応できる人材育成をするため、県では二番目(一番目は上田市)の工科短大をここに設け開校しました。

ここには昭和五三年(一九七八)設立の「伊那技術専門学校(県立)」があり、一年で修了する職業訓練を行っていました。平成二八年「南信工科短期大学校」へと発展しました。

南信工科短大には「機械・生産技術科」・「電気・制御技術科」の二コースがあつて、高等学校卒業者と在職者・離転職者を対象としています。



「長野県南信工科短期大学校」のキャンパス



# 第十一 大芝



## 一 大芝の由来

大芝区の辺りは江戸時代には「大芝原」と呼んで、広大な入会秣野まぐさのでした。(入会秣野については「全村由来の項の注を参照)宝暦七年(一七五七)の古文書に、一八一鈔の所の年貢として久保村・大泉村・北殿村・南殿村・田畑村・神子柴村・大泉新田村・大萱村・羽広村の九ヶ村から米一斗八升と納めていることが書かれています。

明治八年(一八七五)には、大芝原三五〇鈔が民有地として認められています。明治一五年から分割が始まり、一六年には南箕輪村分として二三五鈔が認められました。その後各地区への分割が計画されましたが、村財政基盤の一つとするべく大正三年(一九一四)村有化が決まりました。当時の記録によると、台帳面積二一九鈔余、実測二三五鈔余となっています。

明治二七年南箕輪学校が焼失し、校長の福沢桃十氏の提案で大芝への植林(学校林)が始まりました。秣野消失などの理由で反対運動もありましたが、村として植林に取り組むことになり、その後も植林が続けられ見事な平地林となつていきました。そして、大正一二年から生長した樹木の伐採・売却ばいが始まり、昭和三八年(一九六三)頃まで村財政の大きな

収入源となりました。

昭和二一年、就職先の無い食糧難時代の青年対策として大芝原開拓が計画され入植が始まりました。そして、翌昭和二二年には二九戸の入植者となり、大芝原開拓農事実行組合が設立されて大芝区が誕生しました。村内出身者は九人でした。また、開拓面積は四八八鈔でした。この地は広大な西山を背負っていますが水が伏流してしまい水利の便が悪い所なので、開拓事業を進める上で水をどうやって得るかが重要課題でした。入植と同時に炊事・洗濯・入浴のための水に苦労しました。初め雨水・大泉川の水・西天竜幹線水路の水などを利用してしのいでいましたが、大泉新田地籍に横井戸を掘る導水工事や大泉所四ノ沢からの導水工事により改善を図りましたが、しかし、管理上の問題等あり不自由な生活をしていましたが、昭和四一年(一九六六)村営水道が整備され、水に不自由しない生活が出来るようになりました。また、原野の開墾も大変なことでした。木や藪の根を掘り抜き、厚い苔を取り除いて、出て来た耕土は作物を作るには不向きな土で土作りから始めなければなりませんでした。

穀物・野菜作りがすぐには無理ということで果樹・酪農から始まった大芝地区の農業も、日本の農業情勢の変転の波の中で果樹は消え、酪農家も減り、農家も少なくなつて来ています。

近年村道六号線の整備・大型農道の開通などがあり、また公共施設の設置・観光施設の整備が行われ、大芝地区も大きく変貌へんぼうしつつあります。かつて中村元恒もとつね（高遠藩の儒官・医官で『路原拾葉』の编者）に「箕輪十勝」の中で「千里の原頭は常に雲を帯びている…放馬が疾駆しつぷくしている…」と詠うたわれ、二九戸の人達によってその一部が開拓された頃の風景は大きく変わりました。平成三〇年の大芝区には、一八九世帯、三三五人が暮らしています。

なお、大芝公園の歴史を付記すると

明治二八年（一八九五） 植林始まる

明治四四年（一九一） 植林面積一〇〇ヘクタールを超える

昭和二〇年代（一九四六）から三〇年代にかけて植林

した木を伐採・売却により村財政を助ける

昭和四三年 「大芝開発調査特別委員会」設置

昭和四七年 スポーツ公園設置決定

昭和四八年 ゴルフ場賃貸ちんたいよ与仮契約成立四二・九ヘクタール

昭和五三年 「都市公園づくり」始まる五一・六ヘクタール

平成 九年 温泉湧出 一三年「大芝の湯」施設できる

平成一二年 「こども未来センター」設置の話がでる

平成一三年 「味工房」改装

平成三〇年 「道の駅」設置



現在の大芝区を南西からドローンで撮影した  
大芝集落の現況：左に見えるのが大型農道、右に見えるのが中央道

## 二 神社

### (一) 大芝神社

#### 祭神

あまてらすおおおのみこと  
天照皇大神 伊弉册命  
いざなぎのみこと  
とよけひめのみこと  
豊受姫神 建御名方富命  
たけみなかたのみこと  
おおもちのみこと  
大山祇命

#### 由緒

昭和二六年（一九五一）、開拓地内に神社創建の気運が熟し、一二月に組合総会において創建することが決まり、翌年一月に神社名を大芝神社と定め、宮司鳥山氏外三名を創立委員として、昭和二七年四月一五日南箕輪村有林二〇坪の境内に建立さ



大芝神社

れました。昭和三十三年に五ヶの敷地を村長の幹旋あつせんにより村議

会の了承を得て現在地に定め、ここに移転し祭典まつりが挙行きよこうされ

ました。昭和四三年二月に正式に敷地ゆずを譲り受け、同年一〇

月三日に鳥居が建てられました。当初、祭日は一月二日

でしたが、昭和四九年に新社殿が完成してからは例祭日は一

月三日となりました。

### (二) 天満宮

大芝神社境内に石祠せきしにて祀まつられています。建立は昭和二八

年二月二二日です。

#### 祭神

すかむらみちざね  
菅原道真

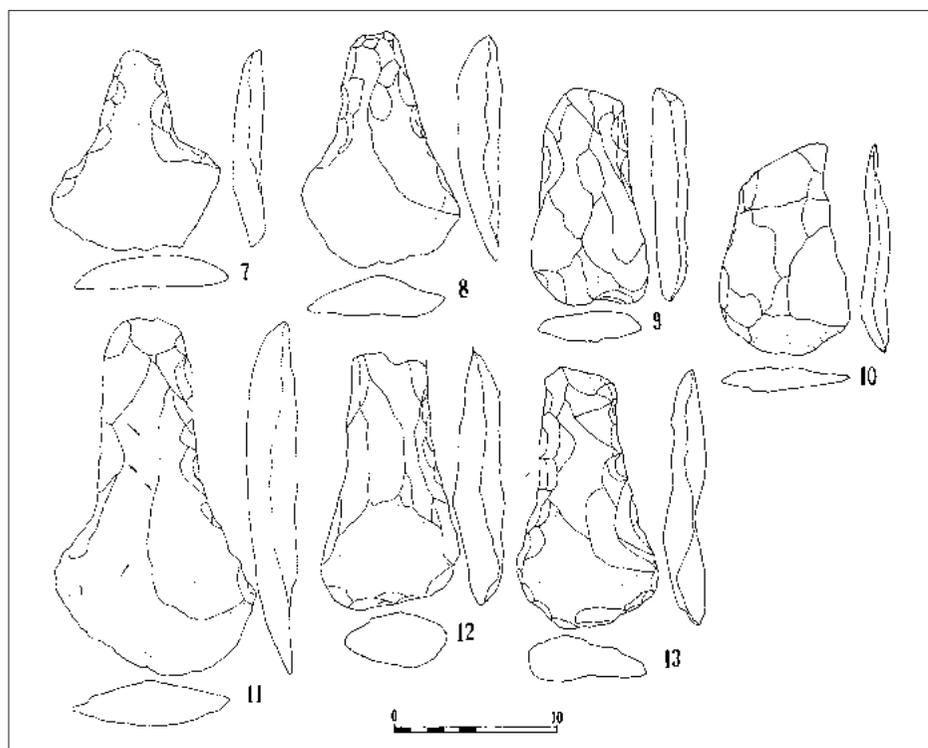
## 三 遺跡

### (一) 大芝原遺跡

村道六号線と中央道が交差する北側あた辺り一帯です。昭和四七年（一九七二）、中央自動車道建設に際して緊急発掘きんきんはつくわがなされた遺跡です。

検出された遺構・遺物は少なく、遺構は土壙どこうが三基、遺物は縄文時代中期・後期の土器片九点と土製品で耳飾りの破片一点、打製石斧せきふ一三点、弥生時代後期の土器片一点が出土しています。

中央道から東へ一〇〇呎ほど離れた畑地から弥生時代後期の土器片や磨製石鏃<sup>ぞく</sup>の優品<sup>ゆうひん</sup>が地表で採集されていることから、この遺跡の中心はこの辺であることが推察されます。



大芝原遺跡出土石器実測図

## (二) 大芝東遺跡

大泉川の右岸、河岸段丘南向き斜面に位置し、大泉川に沿って東西に帯状に続いていると思われる遺跡です。昭和四七年中央自動車道建設に伴い緊急発掘調査が行われました。

調査の結果、縄文時代中期初頭の住居址一基と平安時代の住居址一基、時代時期不明の土壇一七基及び六本の溝状遺構が検出されました。この他に遺構外で縄文時代早期～前期、後期～晩期の土器片も出土しました。縄文時代中期初頭の住居址は小規模なもので出土した遺物も少なく、炉に設置された土器と打製石斧が二点のみでした。平安時代の住居址からはある程度まとまった遺物が検出され、土師器の坏が二点・灰釉陶器の椀が四点(うち一点は墨書あり)・長胴甕の破片一点・鉄製釘一点・鎌一点が出土しています。

その後昭和四九年に、この遺跡地内で圃場整備が実施されることになり、緊急発掘調査が行われました。

この調査では縄文時代中期の住居址二基と竪穴・土壇・配石址・柱穴址・溝状遺構が検出され、縄文土器や平安中期の土器・陶器が出土しています。



大芝東遺跡出土鎌

発掘調査の範囲外である中央道西側畑地の一帯から、灰釉陶器の破片や縄文時代の土器片が地表で多く採集されていることから、遺跡の中心は中央道の西側であることが推測されます。

### (三) 横井戸跡

養護老人ホーム西南、中央道から東五〇メートルくらいの林の中にあります。

#### 1 碑

#### 碑面 (要約)

農民として食糧増産に励みたいが、この土地には水が無い。

そこで地下に水を探そうと横井戸を掘った。延長五百間掘って水を得ることができた。溜め池も二か所に造ることができた。そして、この水で七反歩の水田を灌漑することができた。うれしいことである。



横井戸碑

碑陰 大正十一年三月十日

起工主 小林録三郎

2 遺構として、水路跡、溜め池跡が見られる。  
(四) 富士塚「田畑」の項参照。

## 四 碑

### (一) 開拓記念碑

大芝公民館の建物北隣にあります。

碑面 「拓魂」 長野県知事 西沢権一郎 書

碑陰 大芝開拓碑

斯の開拓地は以前村有林として松<sup>ひまわり</sup>等の大樹が茂る村の宝庫であった。昭和二〇年大東亜戦争直後の食糧難時代に農家の二、三男対策と食糧増産のため村有林解放運動を起こせしが村内一部に強力な反対がでた。当時清水国人氏が会長の農民会が母体となって開拓組合を結成し強力な解放運動



拓魂碑

の結果功を奏し、国の緊急開拓認定と相俟<sup>ま</sup>って開拓されることとなった。

時に昭和二一年五月五日先遣隊・増産隊・引揚者等の入植者により組合を組織し此の地を拓<sup>ひら</sup>く。

開拓建設は水の確保がその成否の鍵であつた。昭和二二年三月大泉新田地籍の横井戸工事に始まり大泉所四ノ沢水源の導水を完成、その間実に十有余の才月を費<sup>つ</sup>やす。開拓二〇有余年事成り一般農政移行に伴い組合解散に当たり主なる事業の概略と組合員の名を刻み此の碑を建立して永く後世に遺すものなり。

#### 主なる事業の概略

総面積 五八町三反 耕地面積 四八町六反

入植年度 昭和二一年 入植戸数 二九戸

大泉新田地籍横井戸工事着工 昭和二二年

電灯工事 昭和二四年

神社建立 昭和二七年

成功検査 昭和三〇年

公民館建設 昭和三三年

大泉所四ノ沢水源導水工完了 昭和三三年

村営水道導入 昭和四一年

組合員名 二九名(名は略)

昭和四七年三月二二日 大芝原開拓農業協同組合

## (二) 西天竜大泉川南再圃場整備完成記念碑

村道六号線が西天竜幹線水路と交わつた所から北へ一〇〇メートル行つた東側にあります。

碑面 西天竜大泉川南再圃場整備完成記念

南箕輪村長 唐木 一直 謹書

碑陰 沿革(要約を記す)

この地域は昭和初期の開田工事には大泉川の河原地帯である二里沢は対象にならず開田されなかつた。平成八年、権兵衛トンネルの廃土を埋め土にして構造改良田出来ることになり、平成一二年から一四年にかけて工事がおこなわれ、整備された水田になりました。感謝です。

関係戸数 一七九戸

改田面積 三九畝

経費 七億四千万円

平成一八年三月吉日

西天竜大泉川南再圃場整備実行委員会



西天竜大泉川南再圃場整備完成記念碑

### (三) 句・歌碑

大芝公園の二つの大芝湖の中間南にあります。

#### 1 碑面

「黒百合の

山祠をよぎり

星ともる」源義

#### 碑陰

昭和六十二年十月

「河」伊那支部有志

#### 2 碑面

「翁草

となりは汝の

座を定む」照子

#### 碑陰 平成二年七月「河」伊那支部一同

#### 3 碑面

「罌の

峡の奥峰に

夕照らふ

日のくれなぬハ

雪にあらずや」

榛三郎



3の句碑



1・2の句碑

碑陰 一九九七年二月四日 青山榛三郎歌碑建立会

1・2の句碑については、俳誌「河」同人会が南箕輪村で開催され、その記念に建てられたと伝わります。角川源義氏は会の主催者・会長であり、照子氏は源義氏の奥さんで源義氏亡き後会を引き継いだ人です。

青山榛三郎については、田畑「青山榛三郎歌碑」の項参照。

#### (四) 寒念仏 碑

大芝マレットゴルフ場

西北端の大泉新田から来る道路の交差点北東にあります。

「寒念仏」の文字しか読めませんので、詳細不明です。

#### (五) 道標

(四)の碑とほぼ同じ所にあります。

四面に、「右 羽廣道、

「中 学校上戸中條与地」、「左 大萱 経 伊那町」、「御祭典記念 大正四年 大泉新田」と刻まれています。大正四年は一九一五年です。



寒念仏 碑

## (六) 馬頭観世音 碑

大芝公民館西の道路を北へ進み、道路に突き当たった先の林の中、大泉川の崖上にあります。詳細は不明です。

三基あって、明治三四年（一九〇一）・大正九年（一九二〇）・（もう一基は不明）と書かれています。供養塔と思われます。

## (七) 庚申碑

大芝公民館南の道路端に建っています。

碑面 庚申

昭和五五年

（一九八〇年）

## (八) 畜魂 碑

村道六号線と西天竜幹線水路が交差した二〇号西、南側にJA上伊那の



畜魂 碑



馬頭観世音 碑

敷地内にある「伊那高原ミルクステーション」脇に建っています。

碑面 畜魂碑 全国農業協同組合連合会

会長理事 大坪藤市 書

碑陰 昭和五七年 之建

## 五 公共施設

### (一) 社会福祉関係

1 南箕輪村社会福祉協議会（松寿荘） 業務は昭和六〇年（一九八五）に始まりましたが、大芝へ施設ができたのは、平成五年でした。村道六号線と西天竜幹線水路が交差した二〇号ほど西を南に曲がった所にあります。

デイサービス・訪問サービス・相談等々の事業を行っています。

近くに障害者生きがいセンターの施設（ひまわりの家）もあります。

2 1と同じ場所に上伊那社会福祉協議会運営の養護老人ホームの南箕輪老人ホーム、特別養護老人ホームのコンソール大芝があります。

## (二) 大芝公園施設

大型農道西には、たくさんの観光施設・研修施設・スポーツ施設があります。

これらは、植林した木材の需要が減ってきた昭和四〇年代後半（一九七〇年頃から）から、平地林の活用を考えた結果造られてきたものです。（詳細は略）

また、田畑地区で揚水された西部地区畑灌漑用のファームポンド（貯水池）も設けられています。



愛の鐘

# 第十二 北 原



## 一 北原の由来

太平洋戦争が終わりに近ずいた頃、農耕隊のうこうたい（主に朝鮮の人々による農地を広げるための隊員）によって木を切り倒してあった原野へ、戦後の食糧難を乗り越えるために各地（久保・岡谷など）から集まった入植者（希望者）十戸の人々によって北原開拓団を結成しました。そこへ二戸が加わって北原区が誕生しました。昭和二年（一九四六）のことでした。北原地籍だったのでその名を採って「北原区」と名づけました。

北原はその昔、一八〇町歩（一八、〇〇〇アール）もある一か村の入会しりあひまぐさの稗野ひのでしたが、明治四年（一八七一）に各村々へ分け（一番早い分割）られました。大正四年（一九一五）に南箕輪村へ統合されて村有地となりました。この村有地一一町九反（一一九〇アール）が開拓されて「北原区」になったのです。

一時は「日本一小さい区」と言われ、戸数もなかなか増えなかったのですが、道路が良くなった平成六年頃から家が建ち始め、今（平成三十年一月）では一三六世帯・二七三人の区となり、アパート・会社・福祉施設も出てきました。

北原区の開拓は、大芝区や南原区の開拓とは異なり、それ

ぞれの家が土地を買って開墾したので、耕地面積は同じではありません。開拓した人々は、家の無い人が多かったので、部屋を借りて住んだり・小屋に寝泊まりして開拓に励んだ人もいたといいますが、幸いなことに地下水は比較的高く家ごとに井戸を掘ることができました。

道路や水の便が良くなり、戸数も増えましたが、社会情勢の変化によって最初の入植者は半数になってしまっています。

## 二 諏訪神社

北原区の中央の通りを西に進み、中央道をくぐり抜けた林の中（水神碑の北隣）にあります。

祭神 八坂刀売命やさかかためのみこと

昭和四〇年（一九六五）二月、区民の総意で諏訪大社（下社）よりご神体をお迎えして建立こんりゆうしました。毎年五月の第三日曜日を祭礼の日と定め、区民一同が境内に集まり、花見を兼ねた祭典を行って



神社

います。区も小さいが社祠も小さいので、将来北原区が発展した時にはもつと神社にふさわしい社殿に造り替えたいというのが区民の願いです。

### 三 権理塚

元は、北原区北方の春日街道沿いにある西天竜記念碑鍾水（しょうすい、豊物碑）の南一〇〇メートル程のところにあつた（田圃三枚分ほどの広さ）といいますが、昭和の初めに行われた西天竜の開田の時に他へ移されたようです。ここからは、五輪塔をはじめ塚の一部と思われるものが発掘されたといえます。『長野県町村誌』には「石碑五輪塔にて三体あり……」と書かれていて、永井家の屋敷内にその一基の一部分が残されています。また、大泉の勝光寺の北側にある五輪塔（一基）もその一つであると言われられています。

権理塚についてはいろいろの言い伝えがあり、一説には、加集李之助（代官）が伊予の国（愛媛県）から連れて来た若衆の中に「権理」という人がいて、その墓を生前に建てて供養したというので「権理塚」の名がつけられたと言い、また一説には、箕輪城が武田氏に攻められて落城した際の落人達を葬ったものであると言います。また「権理塚」と呼ばれて来

てはいますが、「五輪塚」のなまったものとも言われています。

北原の小字「五厘塚」は、戦前は大泉の区有地の畑であつて、個人に貸してあつたので、大泉区と関係があつたと思われませんがはつきりしたことは分かりません。

### 四 庚申塚

昭和五五年（一九八〇）に初めて建てられました。



庚申塚

### 五 用水

#### (一) 鑿て井戸

開拓地の多くはどこも同じですが、開拓の苦勞もさることながら飲み水や・使い水に不便します。幸いなことに北原区では地下水が高かつた（地下七〜八メートル）ために、比較的容易に井戸を掘ることができて、多くの家に井戸があつたといえます。

## (二) 水道創設

北原区では、井戸は掘れたものの、衛生的な飲み水には不自由していて水道の設置は区民の長い間の夢でした。その願いがかなったのは昭和三十三年（一九五八）のことでした。村の助成を受け、北原区の大入地籍に二基の井を掘り、その水を合わせて電気揚水し、水道施設として完成させました。現在では、村営水道が敷かれ、古水道は使われてはいませんが、そこには「以和清水」という水道の記念碑が立てられています。

碑面には

創設 昭和三十三年九月

「以和清水」

昭和三九年秋建立

清水国人村長此の地に水道を創設

区民の福祉を図る

茲に碑を建てその功德不朽に伝ふ

北原以和清水水道組合

碑陰には当時の一二人の組合員氏名が書かれています。



「以和清水」の記念碑

## (三) 農業用水

昭和四八年（一九七三）より、「国営伊那西部農業水利開発事業」の一環として、西部土地改良区が行った送水管敷設事業により、北原区の畑作地帯にも雑用水給水栓が設置（完成一六一年四月）されて、給水栓（地上・地下）から作物に灌水できるようになりました。



給水栓

## 六 公民館

昭和二八年頃、西箕輪小学校北分校（吹上）の古材を使って公民館が建てられました。区民の数からすれば大きな建物でした。その後五〇年を経て各区に近代的な公民館が建てられようになり、北原区でも平成二三（二〇一一）年に、新公民館を建設しました。



新公民館



旧公民館

# 第十三 中 込





● 区章の意味

「和」を表わす円型（楕円）と  
その中に「中込」の文字をデザ  
インし一見して「中込区」とわ  
かる様にまとめたものである。

昭和50年9月21日制定

作者 清水文男



昭和50年（1975）団地造成が終わり家が建ち始めた頃の中込の様子。「昭和50年11月発行の冊子の表紙」より



現在の中込区

# 一 中込の由来

中込の地字の由来は

①天文一四年（一五四五）、武田信玄が福与城を攻めた時、福与城の出城の一つとして中込城があったという言い伝えがある。

②明治十一年（一八七八）に南箕輪村から長野県へ報告した文書の中に、「久保耕地（当時は塩ノ井も含まれていた）の畑に属する地字：中込：」と出てくる。

これらのことから、数百年前からこの地を『中込』と呼んできているのだと思われます。そして、なかごめとは滝ノ沢と栃ヶ洞に挟まれて出来た地形からつけられた地字だと思われます。

現在の中込区のある所は、古くは山林だった所で、主に塩ノ井地区の人が管理・使用していた所だったようです。その山林をだんだん開墾して畑にしていたようで、それは昭和二〇年代（一九四五）まで続いていました。昭和三〇年代に入り、西天竜用水の水を分けてもらい、畑から水田に変わっていきました。ですから、団地造成の時は水田が中心の地帯でした。

中込区は、昭和四五年（一九七〇）からの長野県企業局の

団地造成事業によって造られました。計画は、県営住宅七一戸、分譲住宅一三四戸、計二〇五戸でした。昭和五〇年（一九七五）八月三日、戸数一〇二戸で南箕輪村の一二番目の区として誕生しました。団地のみで独立した区を形成したのは県下最初のことでした。昭和五〇年一月に発行された『中込区創立・中込公民館落成記念誌』を見ますと、区民の意気込みが感じられます。そして、区の名称も「なかごみ」ではなく、「なかごめ」に決められました。丁度、戦後三〇年・村制一〇〇年の時でした。

現在（平成三〇年）、世帯数一九二、人口四七二人です。入居した人々の世帯交替も進んでいるようです。

## 二 中込城跡

中込城跡は、滝ノ沢と栃ヶ洞に挟まれた天竜川第二段丘の舌状丘陵の先端にあります。明治十一年（一八七八）の村から県への報告書には、「東西約四二間（約七六メートル）、南北約三五間（約六三メートル）、面積一四〇〇坪（約四八〇〇平方メートル）」とあり、これは南箕輪村にある古城跡としては最大規模のものです。また、「壕・囲みの壁・門の戸・出入り口などの跡がはつきり残っているが、誰の居城であったかについては伝承

が残つておらず、今は林となつて「いる」と書いてあります。

また、『南信濃伊那史料』という書には「三段の壕があった」と書いてありますし、篠田徳登氏が描いた図の中に、壕跡二本と土塁一つが描かれています。

団地造成で地形が大きく変わってしまったようですが、壕跡かと思われる所が、一か所見られます。丘陵先端部に造られた公園へ行きますと、深い崖に囲まれた堅城の雰囲気（ふんいき）が味わえます。

「郷土ヶ窪」の地字は、中込城と関係があるものと思われる。



明治11年、村から県へ報告された中込城址  
（『長野県町村誌』より）



壕跡と思われる所

### 三 中込公民館

新しい区の諸活動の拠点として、昭和四九年（一九七四）に建設されました。グラウンド付の施設で、昭和五〇年には区総会・新年会・盆踊り大会・子供クリスマスマサ会などの会場となり、区民の融和推進の場所となりました。

しかし、住民も増え活動や利用が活発になってくると手狭（てせま）になり、平成四年現在の建物に改築されました。



現在の公民館



昭和50年頃の公民館

# 第十四 資料



嘉永年間の木曾助郷関係図（田畑 門屋文書）

# 『長野県町村誌』について

明治七年（一八七四）、時の政府は廃藩置県にともない新たにできた各府県に国史編輯局を設置させ、郷土誌（史）作成の事業を興しました。長野県でも国史編輯局を設置し、およそ十年をかけて、各町村から地誌の提供を求めました。南箕輪村でも明治一一年二月（一二年六月に追伸）に県へ提出しました。

長野県では各町村から提出されたものをまとめ、昭和一一年（一九三六）に『長野県町村誌』として出版しました。この冊子の中にたびたび出て来る『長野県町村誌』とはこれのことです。

明治の初め頃の南箕輪村の様子や、伝えられている歴史がよくわかります。

## 二 田中城址

久保の東方天竜川の西岸にあります。箕輪町の地籍ですが、南箕輪村の歴史とかかわりのある城址です。遺構はありませんが、碑が建てられています。

応仁の乱（一四六七）が起き、戦乱の時代に入ると、甲斐（山梨県）の武田氏が信濃に勢力を伸ばし始めました。天文一三年（一五四四）、一四年と続けて侵入して来ました。

当時、箕輪郷は藤沢頼親が福与城（箕輪町三日町）において、箕輪郷の武士たちをまとめていました。天文一四年（一五四五）四月、武田信玄が杖突峠から高遠を通り侵入して来た時、頼親は伊那の諸士およそ一五〇〇人を結集して防戦しました。しかし、ついに力尽き、弟を人質に出し、和睦しました。その時の戦いに、南箕輪村の大泉上総・倉田将監などの小豪族たちも、頼親と一緒に奮戦しました。

その後頼親は、また武田氏に逆らったため追われ、越後（新潟県）から京へ上り、時の権力者三好長慶に厚遇されました。しかし、三好氏もやがて滅び、再び放浪の身となりました。天文一〇年（一五八二）武田氏が織田氏に滅ぼされ、続いて織田信長が死ぬと、伊那の地はまた領地の奪い合いになりました。頼親も旧領回復の好機と田中城を築き、活動を始めました。そこへ保科氏が下伊那の諸士とともに急襲して来て、奮戦しましたがついに敗れ落城してしまいました。頼親は、自決したとも逃げ延びたとも伝わっています。南殿には頼親にまつわる伝説が残されています。（長慶塚跡）

田中城は、その後保科氏や木曾氏が入ったりしましたが、慶長五年（一六〇〇）には、飯田城主小笠原秀政のものにな



田中城址碑（塩ノ井東の綿半駐車場南）

り、修理がされて陣屋（遠方の地を統治するための出張所）となりました。しかし、慶長七年に天竜川の大洪水で壊れ、陣屋は木下の高台へ移されました。

古記録によりますと、田中城は東西三町（約三三四メートル）、南北三町、東は天竜川、南・西・北は沼田に囲まれた平城だったようです。

### 三 上農寮跡と村上明彦先生と 信州大学農学部

神子柴の西天竜幹線水路の西側中原の所に、上農寮の記念碑と、村上明彦先生の胸像レリーフがあります。

上伊那農業高等学校は、農業振興を目標とした上伊那の人の願いによって、明治二八年（一八九五）に開校しました。最初は竜東（中央区）に学校がありましたが、昭和五〇年（一九七五）に、教育の場を南箕輪村に移しました。

昭和の初め、農村が行き詰まった中で、上伊那農業学校では昭和一〇年（一九三五）塾風教育を創設し、農業・農村の核になるような若者を育てようとなりました。その塾風教育の拠点が上農寮で、その指導の中心になった先生が村上明彦先生でした。

碑には、「…高原を拓いて学舎を創り…われらに土の心を培い、農に生きる喜びを育てた…」と書かれてあります。

昭和一六年（一九四一）、太平洋戦争に突入する中、塾風教育は注目を集め、大陸進出の国策にも歓迎されました。

昭和一九年（一九四四）、林業科が設置される中で、中等学校が五年制から四年制に変更される話が出てきました。五年生を対象に塾風教育を推進していた、上伊那農業学校の関係者たちは教育の危機を感じ、「上伊那農業学校を農林専門学校に昇格せよ」と運動を始めました。そして、昭和二〇年（一九四五）、長野県立農林専門学校の設立が認められました。



寮から学校へ向かう生徒  
（写真集『ああ上農』より転載）

昭和二四年（一九四九）、学制改革が行われ、信州大学が設置されると、専門学校部分は信州大学の農学部になり、上伊那農業学校は上伊那農業高等学校になりました。

## 四 碑や社寺等を見学するための参考

### (一) 山の神

山は人間生活にとって大切なもので、昔から人々は山の恵みをもらって生活していました。だから、人々は山を敬い大切にしてきました。また、土砂くずれなどを起こし、恐れら



田畑の山の神社（田畑神社境内社）

れてもいました。

山の神として一般には大山祇神が祭られています。またこの神とは別に、民間に信じられているのは、それぞれの地区に近い山にいて、春には里に下って田の神となり、秋の収穫が終わるとともに山に帰り山の神となる神です。また、木地屋（山

を移動しながら良木をさがし、木の食器・家具などを造り、それで生計を立てていた人々）・山稼ぎする人々の信じる山の神は、田の神とは関係なく、山の入口に社を勧請して祭ったり、山中の老木を選んで祭ったりしていて、神名も祭り方も一定していません。

かつては、山の神の祭日（旧暦一〇月一〇日）には各家で餅を搗き、藁のツト（包み）にこの餅を入れ神前に供え、以前に供えられている餅と交換して持ち帰り、護符としてありがたがって食べたりしていました。

### (二) 水神

水は人間にとっても、

農作物の生長にとって、はならないものですから、昔から泉や川は大切にされて来ました。また、水は災害を起こす恐ろしいものでもあります。

だから、この水を支配する水神様は大切に祭られてきました。水源地や川端、池や井戸端などに多く祭られています。



大泉西村横井戸（大泉川端）の水神碑

安産祈願や疫病鎮めに、水神を祭る風習も残っています。祇園、津島社に代表される天王祭は、よく知られています。

### (三) 庚申信仰

庚申信仰は、中国の道教の庚申待(六〇日に一度ずつ来る庚申の夜は、三尸虫が体内から抜け出して天帝に人間の罪状を告げに行き、天帝は罪状に応じて寿命を縮める、だからそれを防ぐために、一晩中起きていて三尸の虫が抜け出せないようにするが良い)の信仰を取り入れた信仰です。

日本では、平安時代に貴族の間に広まり始め、室町時代頃から庶民の間にも広まってきました。そして、江戸時代になると供養塔を建てる風習が盛んになっていきました。

庚申信仰では、最初本尊が決まっておらず、初期には阿弥陀如来・大日如来・地藏菩薩等が主仏とされて庚申塔に彫られることが多かったようです。江戸時代の元禄(一六八八〜一七〇四)頃から次第に青面金剛を庚申の本尊と考えるようになっていきました。青面金剛は、顔の色が青く六本の腕を保持っていて、怒りの相をした姿に表現されていることが多く、そこから病魔を払い除く大きな力を持っていると信じられるようになっていきました。また、福の神、農耕の神、厄よけの神など現世利益に役立つ仏として広く信仰を集めて来ました。

庚申塔に、日月・猿・鶏が彫り込まれているのがあります

が、日月は日待・月待の信仰と結びついたものと考えられ、猿は猿を使いとする山王権現が庚申の主神とされた時期があったことと、庚申の申を猿と結びつけたものであると考えられます。鶏については、庚申待が鶏の鳴くまでということと結びついたものであると言われています。

庚申信仰では講(信仰仲間のグループ)が多くつくられました。そして、庚申の夜に頭屋の家に集まって、共に飲食をし、語り合いながら夜明けを待つことが広く行われていました。また、講仲間で助け合ったり、楽しみ合ったりもしていました。そして、講仲間で六〇年に一度ずつ記念碑を建てることも古くから行われ、各地区に建てられた庚申塔がいくつも残っています。この頃では昭和五五年(一九八〇)に村内の各地区で建てられています。



田畑大泉川旧道橋端の  
青面金剛像

右上に日、左上に月、足両脇に鶏、足の下に三匹の猿(見ざる・言わざる・聞かざる)が彫られています。

#### (四) 日待・月待信仰

日・月は偉大なもの・神秘なものとして、古代から人々の信仰を集めてきました。日の出や月の出に礼拝することも、古代から行われていました。

村内にはたくさんさんの月待塔があります。月待信仰が盛んだったことを表しています。一五日の月は、仏教では弥陀の化現(姿を変えて現れたもの)とされ、それに願いをかけ、夜を通して精進しながら日の出を待つのが初期の月待信仰の姿であったと思われます。

ところが仏教が広まり、教典の中に月は勢至菩薩の化現であり、勢至菩薩の有縁日は二三日と書かれてあるものがあり、月の礼拝は二三日夜に行うのが本筋であるという考え方が室町時代から、人々に広がり盛んになっていきました。二三夜塔が多いのはそのためです。



塩ノ井 庚申塚にある二十三夜塔

何人かで講をつくり、決めた日の夜集まって、勤行や飲食をしながら月の出を待ち、月が出たら願い事をします。多くは女性

の信仰行事でした。塔を建てるのは、信仰の篤さを表すためなのです。

#### (五) 道祖神

道祖神は塞の神、幸の神、歳の神、道陸神などと呼ばれ、悪い病気などが村へ入って来るのを防いだり、旅人を守る神として、村の境や辻に祭られました。また、縁結びの神、子授けの神、イボ・疱瘡・おこり(発作)などの難病を治す神であり、厄年の厄落としての神としても信仰されて来ました。

村中で石像を建てるのが普通ですが、個人で建てたのもあります。また、猿田彦を道祖神として祀る所もあります。

道祖神の祭りは、どんど焼き、三九郎、さぎちょうなどの土地によっていろいろに言いますが、子供達が中心になって一月四日か一六日に、正月の門松やしめ飾りを集めて積み上げ、火をつけて燃やしました。この火で餅を焼いて食べれば虫歯にならない、風邪を引かない、書き初めが燃えて高く上がる、字が上手になるな



北殿千桐屋北の駅へ行く道路にある  
道祖神、道陸神

どと縁起をかつぎました。

また、厄年の人は、年の数だけ銭や大根を切ったのを、ふだん使っていた茶碗にいれていってこれを打ちつけ、後ろを返り見ることなく家に帰る風習もありました。

## (六) 観音信仰―馬頭観音碑も含めて

観音は、観世音菩薩の略称です。教典によると、苦難に遭って救いを求める者や願い事のある者が一心に念ずると、その者を救うに最もよい姿に身を変えて現れ、救ってくれたら、福德を授けてくれる仏です。教典には、「さまざまな苦難や人間の願いのうち、三三の場合をあげ、これらを救済したり福德を授ける」と説かれています。それで三三観音信仰が広まったようです。日本では、七世紀頃から観音信仰が民衆に広まっていきました。〇〇観音と呼ばれる観音様が各地に見られます。

村内には馬頭観音の像や文字碑が、各地にたくさん並んでいます。馬頭観音は馬大士とも馬頭明王ともいいます。頭に馬を戴くのは、転輪聖王の宝馬が世界を縦横無尽に駆け巡って、一切の魔障を打ち破って、本願を果たす偉大な力を現すことを象徴するためです。また、馬が草を食べるように、人間に襲い来る重い障害を食い尽くす力の象徴でもあります。そして、馬頭観音は、特に畜生道の苦しみを救う観音様とされています。

そういう仏が、いつの間にか馬の守護仏と考えられるようになっていき、愛馬の死を弔うために、像(碑)を建て、供養するようになっていきました。村内にある馬頭観音像や碑のほとんどは供養塔です。このことは、この村では農業や運搬に多くの馬を飼っていたことを物語るものであり、飼っていた馬をいつくしんでいた証拠になるものです。



馬頭観音供養塔

群衆の顔の馬の二匹の石の供養塔の入口西田畑の石の馬の顔の二匹の馬の供養塔を意味している。

## (七) 地藏信仰

村内には、あちこちに石仏地藏尊が見られます。地藏信仰は、平安後期から貴族の間で盛んになり、やがて民衆の中に深く浸透していきました。

地藏菩薩は、釈迦入滅後弥勒菩薩が世に出るまでの間、無仏の世界を大慈悲をもって六道の衆生の苦しみを除いてくれる菩薩として信仰されています。とくに、現実界と冥界との境に立って、地獄の苦しみの中にあるものを救うとされ、深い信仰を受けています。弱者を救済してくれる地藏尊は、子

どもを護り救う  
とされ、子安地  
蔵の信仰は広ま  
りました。こと  
に、夭折した子  
どもが賽の河原  
で青鬼・赤鬼に



北殿 お四国様入口の  
子安地藏

いじめられた時、地藏菩薩の袖にすがって助けを求めた話などから、子どもが変死すると、地藏尊の石像を建ててその子の冥福を祈ることが広く行われてきました。

### (八) 薬師信仰

神子柴に薬師堂がありますが、村内各地にも薬師堂跡といわれる場所が残っています。薬師信仰は村内にも広くあつたのです。

お薬師様は、薬師瑠璃光如来のことで、大医王仏とも医王善逝とも呼ばれます。人々を病気から救い、心の闇を取り除く仏と信じられてきました。

日本への仏教伝来とともに篤い信仰を受け続けてきました。北殿の新四国霊場にも数多く並んでいます。

### (九) 十二神将

神子柴の薬師堂に、十二神将の木像があります。

十二神将は、薬師如来の十二の大願に応じて現れた分身で

あると言われます。(お経に出て来ます)  
昼夜一二の時を守護する神とされ、頭に十二支を拝する神将となって、それぞれの年回りに応じての守護神ともいわれるようになりました。

### (十) 十王信仰

十王は、冥土の閻魔庁において人々の生前の罪業を裁く王で、人が死ぬと一〇人の王によって次々と裁かれます。閻魔大王はその一人です。

生前に十王に供養しておく、罪を軽くしてもらえという信仰が古くからありました。

### (十一) 甲子信仰

村内にも十王像はいくつかあり、お堂の跡も残っています。村内にも甲子塔がところどころに見られます。

祭神は大黒天で、七福神の一つで、これを祀ると金が溜まると信じられてきました。講をつくつて皆で楽しんでんだり、無尽講のようなことをしたりしていた人達もいました。



田畑 旧伊那街道端にある甲子碑

## (七) 山岳信仰

山には靈力があり、その力を受けたという信仰です。その靈力を得るために、登山したり、祭りをしたり、また碑を建て信仰心を表したりしました。

富士山、御嶽山、月山、大峰山等々たくさん山の山を対象の信仰碑が、村内にもいくつか残されています。役行者像も、山岳信仰の一つだと思われれます。各地に残る富士塚や浅間塚も富士山信仰を表すものです。

## (八) 筆塚

本来は、勉強のために使われた筆の功を謝するために、古くなつた筆を埋めて築いた塚のことを言うのですが、やがて、寺子屋の師匠の功績をたたえるために、筆子(教えず)が碑を建立するようになり、それを筆塚と呼ぶようになったといきました。

村内にも師匠の功績を讃えた筆塚がいくつか建てられています。(各地区にあるものを参照)

## (九) 社寺建築用語

1 権現造・本殿と拝殿を



宮八幡村殿

石の間でつないだ造り(図1)

2 入母屋造・上部は切妻のように二方へ勾配があり、下部は寄棟造のように四方へ勾配がある造り(図2)

3 流造・切妻造平入り屋根に反りをつけ、その前流れを長くして向拝とした造り(図3)

4 本殿・神霊を奉安する社殿

5 拝殿・礼拝を行うための神社の前殿

6 向拝(ごはい、こうはい)・社殿の正面の上に張り出した庇の部分

7 屋根の向き・妻入りー三角形をなす面が正面になる  
平入りー屋根と平行な面が正面となる

8 切妻屋根・図参照(図4)

9 唐破風 千鳥破風・切妻屋根の端の山形した所の装飾を

破風という(図5)

10 千木 鰹木・社殿の屋根の最上部へとりつけられた装飾

(図6)

11 格子戸・細い角材を間をすかして縦横に組んで造った戸

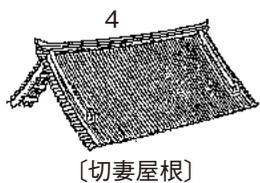
12 明神鳥居 両部鳥居・図参照(図7)

13 柿茸・コケラ(松または榎を薄くはいだ板)で茸くこと

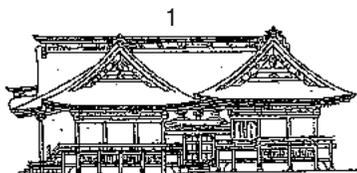
14 浜縁・向拝の階段の下の床

15 見世棚造・神社の正面の階段の代わりに供物などを置く  
板や棚をつけたもの

- 16 勾欄・廊下、橋などの端が反り曲がった欄干  
 17 擬宝珠・欄干の柱の頭につける宝珠の飾り  
 18 脇障子・神社などの側面の縁に立てて前後を仕切る板戸  
 や壁  
 19 貫・柱と柱を横に貫いてつなげる部材（地貫、頭貫）（図8）  
 20 木鼻・貫の端が柱から突き出した部分（図8）  
 21 虹梁・虹のように上方にやや反りを持たせて造った化粧梁（柱を固定するため、荷重を支えるための横材）（図9）  
 22 垂木・屋根の裏板を支えるために棟から軒に渡す材（図10）  
 23 棟木・屋根の最も高い部分の部材（位置や構造によって大棟木、隅棟木、箱棟木など）  
 24 桁・垂木を受ける材（柱と柱の間に渡す）（図10）  
 25 長押・柱と柱をつなぐ水平材（場所によっていろいろな言い方がある）（図10）  
 26 斗・柱などの上に設けた方形の受け木。組み物を構成し、上の重さを支える（図10）  
 27 肘木・斗と組み合わせて組み物を形成し、上からの重さを支える横木（図10）  
 28 台輪・柱の頂部をつなぐ厚い板（図11）  
 29 大瓶束・虹梁の上に立てる瓶子形の束柱（図12）  
 30 蛙（臺）股・下方がひらいて蛙の股のような形をした部材（装飾用）（図13）  
 31 懸魚・破風の下、またその左右につける装飾（兎の毛どうしもその一つ）（図14）  
 32 軒支輪・軒裏の天井の斜めに立ち上がる部分に湾曲した堅木を並べたもの（図15）  
 33 面取り角柱・柱の隅を削った柱



〔切妻屋根〕



〔権現造〕



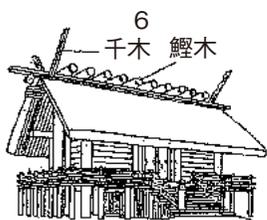
〔千鳥破風〕



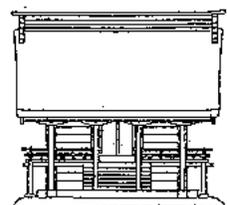
〔唐破風〕



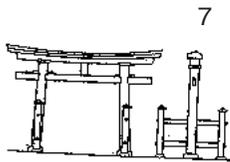
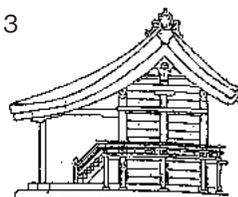
〔入母屋〕



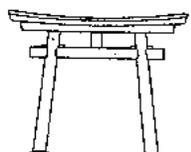
〔千木・鯉木〕



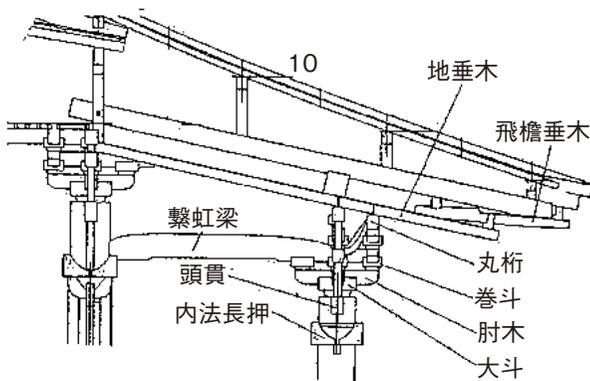
〔流造〕



〔両部鳥居〕



〔明神鳥居〕



地垂木

飛檐垂木

繫虹梁

頭貫

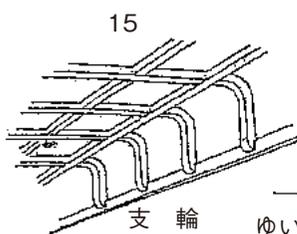
内法長押

丸桁

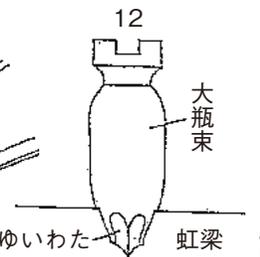
巻斗

肘木

大斗



支輪

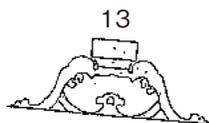


大瓶束

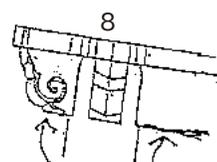
ゆいわた

虹梁

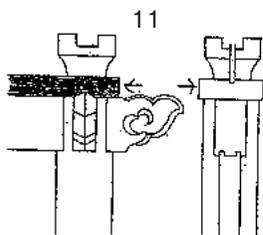
〔大瓶束〕



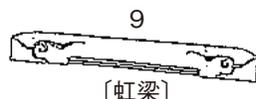
本臺股



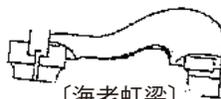
〔木鼻〕(貫)



〔台輪〕



〔虹梁〕



〔海老虹梁〕



梅鉢



かぶら

懸魚

# 五 南箕輪遺跡一覽表 (平成12年3月現在)

番号	種別	名称	所在地	時代	立地	遺構・遺物	備考
1	包蔵地	浄水場付近遺跡	大泉	縄・古	台地	縄文中期土器、打石斧 他	
2	〃	権現堂遺跡	〃	縄	段丘	〃	
3	〃	白木屋北遺跡	〃	縄・古	平地	縄文中期土器、打石斧、土師器	
4	〃	荻河原遺跡	〃	縄	段丘	縄文中期土器	
5	〃	北高根A・B遺跡	大芝原	縄・弥・中	〃	住居址12、石器、土器、古銭	昭和47年調査
6	〃	南高根遺跡	〃	縄・平	〃	石器、土偶、刀子、住居址 他	〃
7	〃	大泉遺跡	大泉	弥・古・平	台地	土器	
8	〃	大芝東遺跡	大芝	縄・弥・平	段丘	住居址2、石器、鉄鎌 他	昭和47年調査
9	〃	大芝原遺跡	〃	縄・弥	〃	土壇、土器、石鏃	〃
10	〃	大芝南遺跡	〃	先・縄・弥・中	台地	石刃、石斧、磨石鏃、古銭	
11	〃	富士塚	〃	近	平地	古銭	
12	〃	二里沢遺跡	〃	縄	〃	中期土器	
13	〃	クソン洞A遺跡	南原	縄	段丘	中期土器、石鏃	
14	〃	クソン洞B遺跡	〃	縄・平	台地	土器、陶器	
15	〃	狐久保遺跡	〃	縄・古	〃	石鏃、鉄鎌	
16	〃	信大農園遺跡	〃	縄	〃	中期土器	昭和47年調査
17	〃	曾利目遺跡	〃	縄	段丘	〃	〃
18	〃	三本木原遺跡	〃	縄	〃	加曾利E式	〃
19	〃	南原遺跡	〃	縄	扇状地 台地	前・中・晩期土器、横刃型石器	
20	〃	沢尻北遺跡	沢尻	縄	台地	加曾利E式、打石斧	
21	〃	沢尻遺跡	〃	縄	〃	中期土器	
22	〃	大畑遺跡	〃	縄	〃	〃	
23	〃	春日道上遺跡	〃	弥	段丘	後期土器	
24	古墳	丸山古墳	久保	古	〃	子持勾玉、直刀	文久年間に消滅
25	包蔵地	上ノ平遺跡	〃	縄・弥・奈・平	〃	土器、石器、土偶、陶器、鉄製品	平成7年調査
26	〃	久保下遺跡	〃	古	平地	田舟、田下駄、鋤	
27	〃	南垣外遺跡	〃	縄・弥	台地	縄文中期土器、凹石、弥生土器	
28	〃	天王原遺跡	〃	平	〃	土師器	
29	〃	向垣外遺跡	塩ノ井	縄・弥・古・平	〃	土器、石器	
30	〃	山の神遺跡	〃	縄・弥	〃	加曾利E式、土偶、弥生後期土器	
31	〃	内城遺跡	北殿	縄・古	平地	磨石斧、子持勾玉	
32	〃	天伯遺跡	塩ノ井	縄・弥・平	台地	住居跡多数、土器・石器多数	昭和42年調査
33	〃	上人塚遺跡	〃	縄・平	〃	中期土器、打石斧、須恵器	
34	〃	垣外遺跡	〃	縄	〃	勝坂式	
35	〃	柴宮遺跡	北殿	縄	〃	中期土器、打石斧	
36	〃	塩ノ井遺跡	塩ノ井	弥	平地	後期土器	平成6年調査
37	〃	東垣外遺跡	北殿	弥・古	台地	土器	
38	〃	西垣外遺跡	〃	縄・弥・平	平地	縄文石斧、石剣、弥生・平安の土器	
39	〃	秋葉神社付近遺跡	〃	縄・弥	台地	縄文石剣、弥生土器	
40	〃	西富士塚遺跡	〃	〃	〃	〃	
41	〃	宮の上遺跡	南殿	縄・平	〃	縄文石器、須恵器、灰釉陶器	平成元年調査
42	〃	羽場遺跡	田畑	縄	〃	中期土器、打石斧	
43	〃	田畑遺跡	〃	縄	〃	加曾利E式、打石斧	
44	〃	神子柴遺跡	神子柴	旧・縄・平	〃	旧石器各種、火葬墓、灰釉陶器	昭和33年調査
45	〃	高根遺跡	大泉	縄・平	〃	竪穴址3、土器、陶器	昭和47年調査
46	〃	箕輪遺跡	久保 塩ノ井	弥・古・奈・ 中～	平地	水田遺構、木杭、木製品、陶磁器	昭和57～ 平成6年
47	〃	北垣根遺跡	北殿	弥・古・平	台地	弥生土器、須恵器、土師器	平成2年調査
48	散布地	南部小学校遺跡	沢尻	縄・平	〃	中期土器、土師器	平成5年調査
49	包蔵地	久保上ノ平遺跡	久保	縄・弥・奈・平	〃	中期土器、住居址多数、特殊遺構、 周溝墓等	平成7年調査

『南箕輪村誌』から

縄文時代 今から1万年～2300年前(本村で多く出土する中期は今から5000年～2300年くらい前)

弥生時代 今から2300年～1600年くらい前

古墳時代 今から1600年～1300年くらい前

奈良時代 今から1300年～1200年くらい前



# 七 南箕輪村にあった横井戸一覽表

(平成24年10月作成(松澤))

番号	地区	名称 または 所在	起工 あるいは 竣工	遺構・遺物・現状 等	村誌 所載	その他
1	久保	天王上		縦穴1、出口の石垣、水少々		
2		春日道下		高さ1.5m、幅1.2m、水無		
3		喜多屋下	昭和4年	高さ1.5m、幅60cm		
4	北殿	向垣外	嘉永年間	水神祠、縦穴、掘割水路、 活用中	○	古文書あり
5		亀徳水	明治31年	長さ170間、幅1尺3寸、 水神碑、石組み、活用中、 2町歩用水	○	「あらかじめ 足りて うれしや この清水」
6		斉		2町3畝の用水、活用中(生活)	○	
7		出頭		4町3反の用水、水あり	○	
8		八幡社中	明治4年		○	
9		宮ノ上山林	明治31年		○	
10		桜ヶ丘	明治30年	2町歩の用水、水無し、出口	○	
11	南殿	八幡入	明治26年	横穴300間、4町1反、記念碑、 活用中	○	
12		上河原	大正4年	記念碑、活用中		
13	田畑	堤山上	明治10年	掘削(横穴・掘割とも)150間、 水神社有、2町3反の用水・生 活用水、石組	○	
14		堤山下	明治15年	1町1反歩の用水、水有	○	
15		吉原	明治31年	横穴・高さ5尺5寸、幅3尺、 遺構無し	○	
16	神子柴	ウラダテ	明治32年	8反の田用水、水路・水有り	○	
17		鳥居原	明治33年	飲用、横穴跡、幅2尺、水無	○	1ha
18		芋ノ田	明治38年	出口の石組、水神碑・記念碑、 水有		
19	沢尻	南原林	明治14年	水路、水少々	○	
20		和手垣外				未調査
21	大泉	大新	明治3年	出口穴、水神碑、8反用水、水無	○	溜め池が あった
22		西村	明治26年	横穴350間(石積140間・高さ 3尺)、1町8反用水、水神碑、 活用中	○	
23		ムクリ	明治33年	遺構保存、268間掘る、 水わずか	○	3ha
24		酒井	大正14年	水路有、水わずか	○	
25		東垣外	明治16年	横穴151間、掘割100間、 遺構無し、記念碑有	○	3ha

## あとがき

この本の元になった『南箕輪の史跡』は、『南箕輪村誌』より前に出されたこともあって、欠けている面や・誤りが指摘されてきました。また、漢文や難しい言葉が使われていて読みにくい面もありました。そこで編纂委員会では「中学生にも読めるような本にしたい」と願って検討を重ねて来ました。

わたしたちは、若い皆さんにも親しんで貰えるようにと内容を広げ、史跡を今の社会へ結びつけ、出来るだけ分かりやすいことばを使って説明するように心がけるとともに、西暦やルビを加え・カラー写真や参考資料も採り入れました。

南箕輪村は、人口が増え・村の姿も大きく変わって来ています。そんな中で幾つもの貴重な遺跡の発掘もあって、村の歴史に興味を持つ人々も増えています。この本が出版された機会に、郷土の歴史に親しんでいただく人が増えれば幸いです。また、改めて史跡を尋ねてみますと風化・人為的放置により消えてしまふことが心配される所もあり保存を呼びかけたいと思います。

本書は、正確に書くために資料を調べ直し・現地を再調査し・写真を撮り直しましたが、まだ不十分な面があります。それは今後の研究を待ちたいと思います。終わりに調査や資料・写真提供にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

『南箕輪の史跡の話』編纂委員会一同

『南箕輪の史跡の話』執筆者（編纂委員）

全 村 松澤英太郎（委員長）  
 久 保 白鳥喜一郎  
 塩ノ井 征矢 鑑  
 北 殿 小澤 敏美  
 南 殿 山崎 光広（松澤英太郎）  
 田 畑 松澤英太郎  
 神子柴 原 旭一（副委員長）  
 沢 尻 清水 治  
 大 泉 原 孝寿  
 南 原 友松 瑞豊（松澤英太郎）  
 大 芝 友松 瑞豊（松澤英太郎）  
 北 原 原 旭一  
 中 込 松澤英太郎  
 資 料 松澤英太郎  
 写 真 スタジオ結 他

『南箕輪の史跡』執筆者（アイウエオ順）

有賀 士郎 有賀 殿夫 伊東 宏 上田 喜計  
 宇治 由一 春日 正 加藤千代人 唐沢 勇  
 唐沢 正国 北原 哲郎 倉田 高明 倉田 友雄  
 清水 一清 清水博之助 清水 守人 杉沢 崇  
 征矢 鑑 征矢 憲 高木 清幸 武田 三郎  
 立石 威 中沢 和夫 日戸 武彦 馬場 利光  
 堀 平夫 原 正寿 藤森 侖 堀 巖  
 堀 知哉 松澤英太郎 耳塚 正秋

南箕輪の史跡の話

平成三十一年三月 印刷  
 平成三十一年三月 発行

編 纂 南箕輪の史跡の話 編纂委員会  
 発行人 南箕輪教育委員会  
 印 刷 株式会社プリンティアナカヤマ  
 南箕輪村神子柴七七三一一

